

327
216

日本水産捕採誌

第四

農商務省水産局

327-216

日本水産捕探誌

第四

第二編 釣漁業

目次

第一章 總論

第一節 鈎

第二節 縵絲

第三節 餌料

第四節 竿

第五節 泛子

目次

44.10.11

八二

七四

五四

三一

四

一

一

目次

第六節 沈子……………八六

第七節 絲卷……………九一

第八節 繩器……………九二

目次終

日本水産捕採誌 中卷

農商務省水産局編纂

第二編 釣漁業

第一章 總論

凡魚類を漁獲するの器具中網罟に次ぎて重要なを釣具とす抑釣漁の事は由來最も舊く日本書記に火々出見尊の皇兄火酢芹命の釣鉤を失ひ給ひしと又事代主神の出雲國三保崎に在して釣魚を以て樂みとし給ひしと等見えれば遠く神代の時早く已に行はれしのみならず天孫至貴の身を以てすら親から之を爲し給ひしなり後世に及んでは仍ば貴紳の間にも行はれしにや續日本後記承和八年の條に四月唐申從四位下百濟王慶仲卒云々世人謂爲有詹公之術衆人漁者興慶仲臨川

沈緝魚之唼嚼。專吞慶仲之鉤。舜息間引得百餘。など見えたり。詹公とは淮南子原道訓に夫臨江而釣。曠日而不能盈羅。雖有鉤箴芒距。微給芳餌。加之詹何娟嬛之數。猶不能網罟爭得也。注に詹何娟嬛。古善釣人名とあるより出てたるものなり。而も是等は遊漁に屬す今日に於ては釣漁は是れ國家經濟上重要な職業にして現に内國需用魚類の第一に位する鯉の如き海外輸出水産物の首魁たる錫に製する柔魚の如き又西洋諸國に於て最も嗜好する鱒の如き其漁法は概ね釣にして網を用ゐるか如きは十中の一にも及ばず蓋し漁業上釣を以てすると網を用ゐるとの得失長短は専ら其魚類の性質に關するものにして即ち前に述べたる鯉、柔魚、鱒其他は釣を以て利ありとするに由り専ら之を爲とも鯉、鱒の如きは釣に利あらざるを以て皆網を用ゐるの類なり若し夫れ釣、網兩者共に用ふべき魚に至ては其多獲なるは釣は固より網に及ばずと雖其漁獲の魚の味を論するに及んでは釣りたるもの、美なるは網せる魚に優れるものあり隨て價も亦幾分の貴きを致す故に其魚の性質を詳にして彼此應用すべきなり而して其釣法を大別すれば三様あり竿釣、手釣、繩釣是なり竿釣とは竿頭に綸を結び其末端に釣を繋ぎ鉤より少しく隔て、沈子若くは浮

子を附け鉤の尖端には餌を刺して水中に投じ竿を把持して魚の餌を衝むを窺ひ綸を引き竿を揚げて以て釣獲するを謂ふ但た中には沈子、浮子を缺き或は鉤に餌を装せず別物を以て餌に擬するあり手釣とは數十尋の綸の末端に鉤を繋ぎ沈子を附け之を篋に收め置き漁場に至り鉤に餌を装し水中に下して後綸を直ちに手にし魚來りて餌を衝み去らんとするとき手に應ふるを以て綸を引き魚を獲るを謂ひ繩釣とは一條の長き幹繩に數條の技綸を垂下し綸毎に鉤を附し餌を装して之を海中に引き延べ置き時を計りて引き揚げ罹れる魚を捕獲するを謂ふ之を延繩又長繩とも稱す凡て是等の用法の詳なることは各類を別に記るすに方りて其卷首に説くべし

古より釣具に六物の稱あり按ずるに是れ宋の邵堯夫か漁樵對問に漁者曰。天物者竿也。綸也。浮也。沈也。鉤也。餌也。一不具則不可得とあるより出しものならん然れども是れ止水若くは緩流に於ける尋常竿釣に言ふべくして手鉤繩釣は前述の如く竿を要せず浮子も亦用ゆるあり用ひざるあり餌は亦最も必要なりと雖時としては餌を用ひず或は鉤の形狀を餌料に擬して釣る所の擬餌鉤あり夫れ斯の如くなる

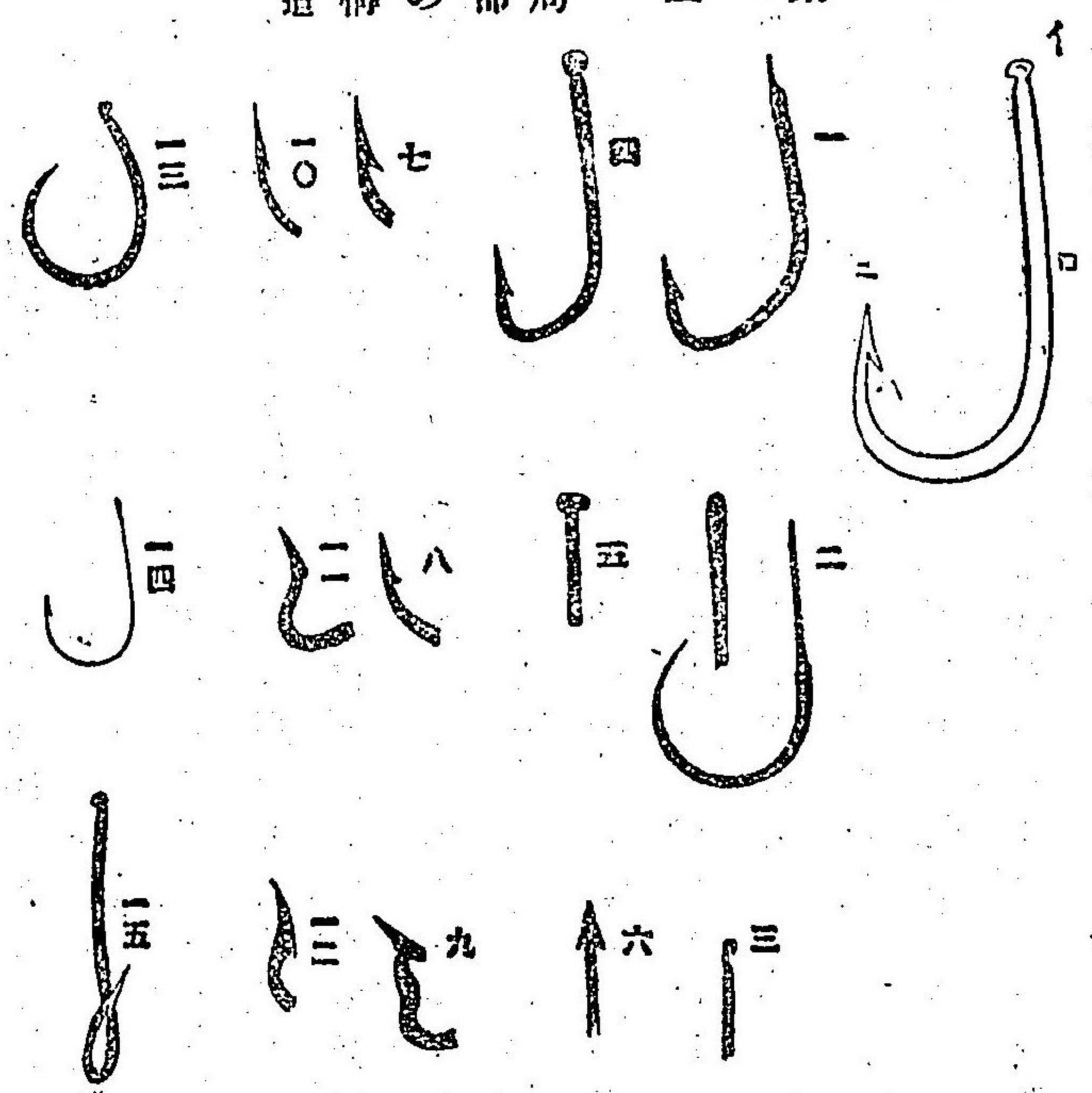
を以て必しも一概に論定す可からず今釣漁に係る要具の梗概を左に掲ぐ

第一節 鈎

鈎は神代記に「知」と訓す即ち都利の急呼にして都利は伊乎都利の義今の都利婆利なり今繪に鈎の接する處を知毛登と謂ひ鈎を納むる器を知計と稱ふ知毛登は即ち鈎本知計は即ち鈎筭なり以て知は鈎の古訓にして其遺稱の存するを知る可し然れども今俗單に波利と稱す蓋し都利婆利の約まりたるなり波利とは東雅に翻驛名義集に什物婆利或は盡句奢翻曲鈎とあるを引て梵語なりと云へり字書を檢するに説文に鈎曲鈎也玉篇に鈎鐵曲也釋文に鈎鈎也など見ゆ狩谷望三の和名抄箋注には説文鈎訓曲鈎謂其形曲句以鈎取物者以爲鈎魚鈎者轉注也と云へり然は則「かぎ」と「はり」と固より同字にして之を分別すべき字なし鈎の字あれども是も玉篇に俗の鈎の字とあれば別字にはあらず然るに漁業者には「はり」「かぎ」共に用ゆるを以て之れを記さんには字に區別なきときは頗る混雜し易し因て本書には「はり」に鈎の正字を書し「かぎ」には鈎の俗字を書して以て之を分つ蓋し閱讀の便に従ふのみ

抑鈎は釣具中第一の要具にして漁獲の多寡は固より漁者其人の巧拙熟否に在りと雖亦鈎の良否にも由らすんばあらず其材料は鐵鋼真鍮銅の四種なれども就中尋常の鐵を用ゆるもの十中の七八とす而して其中に又生鐵と藥燒との二種あり鋼は殊に猛性なる大魚を釣るに用ひ真鍮は錆の生ずるを深く忌むものに用ひ銅は或る地方に於ける鮪釣の孫鈎と稱するもの其他僅に一二種に用ひるに過ぎず凡て鈎は大抵漁業者が強風大雨等に由て休業するが如き其餘暇ある時に於て自から製作するを多しとすれども鋼製の如きは其地方の鍛冶職の者に託して作らしむることあり又尋常の鐵鈎に於ても藥燒は漁者自から製し難きを以て別に之を製作する職工あり又之を商ふの商家あり乃ち漁者其商家に就き買て使用するを常とす東京には鈎鈎問屋と稱するもの現今七家あり大阪に於ても若干戸あり鈎を製出するの地は播磨國加東郡邊を最とすれども其品は粗なり原材は主として但馬國二方郡濱坂産の線鐵を用ふ又土佐國高知市廣瀬丹吉は從來鈎を製出し丹吉鈎の名風に世に著はる其製甚だ佳なり東京にて製するものは上品なれども遊魚に用ひるもの多し其原料は概ね西洋船載の線鐵を用ゆ

造構の部局 四一

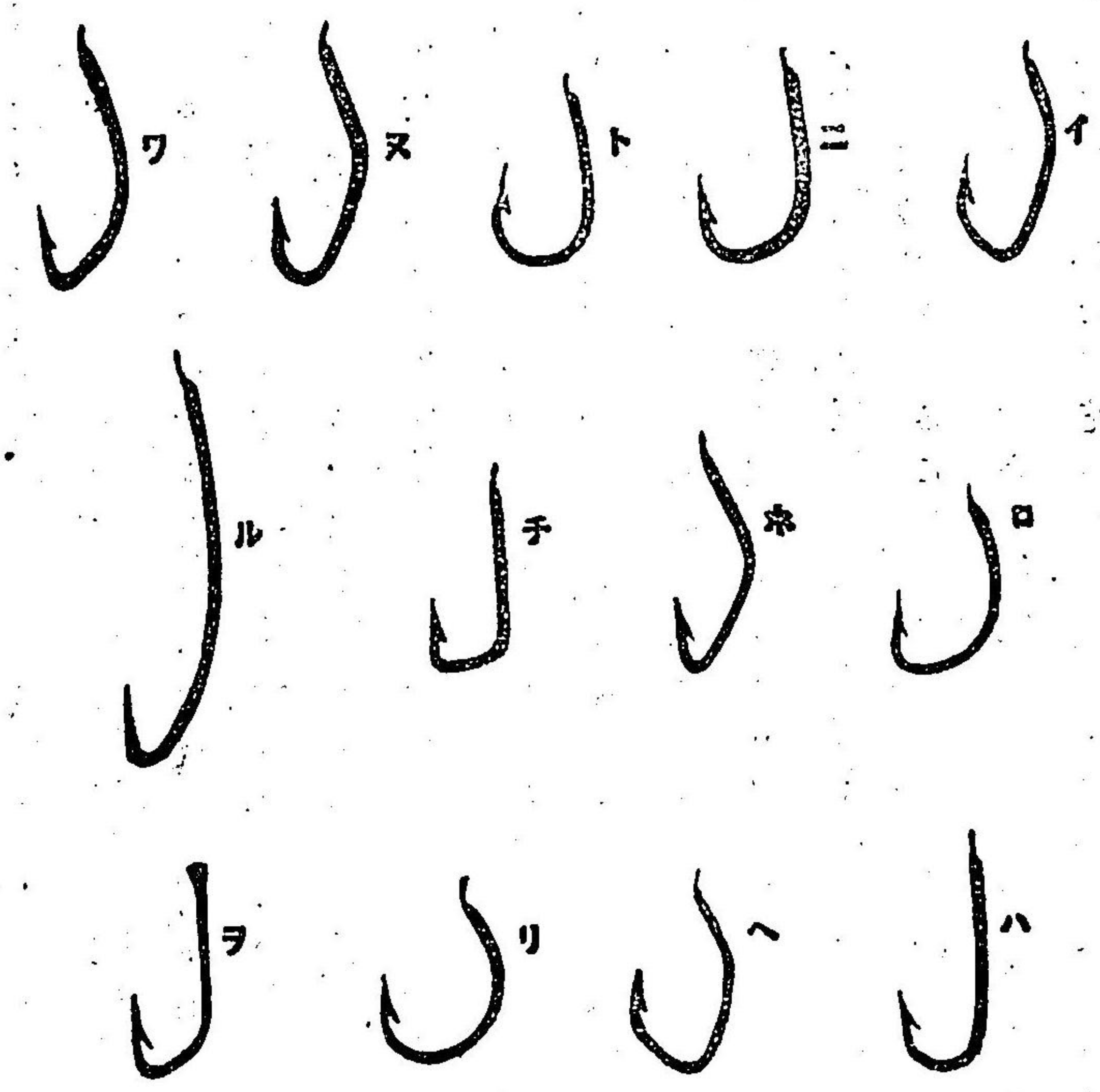


- イ 東京にてカヘシ西國にてシビリ又シギレ土佐にてシユモク
- ロ 軸
- ハ 鉤
- ニ 尖
- 一 通常のツアシ
- 二 短冊ツアシ
- 三 摺込カヘシ
- 四 横ツアシ
- 五 撞木ガヘシ
- 六 ケンツキ
- 七 普通の鐵
- 八 東國にて漁者が自ら製作する釣鉤の鐵
- 九 越後國鮫釣鉤の鐵
- 一〇 關東にて鮫鯛手鐵の鉤の鐵
- 一一 北國筋の鉤の鐵
- 一二 越中國鮫鮪釣鉤の鐵
- 一三 鐵なき鉤(五平太鉤)
- 一四 六輪
- 一五 ひれり(正面)

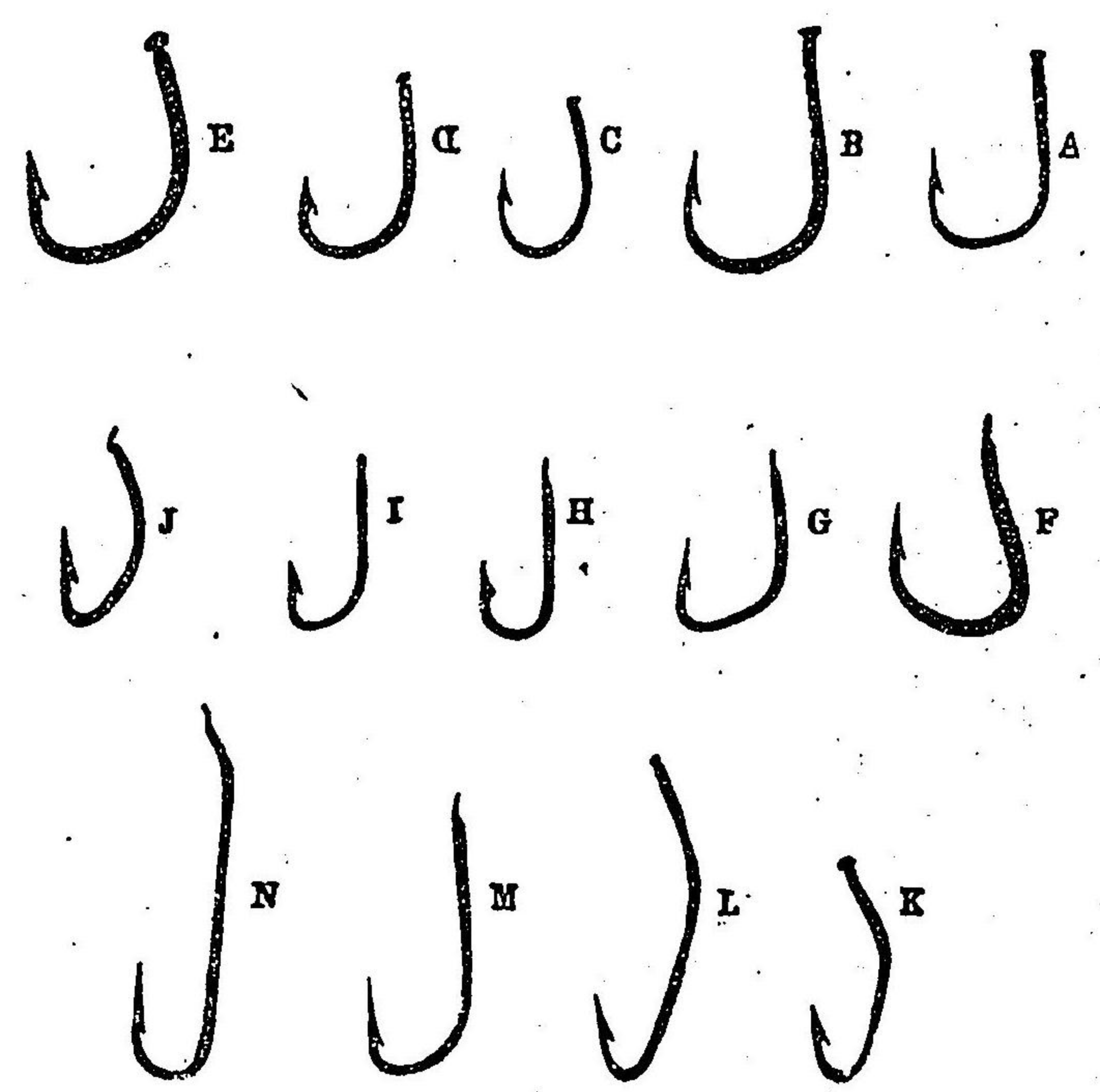
凡て鉤は綸を結ぶ方を軸と云ひ其綸を止むる處をツアシと云ふツアシにも通常のもの、外横ツアシ、短冊ツアシ等あり其左右より鉤を以て磨り込み撞木状にしたるものをシユモクガヘシと稱へ其一方より磨り込みたるものをスリコミカヘシと稱ふ今其局部を示せば第一圖中一より六に至るもの即ち是なり

鉤の尖頭は銳きを貴ぶ其下の内部に當りて鐵あり東京の方言之を「アグ」と云ふ地方に依り「イケ」安房及「イカシ」豆「アギト」野上「カギ」仙「モドリ」勢「カ・リ」長「エギ」土「メガリ」肥「カスミ」後「シタ」州九等の稱あり是れ罹りたる魚として脱し去ること能はざらしむる爲めに設くる者にして亦銳きを要す而して其形狀は一ならず今二三を示すときは第一圖七より十二に至るもの即ち是なり

按ずるに鐵は距の字を以て之に當つるもの往々あり蓋し鶏の距に象れるなり然れども字書を檢するに玉編に鐵鉤逆鉤とあり字貫に無鐵之鉤不可得魚際得べき魚もあれどありとあるに善く當れり因て本書には鐵の字を用ふ
鐵に大なるものあり細きものあり細尖なるは多漁の時に當り罹れる魚を取り收むるの手廻しには一得あれども魚を脱さる點に至りては固より大なる者に及



- イ 角形
- ロ 行田形
- ハ 田邊形
- ニ 丸形
- ホ ミコシ形
- ヘ 角カイツ
- ト 蠶形
- チ イナヅマ
- リ 丸カイツ
- ヌ 狐形
- ル カキゲン
- ナ 置鉤
- ア 袖形



- ア アマ形
- Ｂ イセアマ形
- Ｃ イソアマ形
- Ｄ アチビ形
- Ｅ ワサナベ形
- Ｆ フノムミ形
- Ｇ ミコシ形
- Ｈ シツリ形
- Ｉ ヒキ形
- Ｊ 郡山形
- Ｋ イナヅマ形
- Ｌ エフ形
- Ｍ 海殿釣カケマヘ
- Ｎ 海殿釣カケヅリ

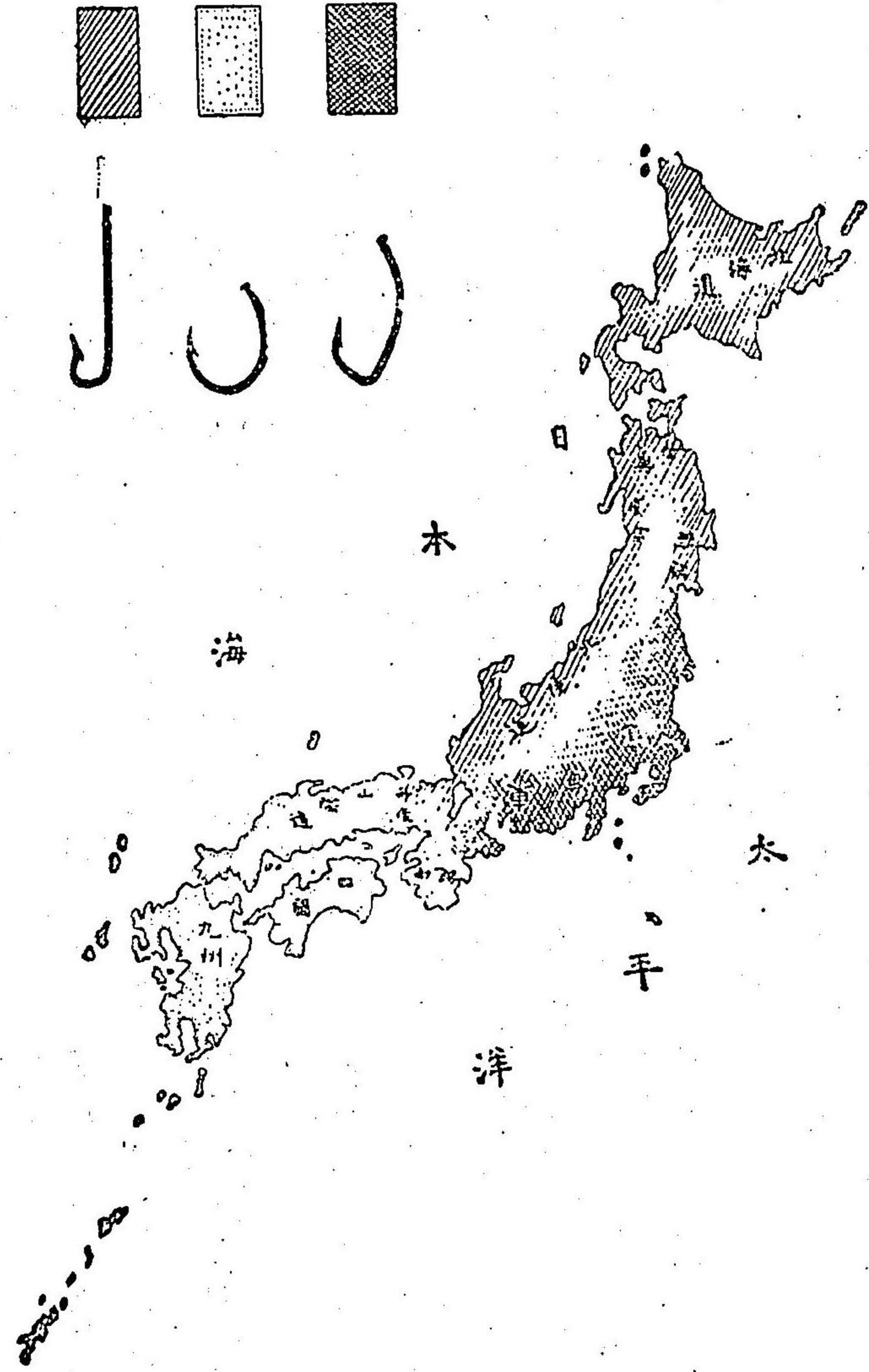
ばす又或は之に反して鐵なきものあり是れ其魚の種類に應ず又淡水漁に使用する稍や大形にして線細きものあり之を大輪オホマと稱ふ又延繩用の鉤に尖頭を横に曲げたる者あり之を東京にて「ヒネリ」九州にては「テンヂク」と稱ふ是れ其魚の口中に緊く穿ち以て脱去を防がんが爲めなり又尖頭を軸の方に向けて造りたる者あり是れ元來延繩釣は魚の罹りてより繩を引揚ぐるまでには多少の時間を移すものあれば其間に於て軋もすれば魚の鉤を脱して逃るゝことあるが故に之を防がん爲めなり共に第一圖中十三乃至十五に示すが如し初めて是等の鉤を目撃する人は斯くの如きもの奈何ぞ用を爲さんやと疑ふものもあるべしと雖魚は自から魚の性ありて餌を銜むや否直ちに逃れ去らんとするものなれば其際綸に引かるゝ様さまに忽ち口端に罹れるに至るものなり

前來說く如く鉤の形は種々にして殊に人々好む所に由り又は地方の慣習に依り異にする所あるが故に其形狀を仔細に視分くるときは常に千差萬別のみならずるなり然れども東京に於て普通行はるゝ鉤には其形狀に依り自から名稱あり即ち角形、丸形、鐙形、狐形、袖形、行田形、「ミコシ形」、「イナヅマ」、「カキダシ」、「田邊形」、「角カイヅ」、「丸カ

イヅ置鉤等あり

播磨より製出する鉤には東京の鉤と名稱形狀共に同じきあり名は同じくして形異なるあり名も形も東京に無き所のものあり東京にありて被地になきものありその大概を叙すれば「アマ形」、「イセアマ形」、「イソアマ形」、「アラビ形」、「ワサナベ形」、「ハヘコミ形」、「ミコシ形」、「シツリ形」、「ヒキ形」、「郡山形」、「イナヅマ形」、「エド形」、「海鰻釣カケマヘ」、「同カケ釣」丸形、狐形、袖形、行田形、置鉤等なり此の中「ミコシ形」、「イナヅマ形」は名同じくして形異なるものなり「シツリ形」は東京にて「シツ、リ」と稱するものあり丸形以下五種は名も無き所のものとす今前記東京播磨兩地の鉤形を示せば第二圖及第三圖の如し鉤の形は右に示す如く種々ありと雖今之を全國に就て見る時は大抵三種の原形に歸するが如し則ち角形、丸形、軸直の長形是なり其角形は紀伊國牟婁郡以東の東海に行はれ丸形は紀伊より西南諸州及び日本海に臨める地方に於ては丹後邊より以西は悉く此の形のものを用ゐる若狭邊より以北の地方及び三陸兩羽にては概ね軸直の長形を用ふ之を圖示すれば第四圖の如し然れども稀には各種を混用する地方もあり但し是れ専ら鹹水漁に就て云ふものなり淡水漁に至ては丸形を使

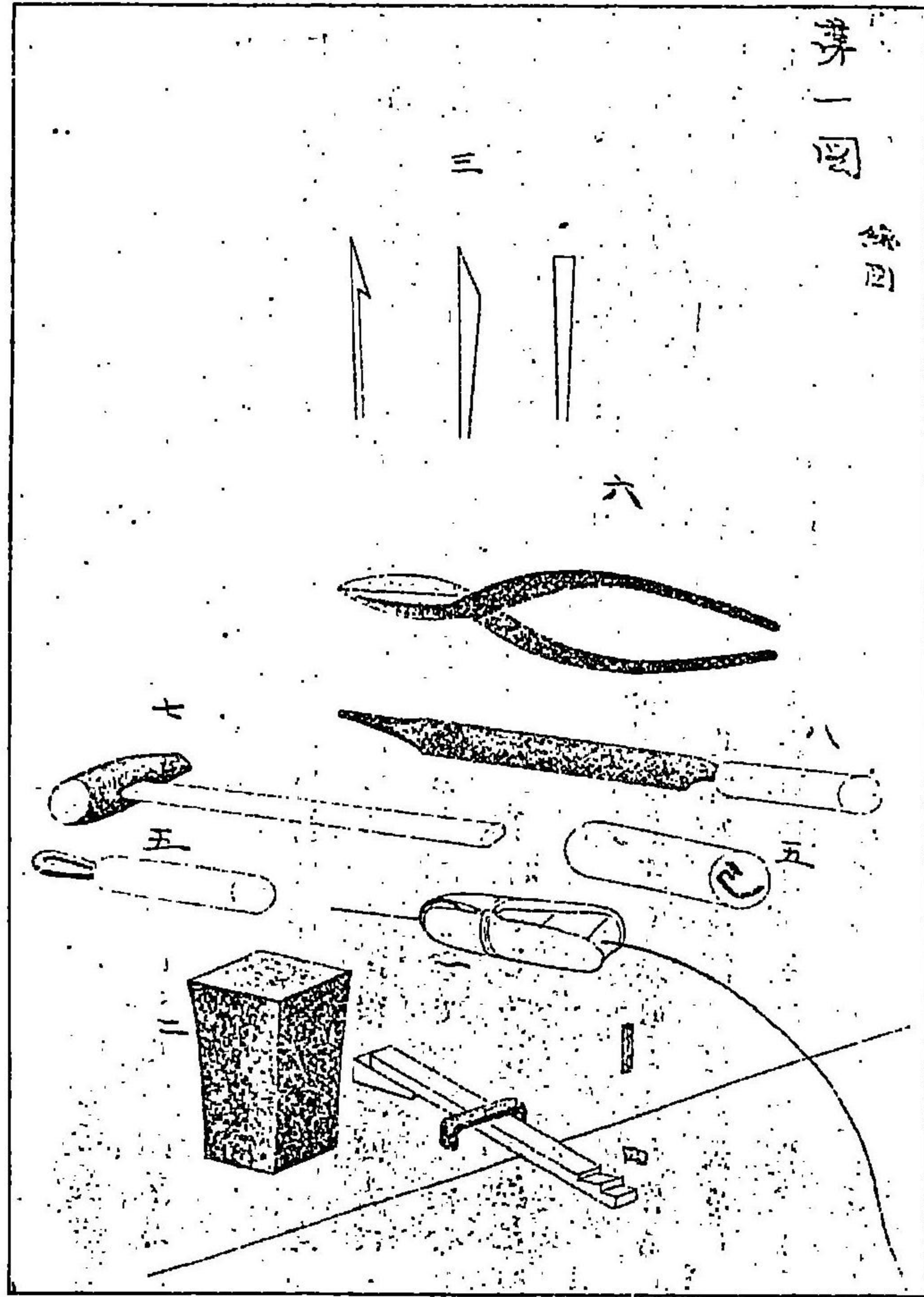
布分の形状鉤 圖四四



用すること全國一般なるが如し

鉤の大小と細太は東京にては線鐵の細太に應じて形の大小を定め其極小なるを三厘と云ふ此の稱呼は線鐵一尺に對する重量を指すなり是より以上五厘六厘七厘八厘一分一分五厘(又一分半と云ふ)二分二分五厘(又二分半と云ふ)三分四分五分六分七分八分一匁一匁五分二匁三匁等十餘種あり普通賣品には九厘及九分のものなし七厘七分も亦製すること稀なるあり西南諸國には東京と同じく何匁何分何厘を以て稱ふるものあり或は又太さに就ては大の何番中の何番、小の何番と稱へ形の大きは何寸何分と謂ふもあり何寸何分とは鉤を眞直に伸ばしたる寸法なり例へば大何番の何寸何分、中何番の何寸何分と云ふの類なり今東京の稱呼に依り鉤の順序を示せば第五圖の如し(但實形の七分ノ五とす)鉤を製作するに漁業者の自からするものに於ては固より一定の順序あるにあらす其專業とする職工と雖地方に依り其順序方法些の差異あり今東京にて製作する處を記すれば第六圖に示す各種の機械を要す其順序は先づ線鐵を(一)の「クミ」に挟み其先きを(二)の「カナシキ」の上に置き鐵槌を以て打潰し其扁平になりたる部を(三)の如く剪刀にて斜に切斷し更に之を(四)の木の端に當て鋸を以て鉤の先端を作

目器造製 四六四

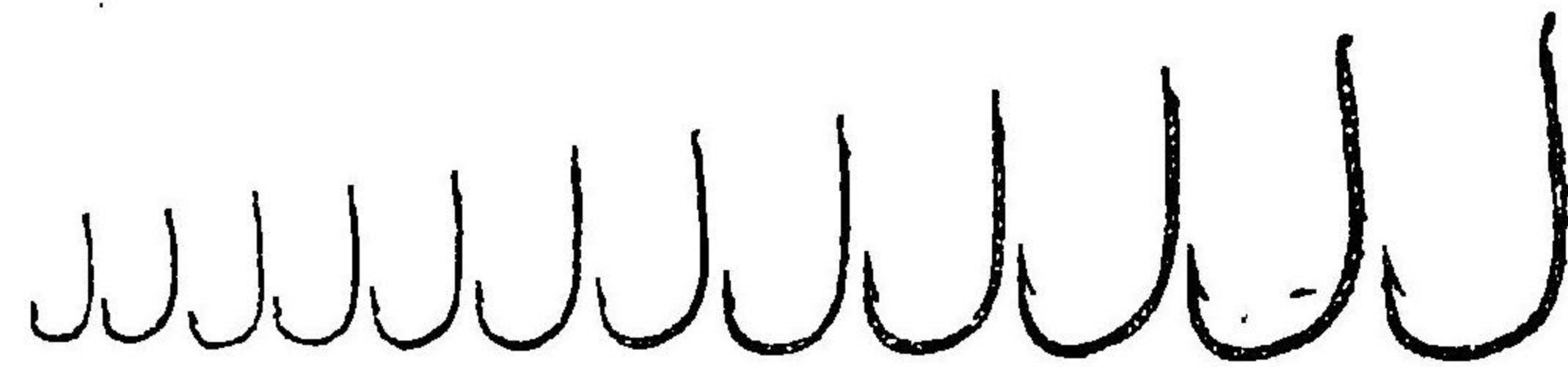


一 金数
二 鉤の尖端を
三 厘定したる
四 鉤の尖端を
五 整形したる
六 鉤曲
七 鉤曲
八 鉤曲

日本水産捕採誌

十五

形實の鉤 四五四



一 八分
二 七分
三 六分
四 五分
五 四分
六 三分
七 二分
八 一分
九 一分五厘
十 一分五厘

十五號
十七號
十八號
十九號
二十號
二十一號
二十二號
二十三號
二十四號
二十五號
二十七號
三十號

大 中 七 番
大 中 八 番
大 中 八 番
大 中 九 番
大 中 九 番
大 中 九 番
小 十 一 番
小 十 二 番
小 十 三 番

釣漁業 總論

此の鉤を製する四洋
鉄線の番號左の如し

又之を別四の大小何番と稱ふるものに對照
するに未だ精確を待たれども大凡左の如し

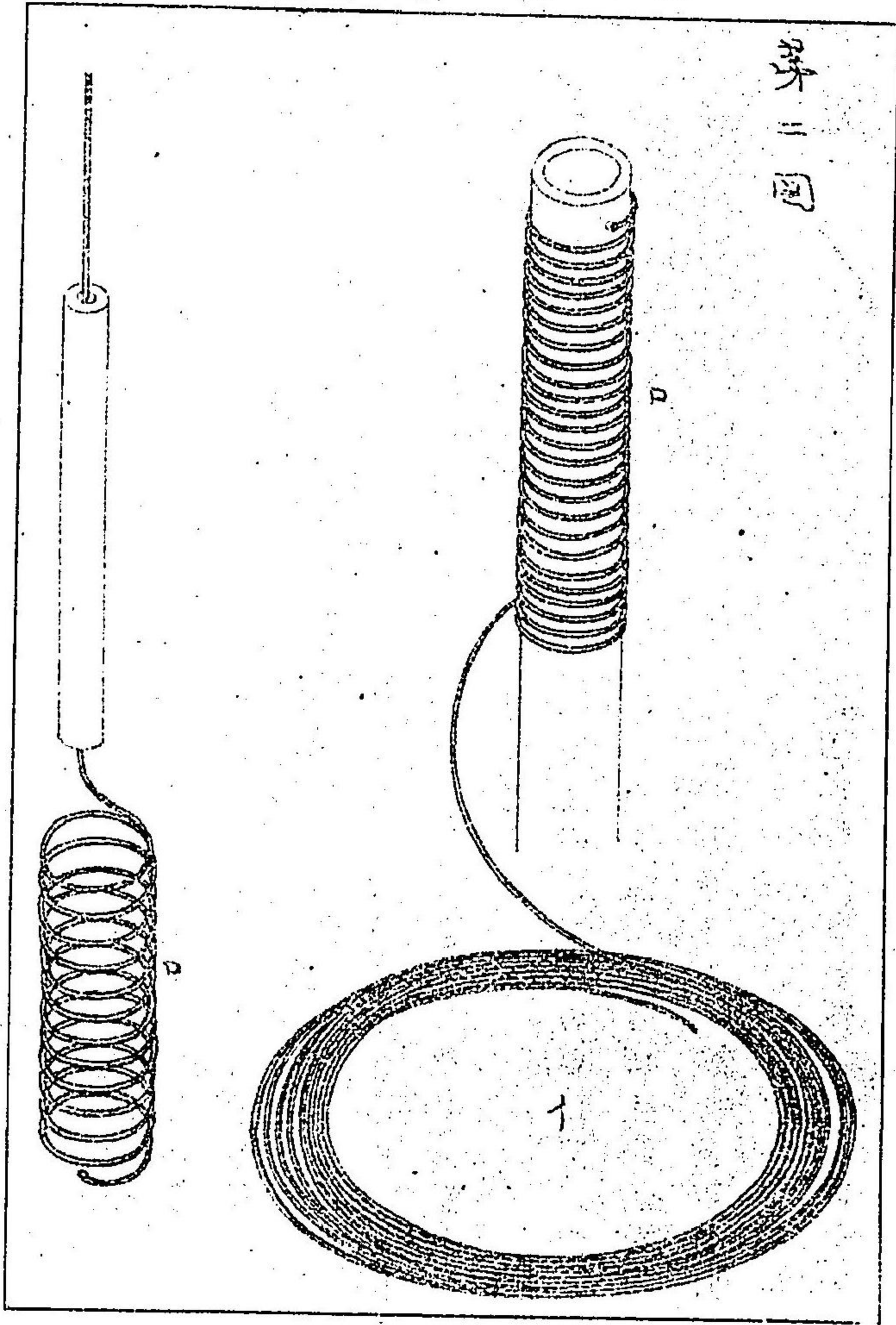
十四

り而して(五)の鉤曲げ器にて形を作り後(六)の剪刀を以て切斷し其切放ちたる一端を(七)の槌と(八)の鑢とを用ゐる適宜に軸尖を作り爰に於て生鐵の製成る鉤曲げ器に二様あるは一は鐵なきものを製するに用ゐるなり若し此の鉤を更に樂燒にせんと欲せば其方法は下に解釋する如くすべし

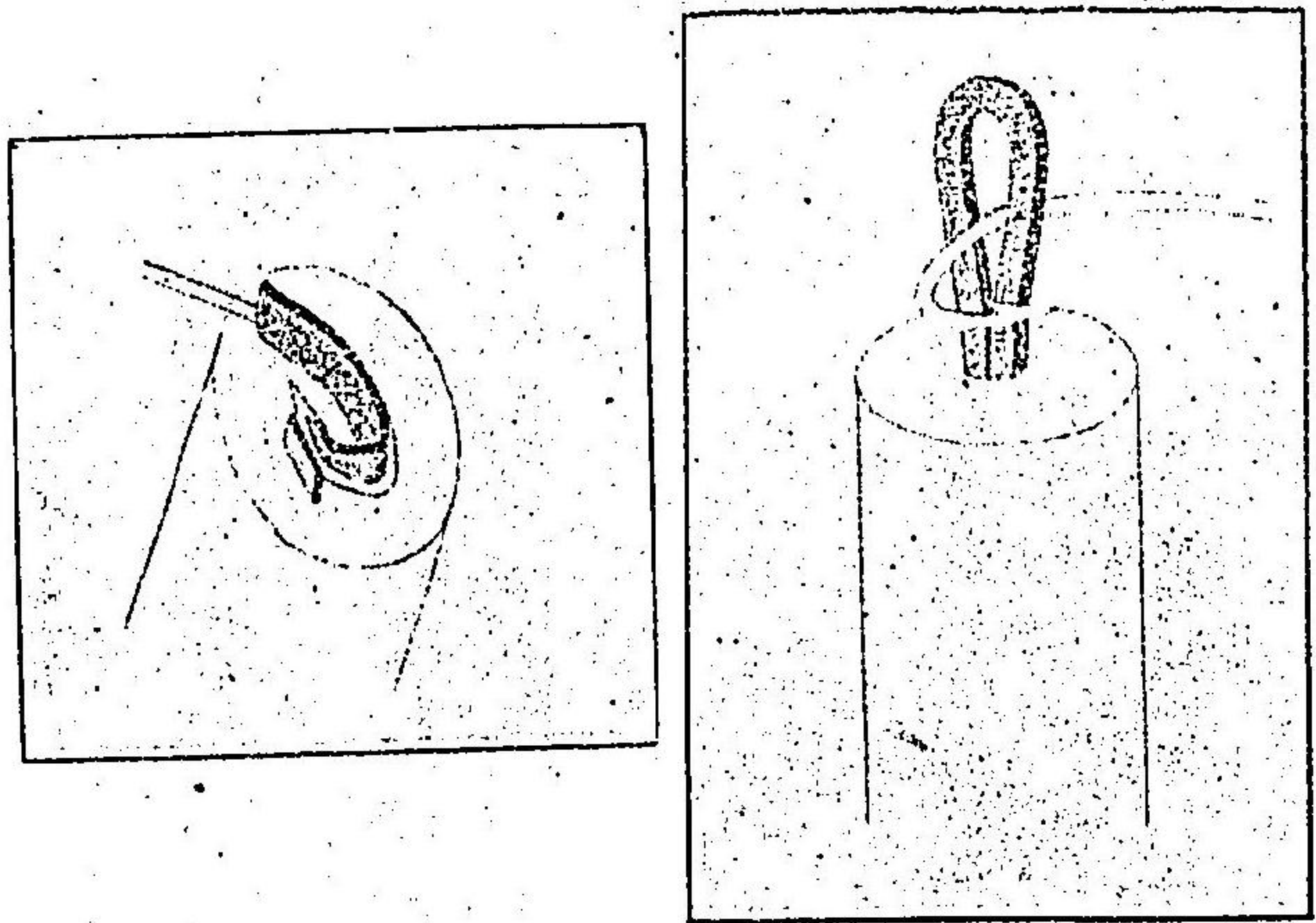
關西にては多くは初め先づ鐵線を一たび竹管に捲き固め後更に之を細き竹管に通じて鉤の尖頭を作るなり其初めに竹管に捲くは鐵線の圈曲大にして第七圖(イ)の如くなるを更に其圈曲を縮小して(ロ)の如くにし以て取扱に便ならしむるに在り後細管に通すも亦取扱の便なると一には手汗をして多く鐵線に附着せしめさらんか爲めなりと云ふ

以上普通の鉤の製作法なれとも十五六乃至三十余の大鉤を作るには少しく異なる所あり其法最初鉤の大きさを許りて其二個分連續したる長さオカネに鑢を以て線鐵を打切り後其中央を斜に兩斷し而して初めに打切りたる方を「クミ」に挟み兩足にて緊しく抑へ其斜に切りたる方を豫め設けある臺の溝に當て右手に大鑢を執り左手を鑢の先端に加へて兩側より磨りて粗は尖頭を作り且鐵の部分を粗糙に作

造製の鉤 圖七第



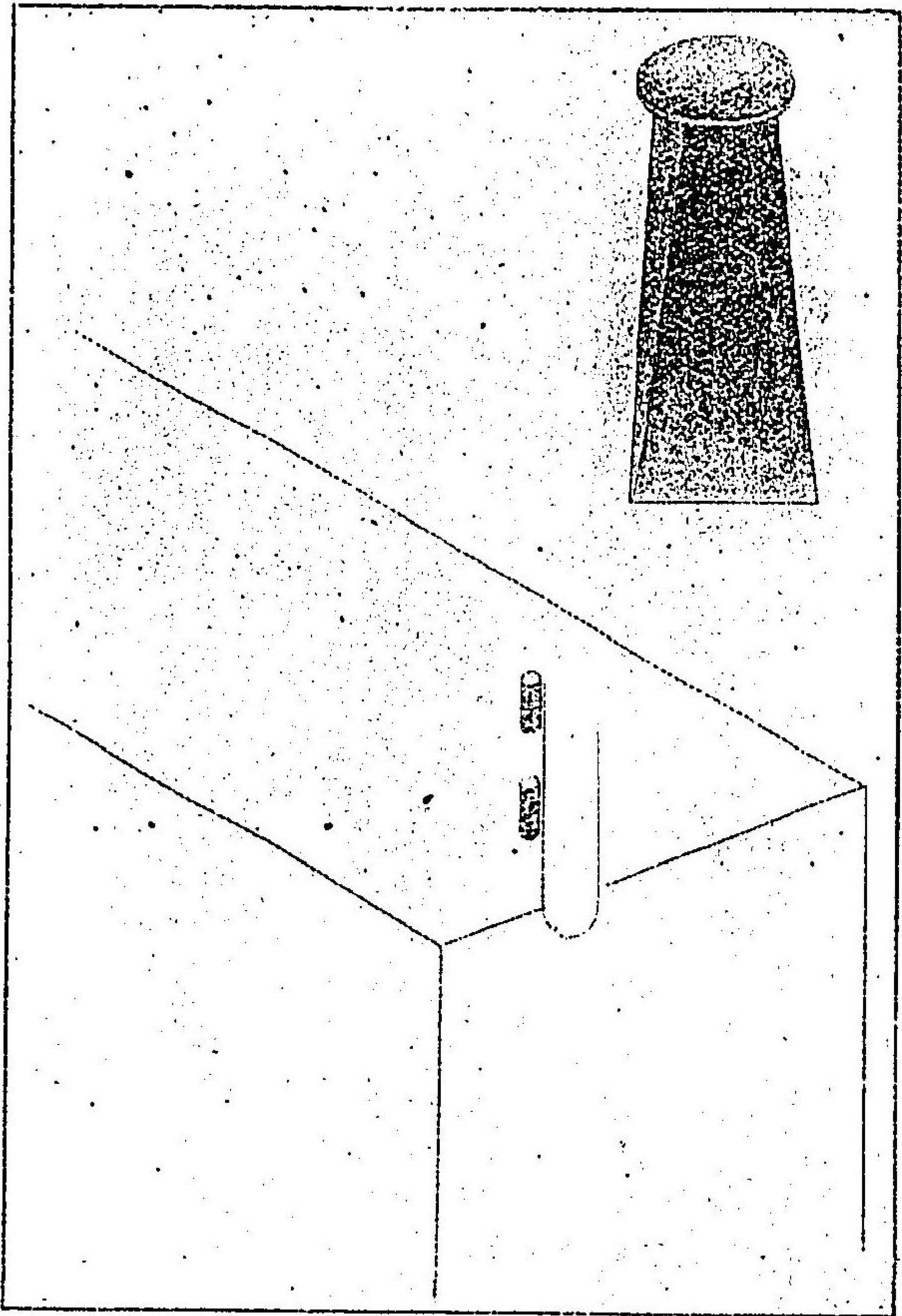
曲 鈎 圖 八 第



り次に稍や小さき鉤を以て錢の形を整へ畢りて更に之を二個の鈎曲器チブに掛け兩手を加へて下部の勾曲を作り其勾曲せし部分を「クミ」に挟み臺の溝に當て兩足にて抑へなから大鉤を以て軸頭の形を作るなり但し角形の鈎を作るときは猶一回鈎曲器に掛け好む所の勾曲となすなり

鈎を樂燒にするの要は勢力強き魚又は齒の鋭き魚を釣るに生鐵鈎を用ひる人は魚の反撥するに隨て鈎の勾曲容易に伸ふるを以て之を防かんとするにあり故に其製適度を得されは折るゝことあるを以て其用却て生鐵にも劣る之を試

具 器 造 製 鈎 圖 九 第

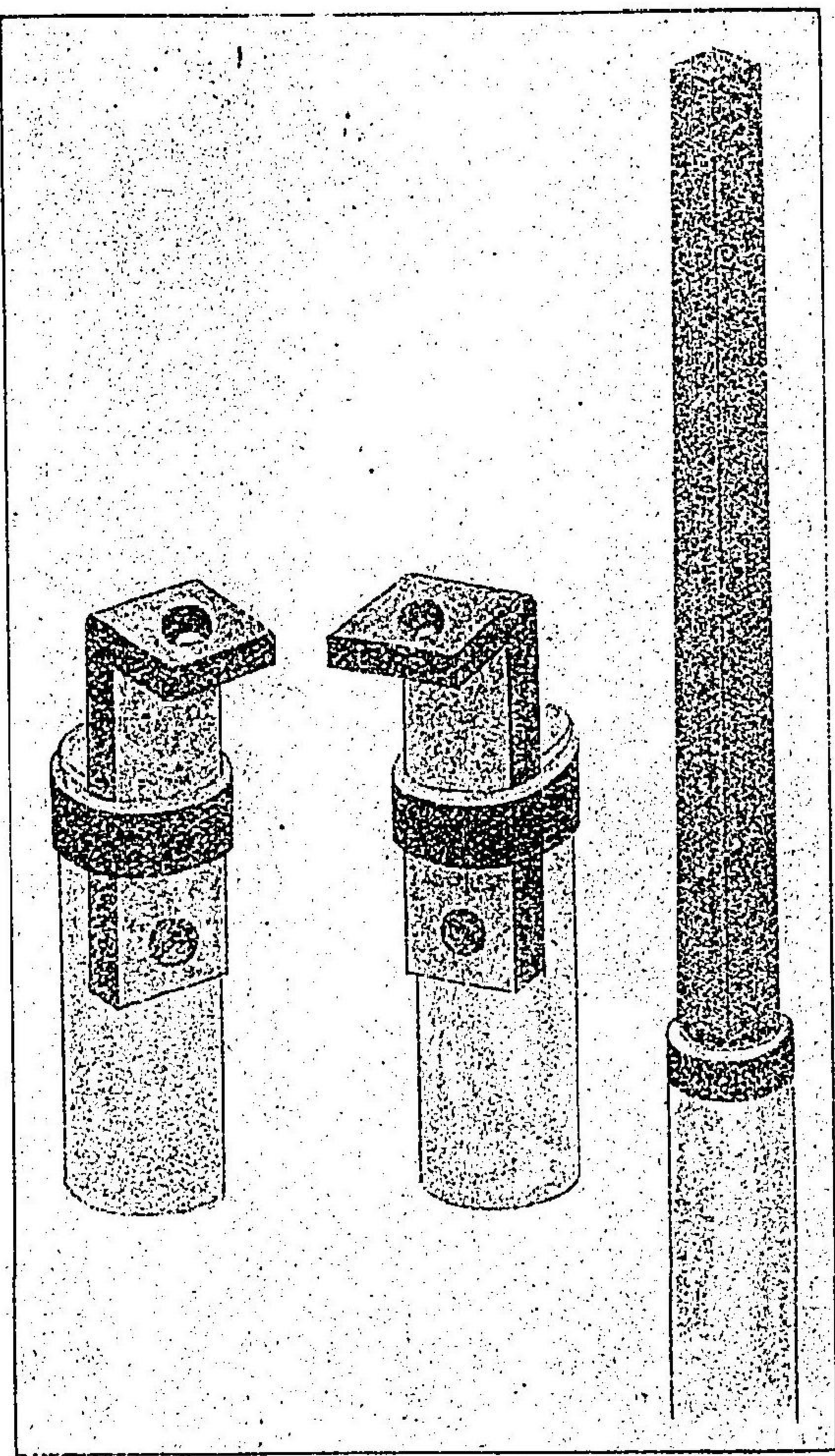


驗するには指頭を以て鈎の尖頭と軸とを撮み力を入れて除々に之を挽くに隨て纒に伸ひ其指頭を紓ふれば直ちに原形に復し又尙ほ強く之を挽けは曲るものを以て最良品とす然るに其燒き方良からざる者に至りては之を挽くに毫も伸ふることなくして直ちに折るゝなり

鈎折るゝときは之を如何せん寧ろ伸ること容易なるも折るゝことなき生鐵に如

かざるなり然りと雖其硬軟の度は鉤形の大小に應じて差や異なる所あり之を概言すれば大なるものは硬剛に過くるときは實地に臨み折るゝの恐れ多きを以て

曲 鉤 圖 十 第

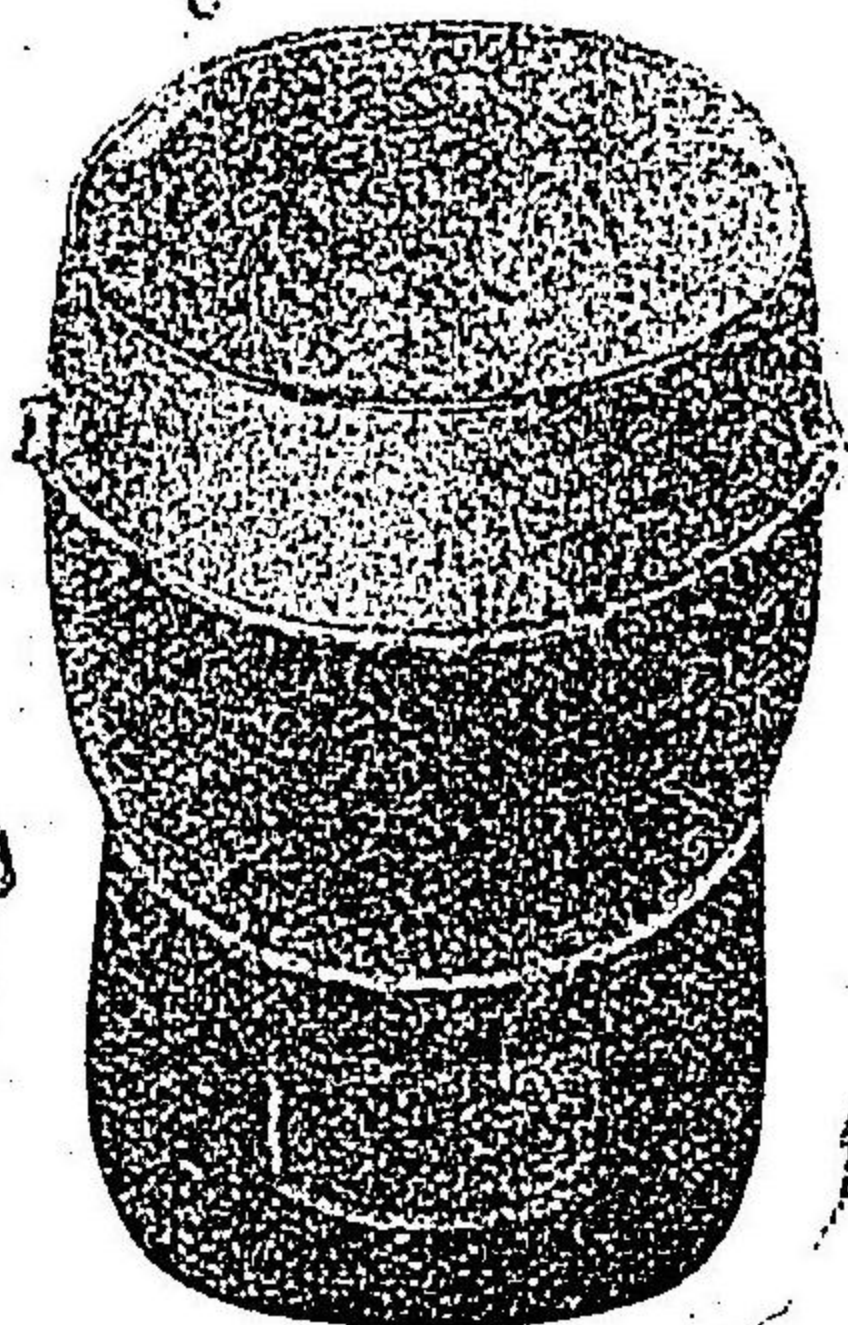


軍ろ曲り易き位のものも良しとし小なるものは軟に失せすして稍や硬剛なるを可とす

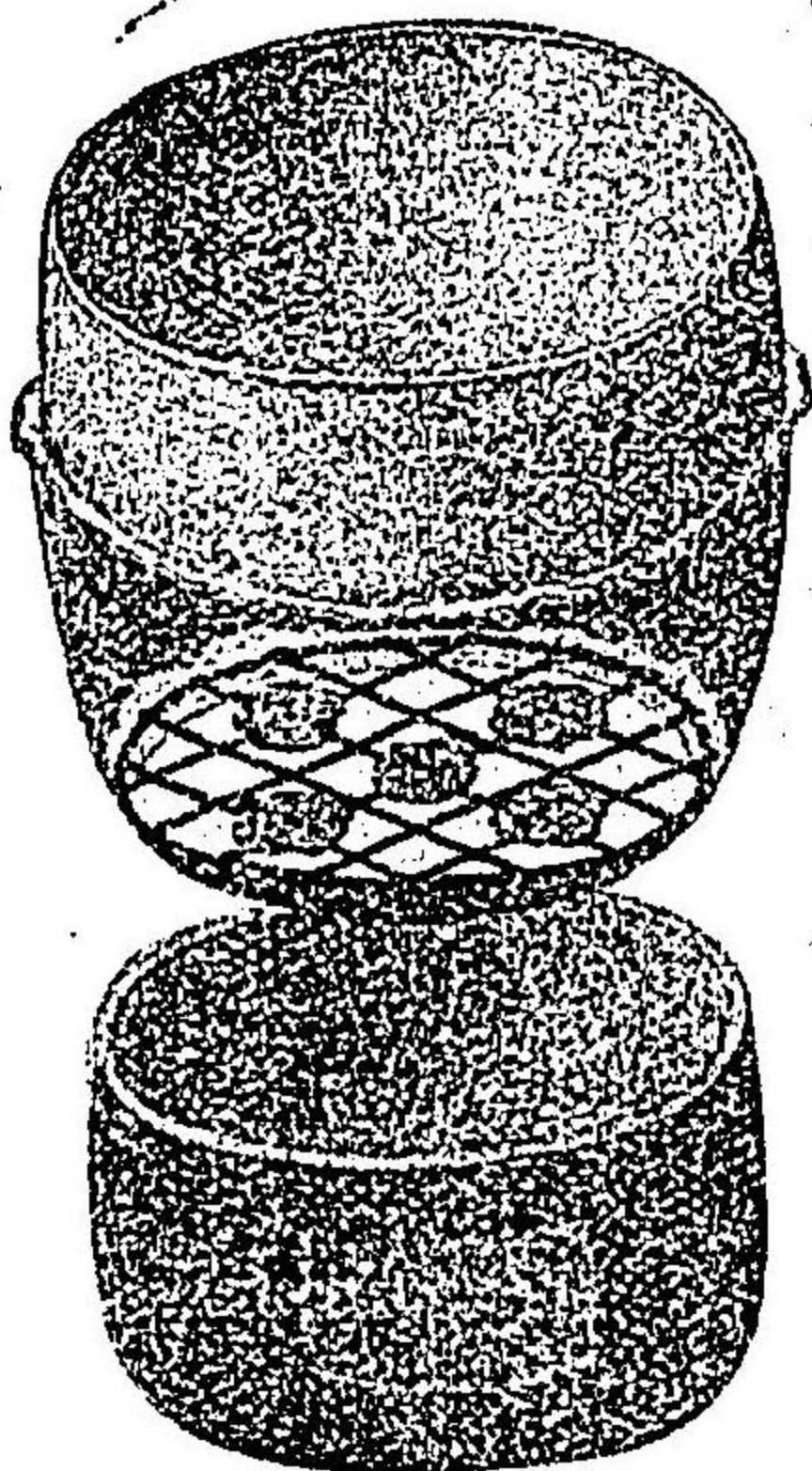
を 入 る 事 は 太 古 よ り 行 は れ し も の に あ ら す 恐 ら く は 享 保 正 徳 年 間 の 頃 に 創 ま

りしものならん之に用ゆる藥品とは力弱き硝石に松炭の粉末を混和したるもの

圖 一 十 第



釜 用 れ 入 焼

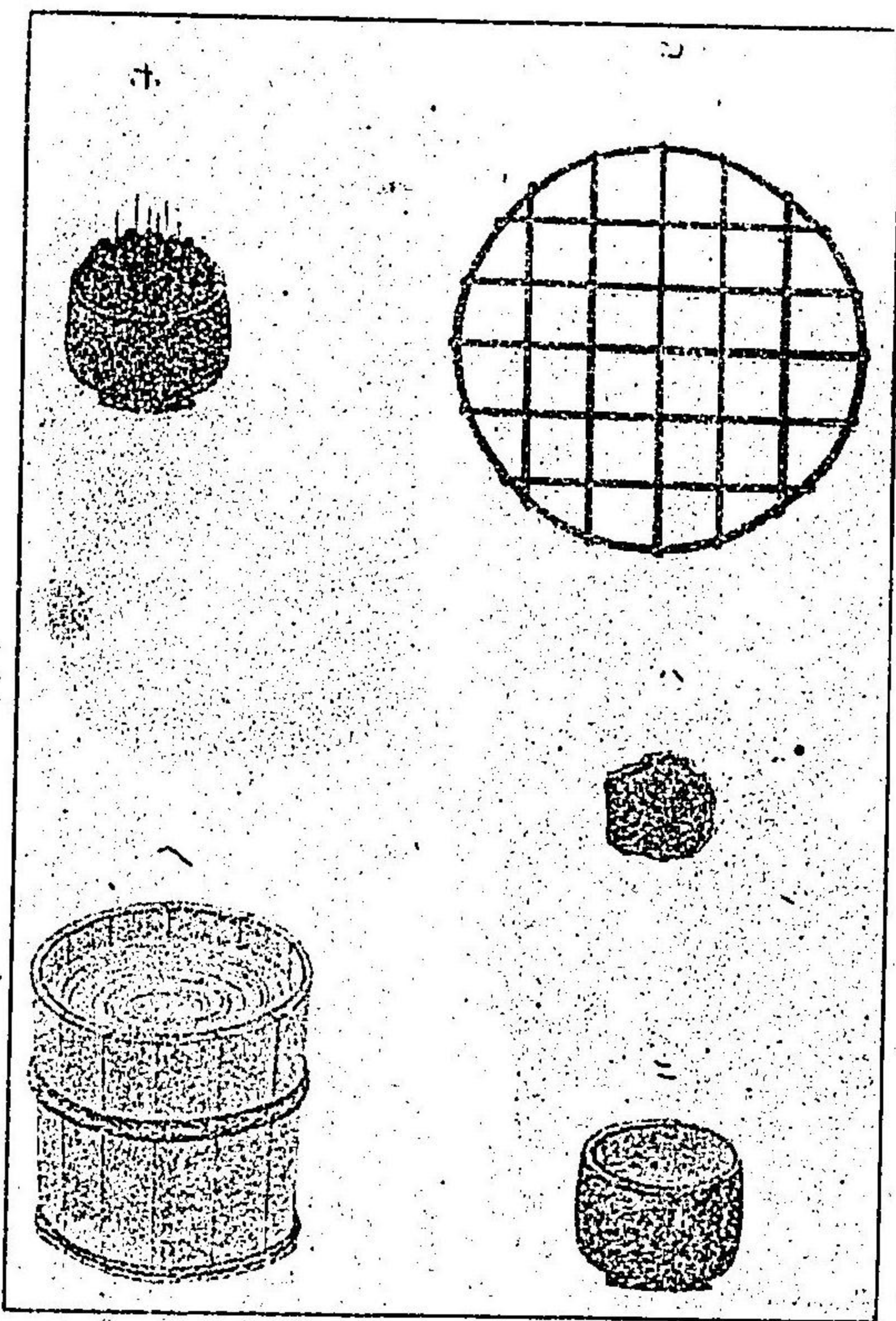


なるのみ鉤を焼くには第十一圖の如く罎なき釜の底を抜きたるもの(イ)を用ふ此の釜底には金網第十二圖に示すか如き(ロ)を掛け其上に瓦(ハ)を並へ而して其釜の中に樗炭を入れ火を起し火の熾んになりたるとき一旦火を取出したる後土製の壺(ニ)の中に鉤と藥品とを入れて之を混合し此の壺をは瓦の上に配置す壺は一個より五個位迄は用ゐるを得可し

其壺の内には別に試験用の線鐵を一二條挿し置くこと(ホ)の如くし再たひ樗炭を釜内に充たし火を熾んにし凡一時間程を経て前に挿し置きたる線鐵を抜き取り

其既に焼けたりや否を檢す可し之を檢するの法は其線鐵を水に入れ後之を折り折れ口の白色なるは焼けたるものにて尙ほ中心に黒色の處あるは未だ焼ける

具用れ入焼 圖二十第



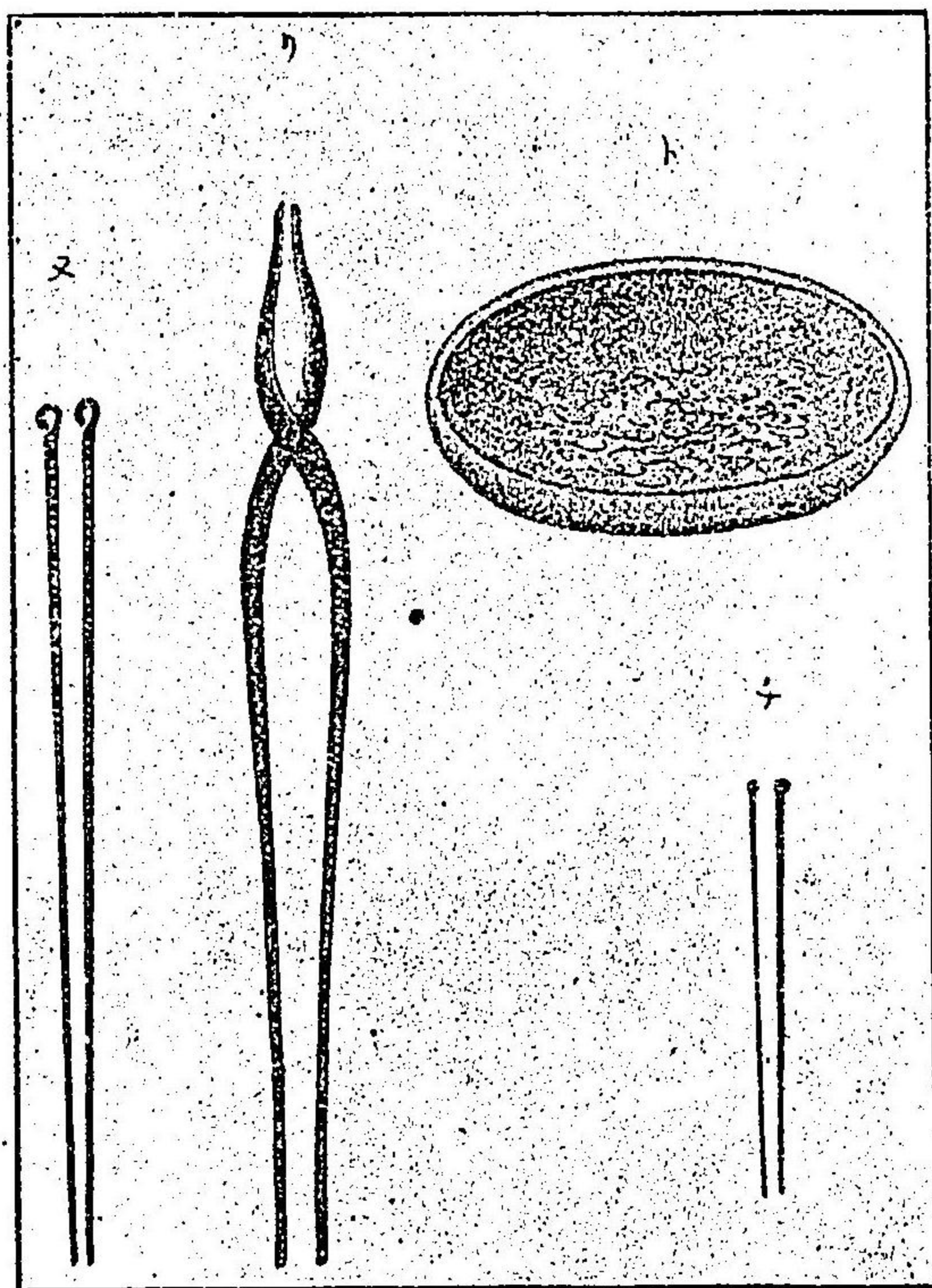
りを終れば其儘卸して冷却せしめ然る後椿油少許を附着すれば鉤をして光澤を

の證なり已にして焼
け了れば壺を取り出
し豫め桶中に水を満
へたる(一)に鉤を投入
して冷却せしめ(水)中
に投ずるは冷す爲めのみならず鐵を硬固ならしむるに
在更に前の釜に第十
三圖に示す焙鍋(ト)を
掛け其内に鉤を満遍
に撤布して熬る可し
此の際(チ)の
鐵箸を用ふ凡二分時許

生せしむ(圖中の(リ)は壺の出し入れ等に用ひ(ヌ)は火箸なり)

藥品配劑の分量は鉤の大小に依て差異あり又晴雨寒暑に應じて加減するものな

具用れ入焼 圖三十第



れとも概ね職工の手心に存し敢て一定の法則あるにあらす而して其成績に於て異なる所なきを以て見れば少許の差違は妨げなきものゝ如し然れとも大凡の標準は通常の味噌(イ)に木炭末一杯を盛り是に左の割合を以て硝石を加ふるなり

鈎の重量	硝石の量
三四厘 <small>即ち最少</small>	二匁五分
五六厘	三匁
七八厘	四匁
一分乃至一匁五厘	五匁
二分乃至二分五厘	六匁
三分	六匁五分
四分乃至五分	七匁
六分乃至七分	八匁
八分	九匁
一匁	九匁五分
一匁二分	十匁
一匁五分乃至二匁	十一匁
二匁五分乃至三匁	十二匁
三匁五分乃至四匁	十三匁

四匁五分乃至五匁

十四匁

以上鈎の重量五匁を増す毎に硝石一匁づつを加ふ

此の配劑は晴天の日の晝間に於てするものにして雨天或は夜中又は日出前に於ては右の割合よりも更に硝石五分を増加し又極寒の候には八分を増加す且此の硝石は甚だ強からざるものを可とするが故に芒硝の如きは用ひざるものとす

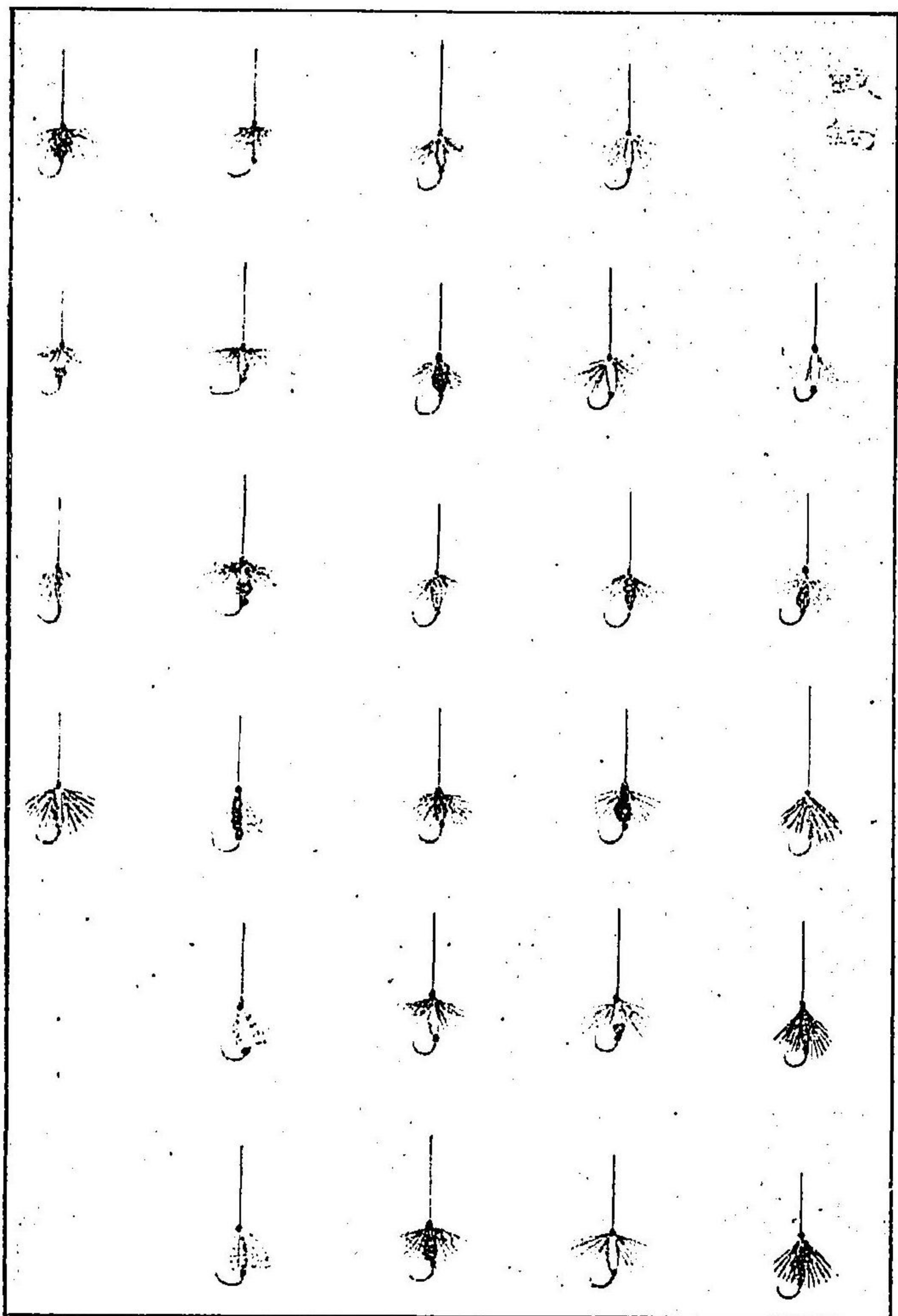
又磨き鈎と云ふあり是れは金剛砂を撒布したる板の上に鈎を置き木片に獸皮を張りたるものを以て摩擦せるなり又一種遊漁に用ふる鈎に瑠璃燒カラムハと稱するあり其色深紺にして光澤あり恰も瑠璃の如くなるを以て此の名あり是れ歐米舶來の鈎は皆此の色を帶ふるを以て外觀の美を衒ひ之に模擬するのみ使用上に於て敢て優る所あるにあらず此の色を出すには燒き揚げたる鈎を焙烙にて熬らざる前に先づ磨きて然る後焙烙に移し熬りて瑠璃色になるを度とし其儘卸して冷却せしむるなり

鈎に鍍せを生ずるを防ぐ爲め銀色の鍍金を爲せる者あり之を製するに往時は松脂松脂を溶解せしめたる上に鈎を置き是に錫の熔液を注ぐものなりしが松脂の取扱ひ

面倒なるに依り今は之を爲すもの稀なり現今は「シャリ」純錫を鍋に入れ火に掛けて溶解せしめ又別の鍋に鹽酸と亞鉛とを混合して自然に飽和するまで溶解せしめ更に其液を等分位に稀釋し鍍金せんと欲する鐵鈎をは細き銅線を以て數本を結束して前記の稀釋液中に入れ直ちに引揚げて其面を清淨ならしめ後又之を「シャリ」の鍋中に差し入るれば「シャリ」は其鈎に附着して銀色を呈すべし即ち之を引揚げ緊きたる銅線的一端を持ち板の上に敲き付ければ鈎に著きたる「シャリ」の餘分ある所は板の上に進り落ち「シャリ」は鈎の全體滿遍に行渡り美麗なる銀色鈎となるなり歐米にては鈎に鏽を生ずるを防かん爲め黒き「ワニス」を塗抹して用ふ然るに本邦にては未だ其術に達せざるにや之に摸するも直ちに剝落す故に未だ廣く行はれず

擬餌鈎は餌料を用ひず餌に似たる物を造り以て魚を欺きて釣獲するの具なり故に之を用ゆるを俗に「ダマシ鈎」とも云ふ淡水魚中には羽蟲を好み水上に跳り出て蟲を食ふ者あり是等の魚を釣るに用ゆる擬蟲は種々の鳥の羽毛を以て作りたるものにして其大さ蚊の如くなるを蚊頭鈎又單に蚊鈎と云ひ稍や大にして蜂の如

第一圖版



鈎

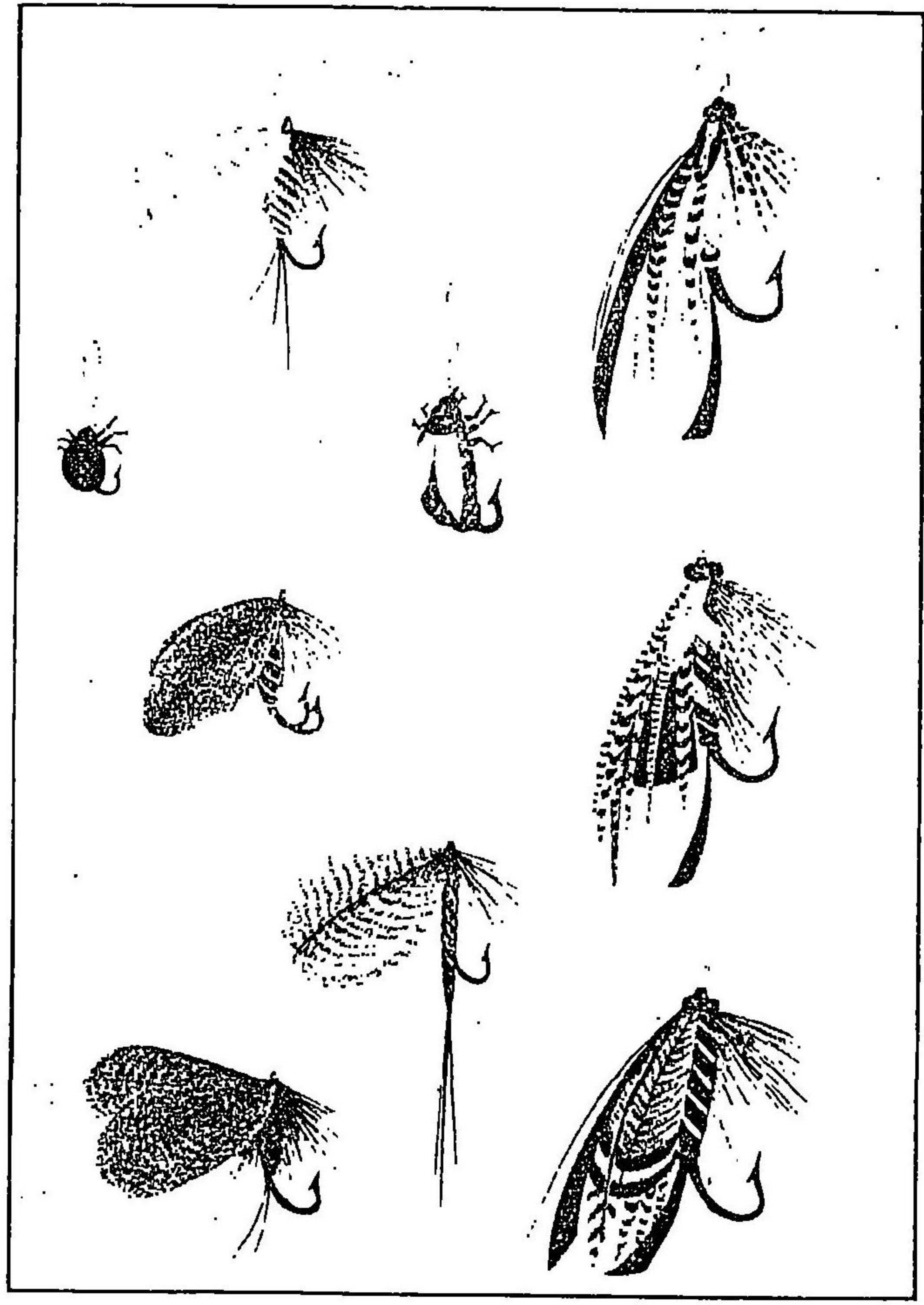
蚊

くなるを蜂頭と云ふ其品種頗る多く殆んど五十種に及ぶ皆其名稱を異にす斯く
品種の多き所以は或は魚の種類に應し或は期節に依り或は地方の慣用を異にす
ればなり皆白馬の尾毛を附けて縞となし漆を以て其結處を固め丸くなす而して
之に金箔を抹したるを金玉と云ひ朱を塗りたるを朱玉と曰ふ土佐蜂と稱ふるも
のには馬尾毛二縷を合せたるを附く鉤の大きは蚊頭は三厘より七厘まで蜂頭は
二三分に至る形は丸あり角あり角形なるを菱と稱ふ一ならず凡て是等の擬餌鉤は重に京
都にて製作し各地に分輸するものなり播磨にても多く製出すれども其品稍や劣
る唯加賀國金澤市にて製出するもの品位佳良にして京都製に多く譲らす但た其
形状少しく趣を異にする所あり又擬蟲の軀幹を卷くに白馬の尾毛を以てし其頭
を炭の嫩芽に有する織毛にて作りたるものあり之をタキ鉤と云ふ是れ武藏國
北多摩郡拜島村にて製作する所なり又第三回内國勸業博覽會に羽後國より擬餌
鉤を出品せる者あり此の他に之を盛に製出するの地未だ之あらざるが如し
或る説に蚊鉤は魚類の常に嗜好する眞の羽蟲に擬造するに非れば効用少し故に
蚊鉤を製作するには其羽蟲の眞に迫るものを製するに勉むと云へり然れども此

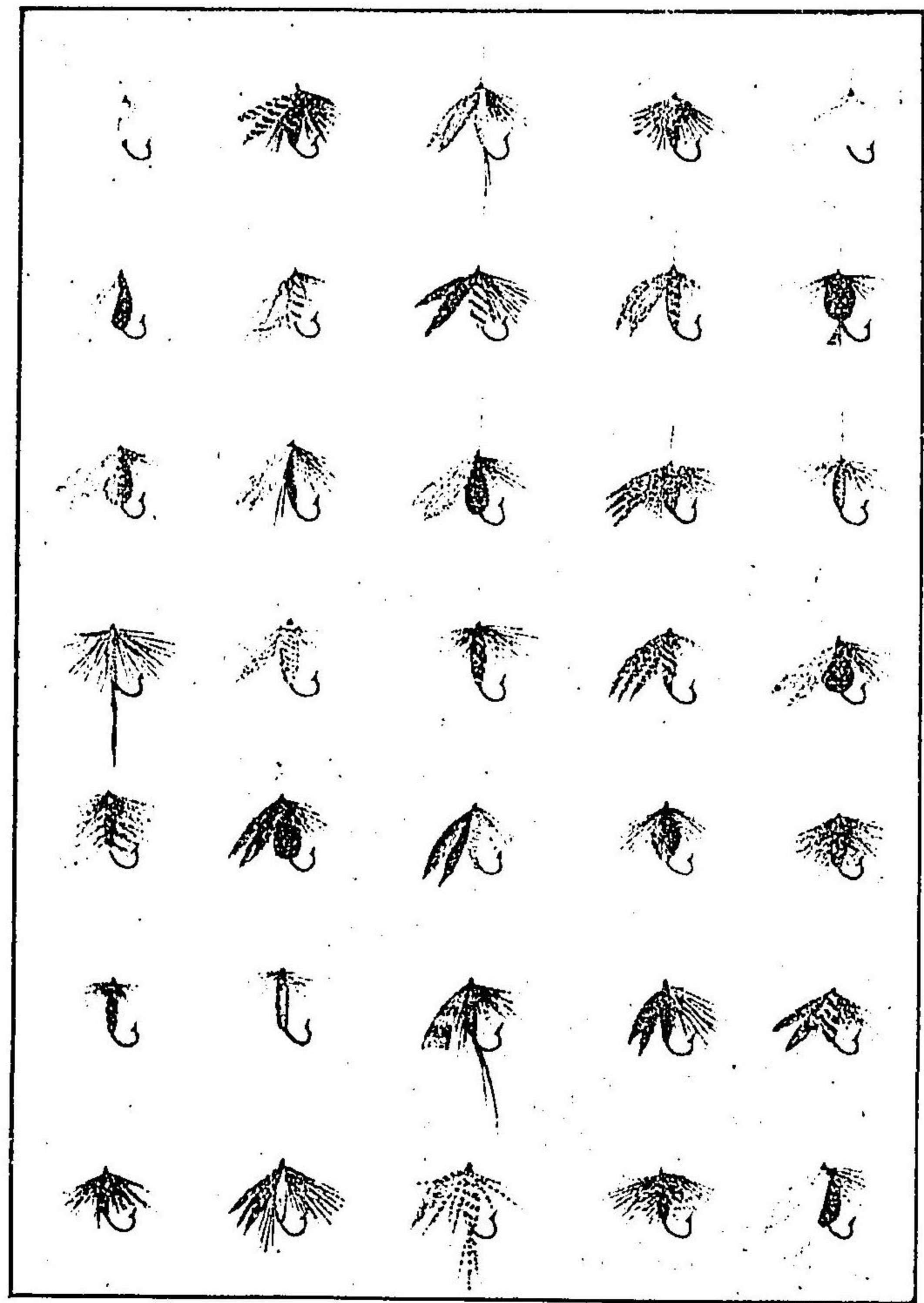
の説たる非なり何んとなれば如何に精力を盡すとも真物と同じきものは容易に製出し得べきにあらず若し真に擬して真を失ふたものは魚其真ならざるを看破して釣に罹らず故に強て真物に擬せんとするは是れ勞して効なきなり況や蚊釣は其羽蟲を見て忽然之を食むか如きの魚を釣るに利ありて羽蟲の真偽を撰むが如き餘裕ある魚を釣るに利あらざるものなるに於てをや夫れ斯の如くなるを以て蚊釣は其形何の蟲とも名狀し難き異様のものを以て却て宜しとす現に釣漁の盛んにして製造者も熟練せる地の擬蟲釣を見るに眞の蟲の如くに作りたるものはあらざるなり

歐米諸國にても亦種々の擬餌釣を用ふ皆美麗なる羽毛を以て蟲形に擬したるものなり然れども亦末た眞に迫るが如き製作のものありや而して之を實際に用ゆるに其彩色燦然たる美麗のものよりも強て外觀を尙はざるもの却て利あるが如し而して是等擬餌釣の中本邦にては用ゆることなき大形なるものあり是れ鮭、鱒、鯉等を釣るに用ふるものなり此の種の魚は本邦にては釣獲すること至て稀なるが依に本邦にして初めて是等の釣を一見する者は恐らくは奇異の觀をなすなら

第二圖版



一 釣 蟲 擬 の 米 歐



第三圖版

二 鈎 蟲 擬 の 米 歟

ん歐米人は之を「ポケット」に納れ漁場に携ふるが故に其形を扁平に作りたるもの多し

鹹水魚中鯉、鱒、鱒等を釣るに用ゆる擬餌釣は牛角、羚羊角、水牛角、鹿角、犀角、馬蹄、鯨骨、鯨鬚、鯨樹、旗魚の鼻尖、錫等の物を以て軀幹を作り其下端に孔を穿ちて釣を簷挿み此の類の擬餌に簷挿する釣を關東の方では「カンナ」云々其周圍を魚皮若くは鳥羽毛等にて包装し鳥賊の形に擬し之を以て魚を誑惑して釣獲するなり釣は眞鍮若くは鋼を用ゆるもの多し鯉釣の擬餌釣には牛角を用ゆるもの殊に多く其角は眞黒色のものよりも稍や白くして褐色を帯びたるを宜しとす蓋し梨牛の角よりも驛牛の角を勝れりとするなり而して驛牛の角の上品は概ね歐米より輸入す此馬蹄を初めて用ひたるは相模國足柄下部に於て水中に落ちたる馬蹄に魚の集まれるを見て之を作り出せりと云ふ故馬蹄を用ひることは相模邊に専ら行はれ池地方には多く之を見ず又釣の周邊を包装する魚皮は河豚の皮を用ゆるを多しとすれども猶其他比目魚、鯛、鱒、鯉、鮫、鮫、鮫、鮫、鮫、鮫等の皮の如き亦皆用ゆるを得べし又鳥賊を釣るに木材を以て魚形を造り鳥羽毛等にて鱗狀を添へ尾に眞鍮の釣を集合したるを附けて用ゆるあり又

一種竹或は金屬或は旗魚の鼻尖等を用ゆるあり其他赤色の布片若くは麻糸等を鉤に巻き以て餌に擬するあり猶是等の擬餌の形狀其他は各其釣法の條下に於て圖出し併せて詳説す可し

凡て木材を以て製せる擬餌鉤は最も素質を擇はされば潮水木心に滲透し浮泛漸く其度を失ひ用を爲さざるに至るべし故に薩摩地方に於ける鳥賊釣餌木の如きは木材を擇ぶこと頗る鄭重を極め其良材に至ては甚だ高價のものあり手釣類鳥を參看又金屬のものは常に磨礪に心を用ひざれば酸化して亦用を爲さざるに至る故に或る地方にては金屬のものゝ外面にペンキの如き酸化を防ぐべき物質を塗りて用ゆるものあり

又擬餌鉤にあらすして餌を用ひず鉤のみを以て釣ることあり是れ魚の鉤の尖りを見て餌と誤り食ふに由れり潤目鱈マ、カリ等中國邊に多し等に用ふ又一種懸け鉤あり餌を用ひず鉤を水中に搖曳し魚を引懸け捕ふるものにして其鉤の狀錨の如くならしむ鮎懸、テシカラ釣、鰻懸等是なり又鹹水漁の延繩に餌を用ひざるものあり空釣と云ふ其鉤は眞鍮製を用ふ是れ繩を魚の通路に延へ置き魚之に觸るれば

ば鉤は直ちに魚体を刺すの装置にしてカレイ、コホシ、ヒメ、アサギ、カサギ、ササギ、シロギス、ヒメ、アサギ、カサギ、ササギ、シロギス等の海底魚を捕るに用ふ尙ほ詳なることは各其條下に於て解説す可し

第二節 緡絲

魚を釣るに鉤を結び一端を竿頭に繋ぎ若くは手にし又は幹繩に附くる所の細繩を緡絲と云ふ然るに古より單に之を絲と云ふあり宋詩に山雨溪風捲釣絲あるが如き是なり又絲と緡絲と繩とを分つあり詩の小雅に之子干釣言綸之繩又禮記の緡衣篇に王言如絲其出如綸とあるか如き即ち是なり又緡の字あり詩の召南に其釣維何維絲伊緡と見ゆ而して其絲と云ひ綸と云ひ緡と云ふものは何に由て之を分つやを考ふるに爾雅釋話に緡綸也とあれは綸と緡とは分つこと難く殊に説文緡字の注に釣魚繫也又詩の毛傳に綸約繳也とありて綸緡の二字共に繳繫は固よの義とすれば元來二物にあらざるなり繳は玉篇に同、繫とあり史記の注に絲繩繫才別鳥也と見ふ但た禮記に疏に綸鹿於絲とあるを以て見れば綸と絲とは區別するを得可しと雖今本書を編するに當り如何なるを緡とし如何なるを絲とすべきやの疆域を定むるに困しむ所あるを以

て概して繅絲の字を用ふ時として繅の字を用ひ該當なるに似たれども今單に絲とのみ云ふときは他の種の絲と混するを以て天蠶絲を用ひるものには必ず天蠶絲と書し他の種の絲を用ゆるものには亦必ず其絲の種類を記すべし繅絲は東國の方言「ヤマ」ハ豆國にては「ヒヨ」尾張邊にては「ユウジ」近江邊にては「チムイト」北國にては「ヤメ」九州にては「ヨマ」と云ふ其原料は麻絲「マガヒ絲」「スガ絲」天蠶絲「馬尾毛」等を以てし其質柔軟なるを貴ぶ「マガヒ絲」其他は實業者も商買に就き買て之を使用すれども麻絲のものは自から製作するを多しとす

麻絲製の繅絲を澁染にしたるものは漁業者の最も多く用ひる所あり麻は關東にては主として下野産を用ふ下野麻に引田、引束、岡地、岡束等の品種あれども引田麻を以て最上品とす昔は各種の麻長さ六尺寸一分となし引き試みたる者ありしに引田麻の中には八分伸ひて初めて断れたるあり他は皆一二分位より伸はさりしと云ふ故に繅絲には之を用ゆるを普通とすれども信濃國に産する俗に青麻と稱するもの亦頗る佳なり就中一種鹿の子麻と稱し色澤青くして稍や白色を帯び質柔軟なるものあり太た良品とす九州邊にては豊後、日田産中國邊にては但馬産の麻を用ゆるもの多し但だ延繩の幹繩には次品を用ゆるを常とす

一 染 澁 の 絲 繅 四 十 四



日本水産捕採誌

繅絲の撚方は細きものは手撚に爲せども稍や太きもの及び延繩の幹繩の如きは器械を以てす其撚方は既に網漁篇總論中に記述したれば今復た贅せず而して製成れば澁液に染め日光に曝乾して更に之を簍に移すなり此の繅絲を染むるには澀液カサワ檫樹皮等の煎汁を用ふるを多しとすれども柿澀を以て最も宜しとす網液に染むる理由及び澀液の成分等も亦網漁篇總論中に記したれば參看す可し之を染むるに網に於ては別に槽ツボを用ふれども繅絲は積量少なきが故に之を要せず第十四圖の如く桶中にて染め而して地に杖を立て之に掛けて曝乾し畢れば第十五圖の如く簍に巻き移すなり尤土地に依り

二 染 澁 の 絲 繅 四 五 十 第



三十四
差異あれども是れ
關東にて普通爲す
所なり
「マガヒ絲」は練りた
る絹絲を撚り合せ
て鹹水に浸し日光
に曝乾せしめ後之
を染むるに澁液を
以てしたるものな
り斯の如くするこ
と三回なれば必ず
最良の繅絲となり
屈撓自在なり是れ
多く鯛釣などに用

ゆる所なり 歐米にては絹の組絲を以て繅絲の最上とす本邦にては未だ組みたるものを見

「スガ絲」は蠶絲の未だ練らざるもの即ち生絲を用ひ強く撚を掛け澁も又濃厚なるものを以て染めたるなり故に反て力弱しと雖繅絲の纏るゝ憂ひなく外観美麗なるを以て遊漁者は多く好んで之を用ふ澁引の「スガ絲」を製するには生絲を釜に入れ善く煎て水を絞取り更に榲樹皮の煎汁に浸すこと三日にして取り揚げ柱を建て晴天の日に於て之を懸けて張り伸ばし更に澁を塗抹すること三日にして光澤を出なり通常市中に鬪ぐ所の釣絲は即ち是なり又麻絲をば濃き澁液を以て染め生絲製に類似せるものあり力甚だ弱く其價も亦低し眞の釣漁業者の使用すべきものにあらす唯兒童の小魚を釣る遊戯の具たるに過ぎず

天蠶絲は本邦用ゆる者は皆支那船載の楓蠶絲なり明治十四年の輸入額は農商務省商務局の調査に據れば五千七百四十二斤にして價も拾萬圓内外なりしと云ふ今日に於ては實際の輸入は尙ほ是よりも遙に多く其額三四十萬圓に達せり 是が統計を爲すしものあつとも未だ以て精確と認むる能はず故に掲げず 其賣買上一番二番に種別すれども其中に就て又カントン、マテ、ヘチマ、アイヌの四種あり即ち左の如し

- 一 「カントン」は全絲の中央太くして根と末の兩端は漸次細し
- 二 「マテ」「マテグス」の略稱なり根より末に至りて漸く細く末端には粟粒大の引き止めあり

三 「ヘチマ」は全絲の半より根に至るまで圓く末に至りて扁きを常とす

四 「アイス」は前三種中に加ふる能はざる異狀を爲せるものを云ふ

左の中「カントン」は一番に屬し「マテグス」は二番に屬し「ヘチマ」「アイス」は一番二番の混合物とす就中「カントン」を以て上品とす此の他に歐州西班牙産は白色透明にして最も強靱なり是れ支那産の右に出る者なり然れども多く輸入せざるを以て實業者の之を使用するものなし

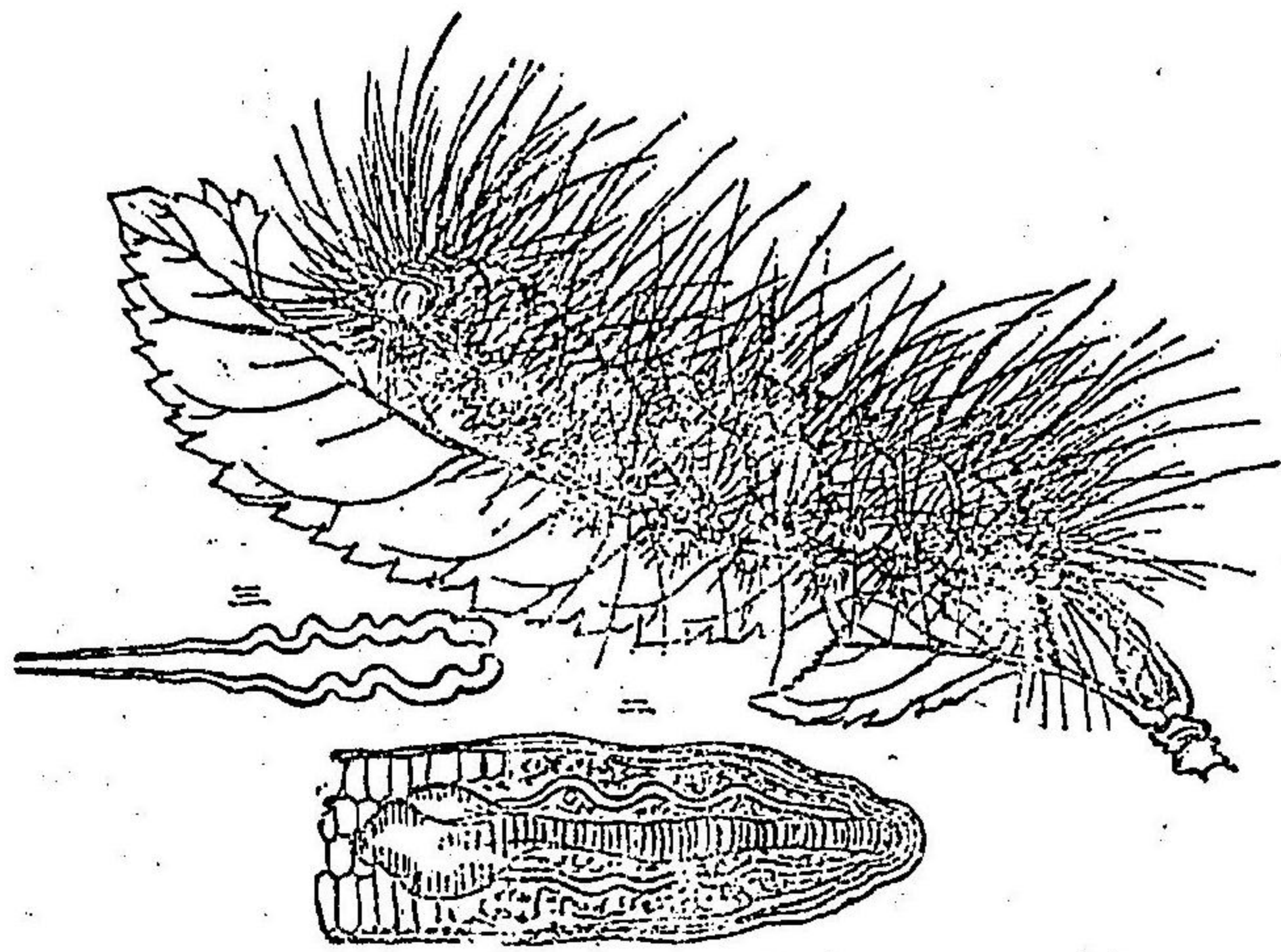
磨天蠶絲ルリヤンクズと稱するは紀伊淡路邊にて多く製造するものなり之を製造するには巨大の竹を臺の左右に立て天蠶絲の未製のものを輪となして之に懸け漸々に回轉し先づ初めに木賊クサを以て研き次に楮カの葉にて磨き終りて葉を以て仕揚ぐるなり目今大坂にても製出すれども其法眞鍮板に多く小孔を穿ち其孔に天蠶絲を通過せしめて磨きたるものなり是は指頭にて磨きしものに比すれば價は低けれども

品位も亦劣れり

漁業者が天蠶絲を用ゆるには正圓にして細太不同なきものを選び然れども優等品は十中の一二に居るのみ故に價の貴きのみならず多く得んことも亦易からず蓋し天蠶絲に要する所は絲質透明にして魚眼に觸れざらしめ強靱なるを貴ぶ若し細太あるときは其力は細小なる部分に止まり粗大なる部分の力は恃むべからず即ち一尺間に若し一寸の細き所ありとすれば其弾力は此に止まり九寸間は功用なし是を以て粗大の部分を削りて首尾を一ならしめ其力を均しくすれば一尺間の弾力あるを以て其効用全きを得是れ磨研を加ふる所以なり天蠶絲は釣を爲すに當り魚眼に觸れざらしむるを要す故に水の清濁に由り着色したるを用ゆることあり其色は水の色と同しからしむるを主とす天蠶縣は清國にては楓蠶より採る然るに本邦に楓と稱するは眞の楓にあらず眞の楓は本邦には無し故に樟蠶より採る但た産額甚だ少く品質亦宜しからざるを憾みとす

楠蠶は「クスムシ」と稱へ形鳥蠶イモムシに似て其色は綠なり長さ三寸許にして背上斑々白

樟 蠶 四 六 十 四



毛を生す因て又「シラガダユウ」「シラガタラ
ウ」等の稱あり樟のみならず、栗、櫟、漆、胡桃、冬
青、鹽膚木等の諸樹にも生す形の醜惡なる
と木葉を啄食するを以て人憎みて往々打
殺し之を養ふものゝ如きは絶て無し此の
蟲四眠間は尋常の蟲より長し初生は黒色
なるも漸々綠色に變し白毛盡く脱するの
後始めて繭を作る其繭は茶褐色にして恰
も網の如し外面より能く中なる蛹オキを見る
ことを得可し此の蟲の成熟して絲を採る
べき期に至りたるもの形は上圖の如し
天蠶絲を採るは此の蟲の十分成長して將
に繭を成さんとする前背の白毛全く落盡
するを期とし樹を振ひ蟲を落し頭を切斷

し背を縦に殺せば中に二縷の絲あり(二)之を出して醋ウに浸したる後取出し(三)清水
にて洗ひ而して徐々に之を引伸ばし板に載するか又は首尾を針に結てチ蓆チに刺し
て乾かし更に藥汁を以て煮ること少時にして水にて洗淨し酸氣を去り製初めて
成るものなり此の事たる農業に屬すべきものなるを以て茲には唯其大略を示す
のみ本邦にて從來天蠶絲を産出する地は阿波、美濃、筑前、肥後、武蔵、薩摩、岩代、信濃、土
佐、日向、丹波、下野、越後、常陸、三河、越前の諸國なり薩摩國にては樟に生するものを上
等とし漆に生するものを中等とす美濃にては栗を上等とし櫟を中等とす日向國
にては樟を一等とし栗、櫟、胡桃を二等とし漆を三等とすと云へり嘉永安政年間に
は是等諸國より多く製出せしことあれども今は皆微々たるものなり
利吉(中村利吉氏)前年各種天蠶絲強弱の力を比較せんとて其檢定を爲せしことあり
先づ天蠶絲の善良なる部分を取り長さ各一尺とし淡水に浸すこと十時間にして
取出し鍾を懸けて其力を檢せしに結果左の如し

品位

産地

色

太細

韌

力

歐米

七百匁以上を保つ

最上	支那	白色	太きもの	五百二十夕を保ち至り断る
上等	支那	黄色	太きもの	四百五十夕を保ち至り断る
下等	支那		太きもの	二百六十夕を保ち至り断る
下等	支那		並の太さ	二百五十夕を保ち至り断る
最上	支那	白色	極細	二百二十五夕を保ち至り断る
中等の下	支那		細	百六十夕を保ち至り断る
日本産	大阪府故香 郷一氏製		並の太さ	四百六十夕を保ち至り断る
同	肥後			二百九十夕を保ち至り断る
同	阿波			百五十夕を保ち至り断る
同	三河			百四十夕を保ち至り断る
同	筑前			三百二十夕を保ち至り断る
同	越前			同
比較品				同
最上の馬尾毛		白色		六十五夕を保つ

獅毛

馬尾毛
細シ

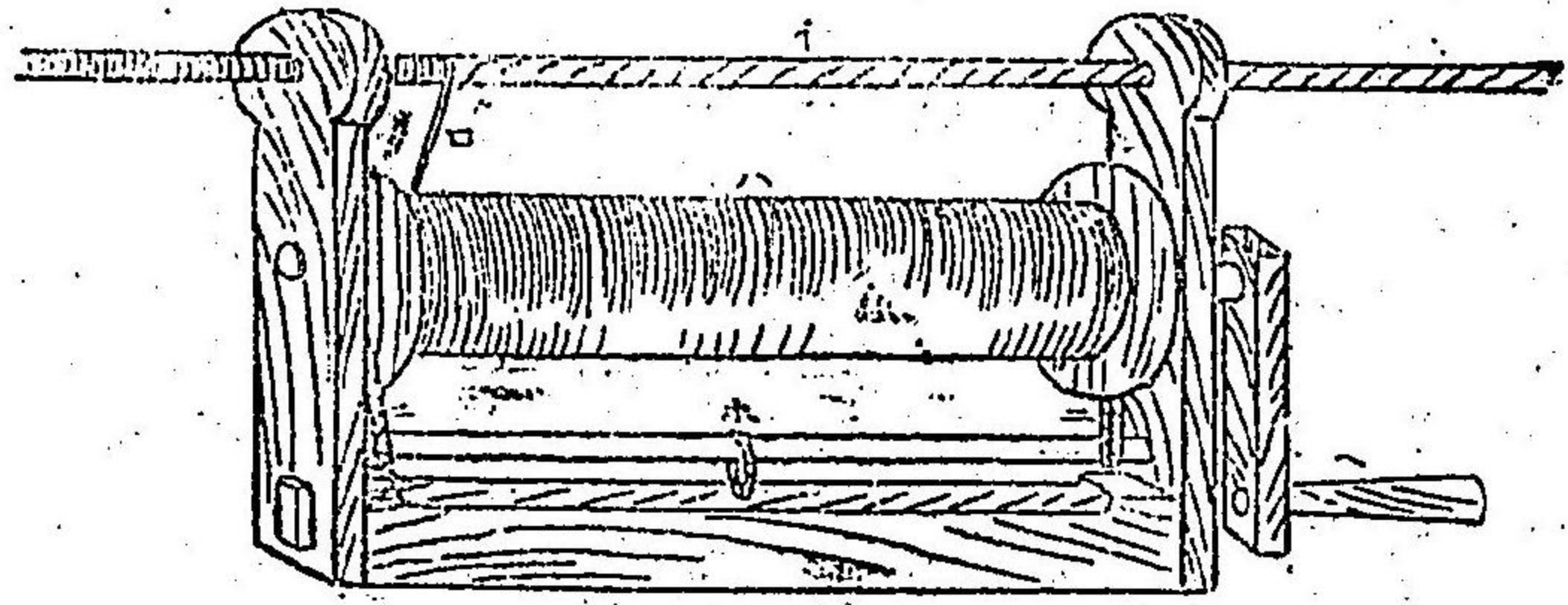
六十五夕を保つ

右獅子毛とあるは歐洲に於て用ゆるものにして細くして強靱なるが故に西人多く之を使用すと云ふ人頭髮とは婦女の髪カミの毛の長きものを以て鱈類タラシの小魚を釣る東京に於ける遊魚に用ゆるに過ぎず

抑本邦産天蠶絲の劣點は水中に投すれば早く膨脹するに在り是れ靱力弱く實用に堪へざる所以なり蓋し天蠶絲は如何に下等品なるも百四十夕を保つツの力あるにあらざれば遊魚と雖尙且實際に用ひ難し故に是より以上の靱力あるものを製せざる可からず

馬尾毛は凡て白色のものを用ふ此の物は淡水の釣漁に用ゆるのみにして其他には用ゆることなし蚊鉤カサネに附くる所のものは皆是なり北國にては方言グと云ふ小魚を釣るに用ゆるには長きもの一縷を以てし稍や大なる魚には二三縷或は數縷を合せて用ゆることあり之を撚り合すには先づ二縷を一つに持ち指頭にて其先きを扱き二縷同一に先きを曲げて指頭に力を加へず二縷撚み合ふ様に爲すべし凡て馬尾毛の類は撚を掛くれば力弱くなるものなればなり天蠶絲に於ても同じ

第七十圖 せきやま



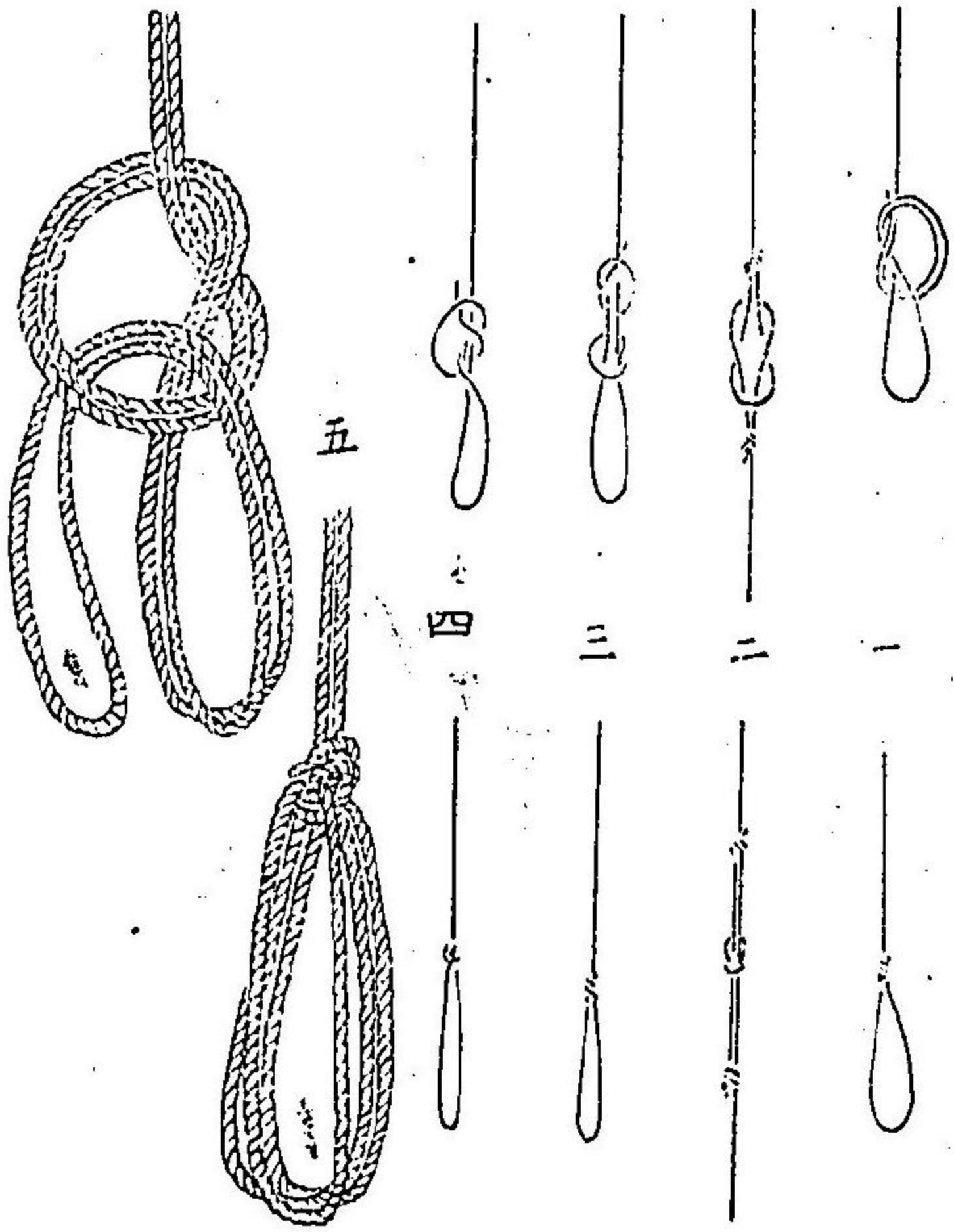
く然り又之を繼ぐには初め右よりせは次には左よりし
一縲隔てに左右より繼ぐべし同然り方のものを以て繼
げば然り掛り過ぎて用ふ可からず一縲の馬尾毛を繼ぎ
合はすには皂莢サカタの實を入れて煎すれば軟らかになり繼
ぎ目繼るゝことなし遊漁者の馬尾毛を用ゆるには長さ
を好むものにして其長さものは價甚た貴し

羽後國にて馬尾毛を以て延繩を製造せし者あり腐朽
することなくして價も廉なりと云ふ馬尾毛の囚みに

此に附記す

鮫鮪ササガ等イサナの如き其他大魚を釣るに用ゆる縲は麻數縲
を合せて線となし更に數線を合せ其上を細き麻絲にて
横に巻き固む東國の方言之を「セキヤマ」と云ふ地方に依
り「セジ志摩摩」ヨリ志コシ士佐等佐の稱あり此の「セキヤマ」は新しき
を良しとす古きものは漁獲少しと云ふ其製作法は地上

第八十圖 縲絲結一方



- 一 ウロムスビ
 - 二 カタメムスビ
 - 三 西洋ウロムスビ
 - 四 カチヤマヒカセ
 - 五 但馬ムスビ
- 上段は結ぶ順序を示し
下段は結び終りたる形
状を示せるもの

に於て四方に柱を建て心絲を之に懸り其一端をば細絲を巻き付けたる篋セキヤマ之を
上ウクに出すの孔に通し而して其篋を廻轉して細絲をば心絲に巻き付くるなり

伊豆國にて
は縲絲製の
「セキヤマ」を
使用する地
あり鮪釣な
どには細く
して大に便
なりと云ふ
又隠岐國に
ては至て細

き縲絲の「セキヤマ」を製し柔魚ヌメイカを釣るとき天蠶絲に代用すと云ふ

又大鮫を釣るには縲絲の上を巻くに美濃紙を以てし鈎際より五尺許の間は銅線

を以て間断なく巻き詰め上の方に至りて稍や疎く巻くものあり之を巻くには篋を用ひず初め銅線を炭火にて焙り軟かならしめ之を徑一寸五分内外位の竹に堅く巻きたる後其竹を抜き去れば銅線は自然に罔曲す因て其中に心細を通じ而して手を以て其銅線を引締めつゝ巻き固むるものなり其他銅真鍮等の鎖を繋ぐあり又小魚と雖齒の銳利にして緋絲を噛み切るの恐れあるものは鈎際に線金を繋ぎて用ゆるものあり又細き竹管に貫穿して用ゆるものあり

延繩の幹繩に用ゆる麻は緋より多量を要するが故に青麻鹿の子麻引田麻の如き上品を用ゆること能はざるを以て東國にては引束若くは岡地等と稱ふる麻を用ゆるを通常とす其技絲即ち緋絲は列記せる上品の麻を用ゆるの外猶越後産赤芋と稱ふる麻亦之に適す其撚方は幹繩は右撚とし撚の強からざるを良しとす技絲は左撚となす若し幹繩技絲ともに同一の方向に撚るときは之を使用するに當り幹枝の二線相纏絡することありて使用上不便なるのみならず爲めに住々釣獲を誤るに至る故に幹繩と枝絲とは必ず撚の方向を異にせざる可からず

緋絲の繋ぎ方も亦心を用ひざる可からず繋ぎ方悪しければ結び目弛まりて脱す

ることあり今其繋ぎ方を圖出せば第十八圖乃至二十七圖に示すが如し

凡釣を爲すに魚の鈎に罹るを見て直ちに引揚ぐべき種類の外猶緋を一縦一縮し

魚の疲るゝ

を待て而し

て引揚ぐる

を要するも

のとあり然

るに其間に

於て或は魚

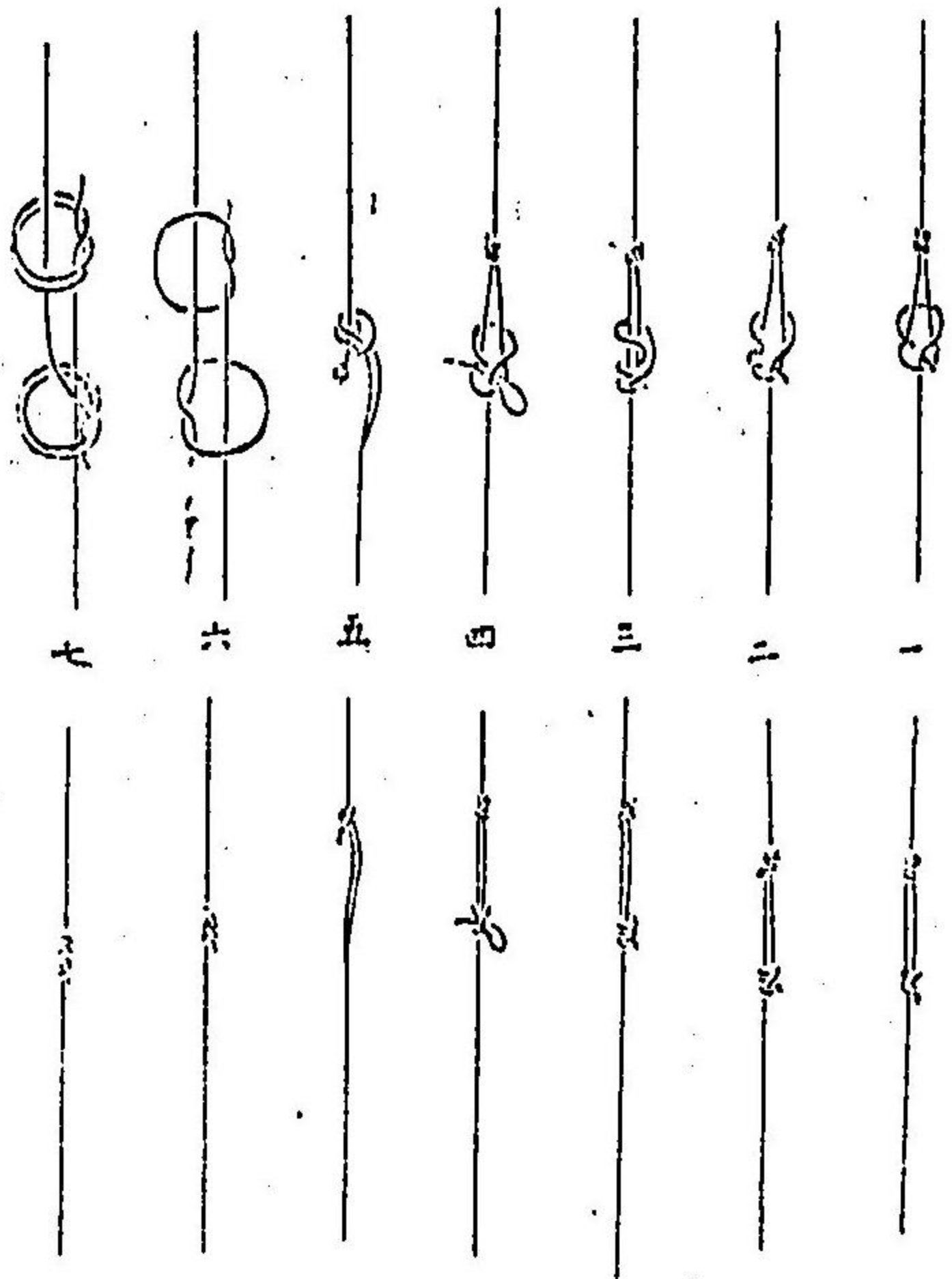
の反撥する

勢に由り或

は水勢の衝

四十九 緋

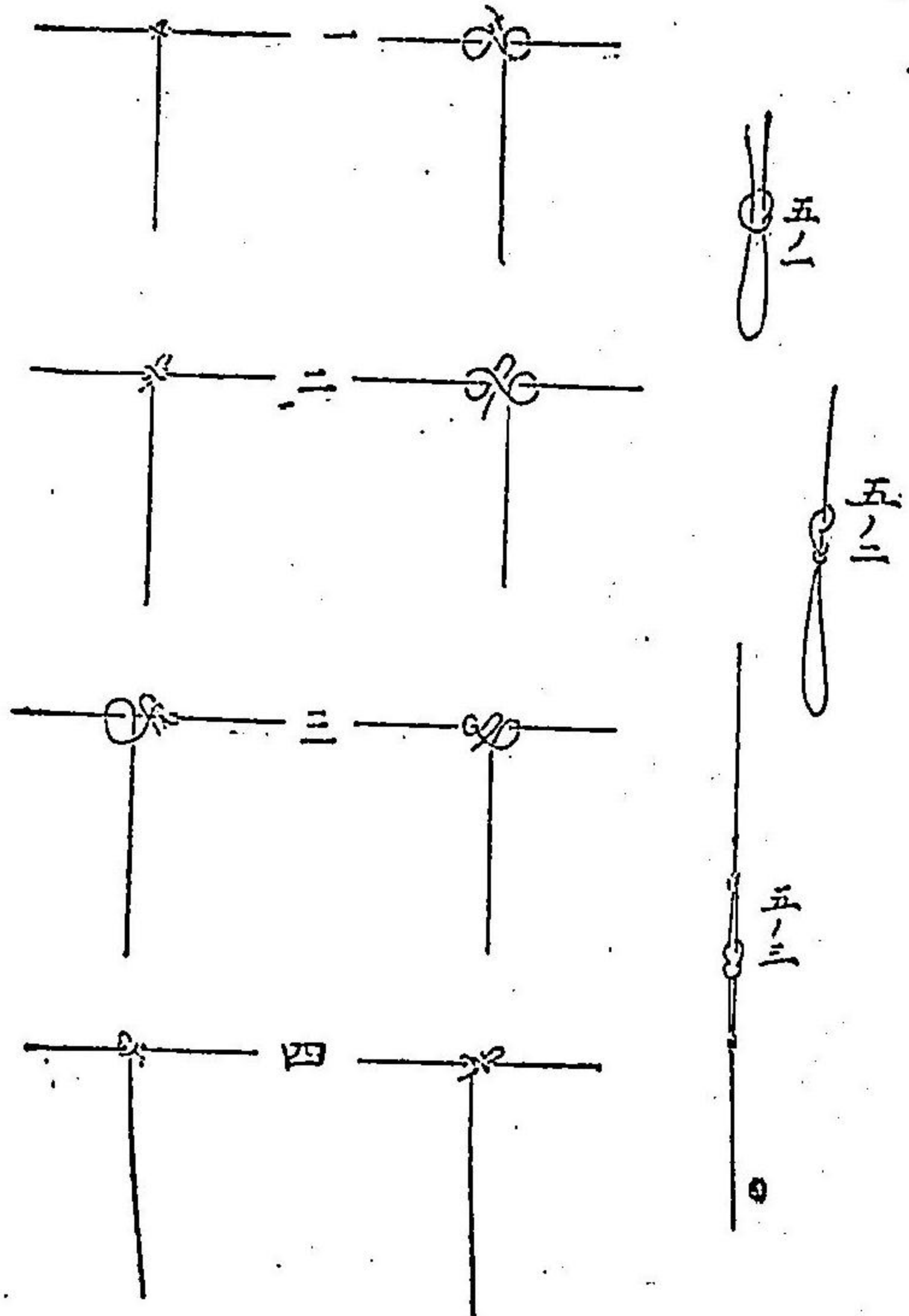
二の方結絲緋



- 一 ヒカセ
 - 二 ヲトヒカセ
 - 三 ソトヒカセ
 - 四 オリヒカセ
 - 五 ハコカケ
 - 六 テグスムスビ
 - 七 四洋テグスムスビ
- 上段は緋の順序を示し下段は結び終りた形状を示せるもの

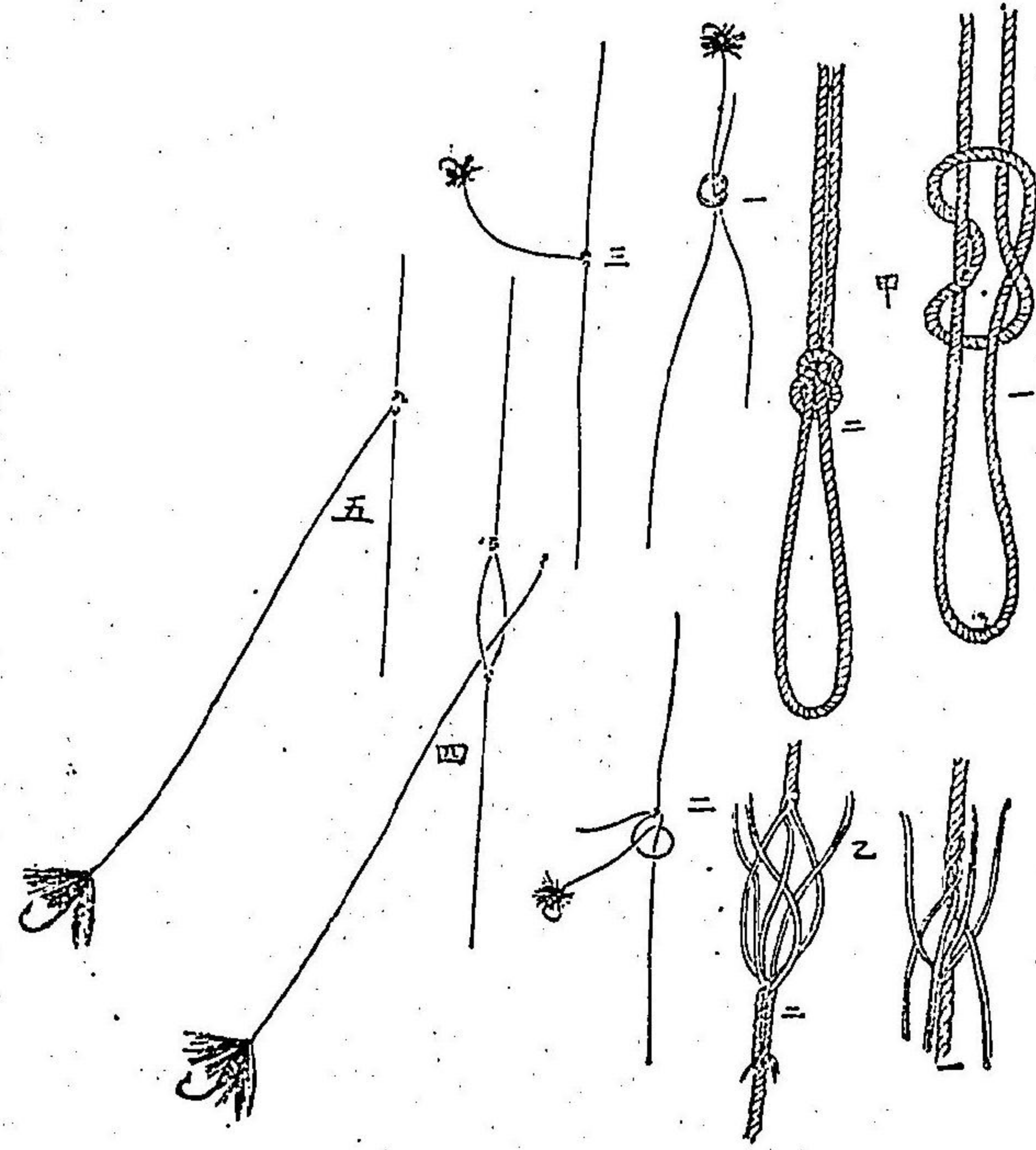
激に因り緋絲に撚を生し爲めに不便を感ずることあり獨り緋絲のみならず竿釣を爲すに緋絲に附する所の沈子に於ても亦然り又延繩鈎に於ても強勢の魚の反

四の方結絲縲 圖一十二



- 五 サトムスビ
- 一、二、三、は其順序を示す
- 一 カメガケ
- 二 ガリガケ
- 三 ヨシハマガケ
- 四 メラガケ

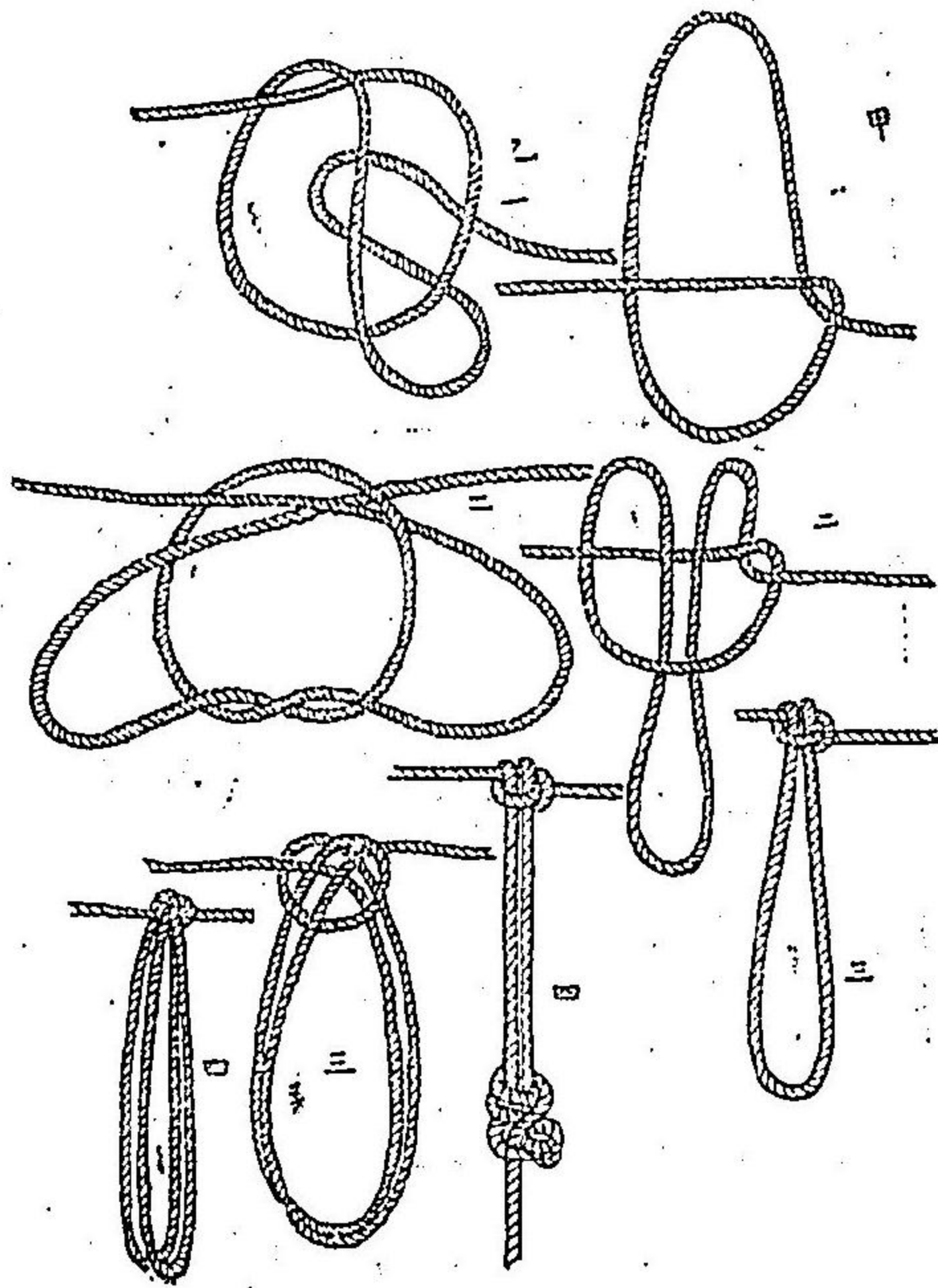
三の方結絲縲 圖十二



- 甲 ツボムスビ
- 一、二は結方順序
- 乙 ツボサツマ
- 一、二は結方順序
- 一、二、三は蚊鉤ムスビ及其結方順序
- 四 西洋蚊鉤ムスビ
- 五 同結び終りたる形状

撥帳轉する時は同じく枝絲に撚を生し爲めに切斷さるゝことあり是等を防がんには鈎と船絲若くは沈子との間に於て樞フックルを設け 樞は東京の方言「クルリ」又「マ

五の方結船絲 四十二節



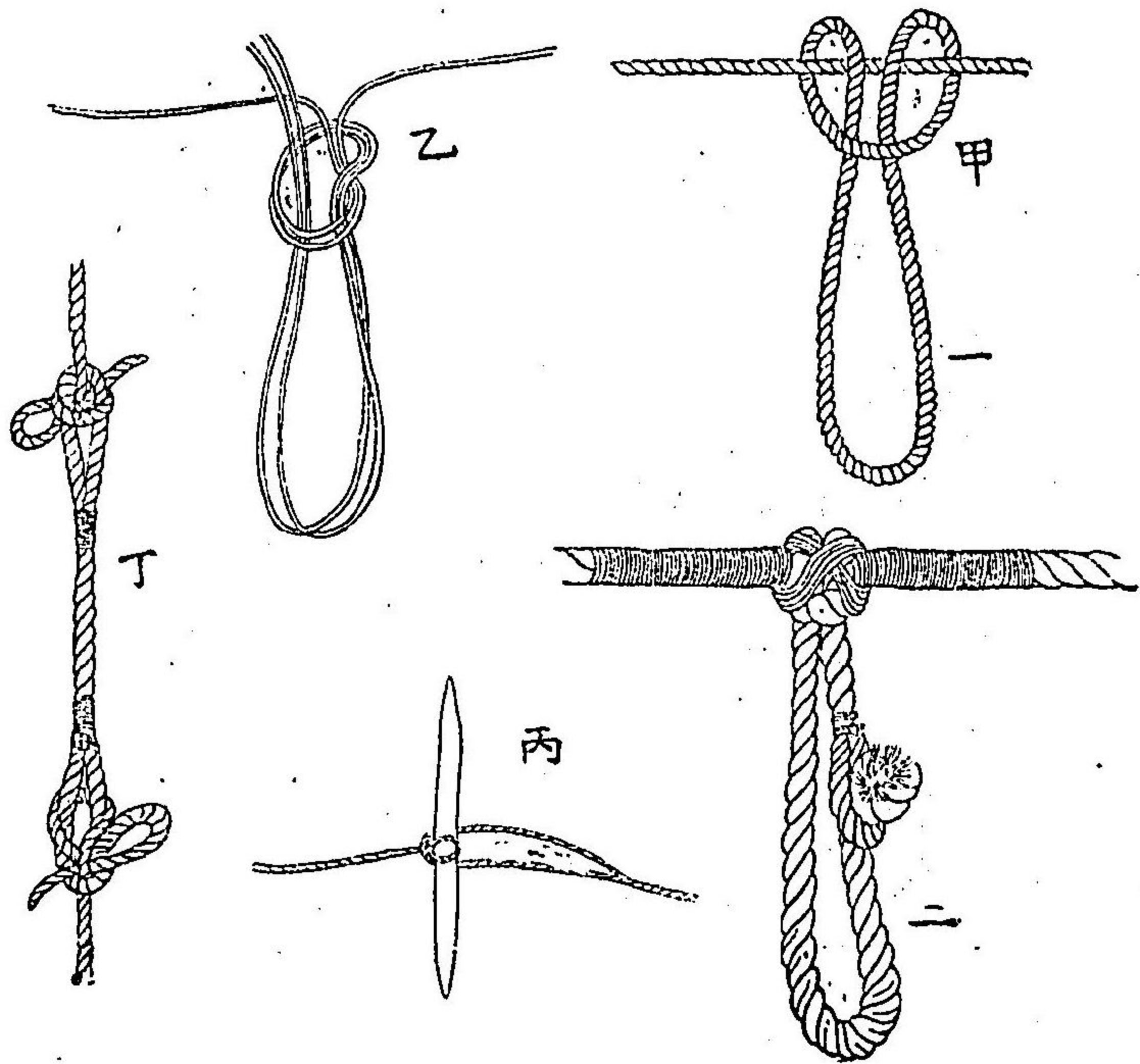
甲 豊後ムスビ

一、二、三、四、は其順序を示す

乙 肥前ムスビ

一、二、三、四、は其順序を示す

六の方結船絲 四十三節



甲 シヨナガケ

一、二は其結方の順序を示す

乙 サカラムスビ

但し延繩の幹繩結ひ方

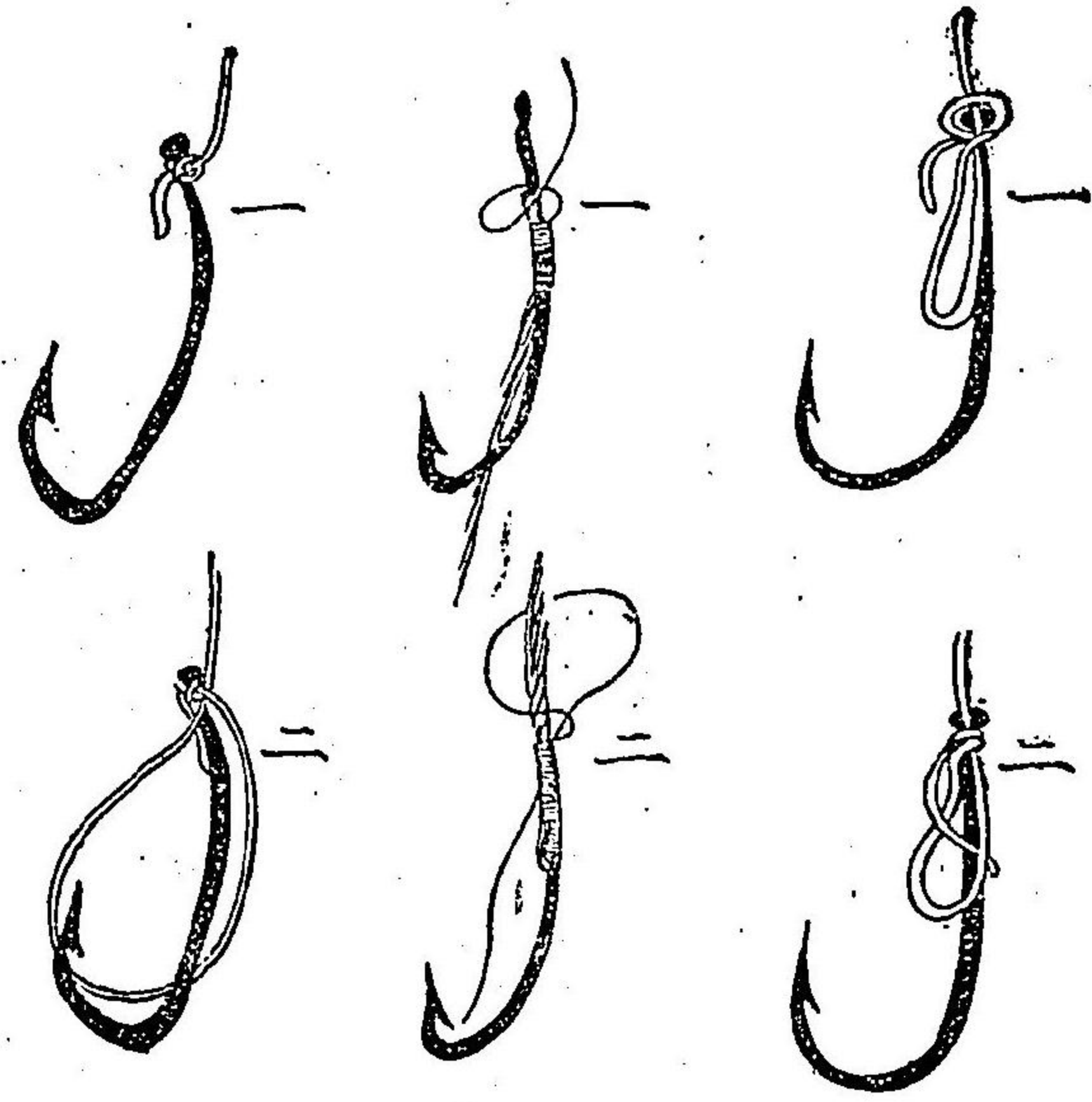
丙 鱈延繩の幹繩結ひ方

但し阿波國地方にて使用するもの

丁 鮫鮪等大魚の延繩の幹繩結ひ方

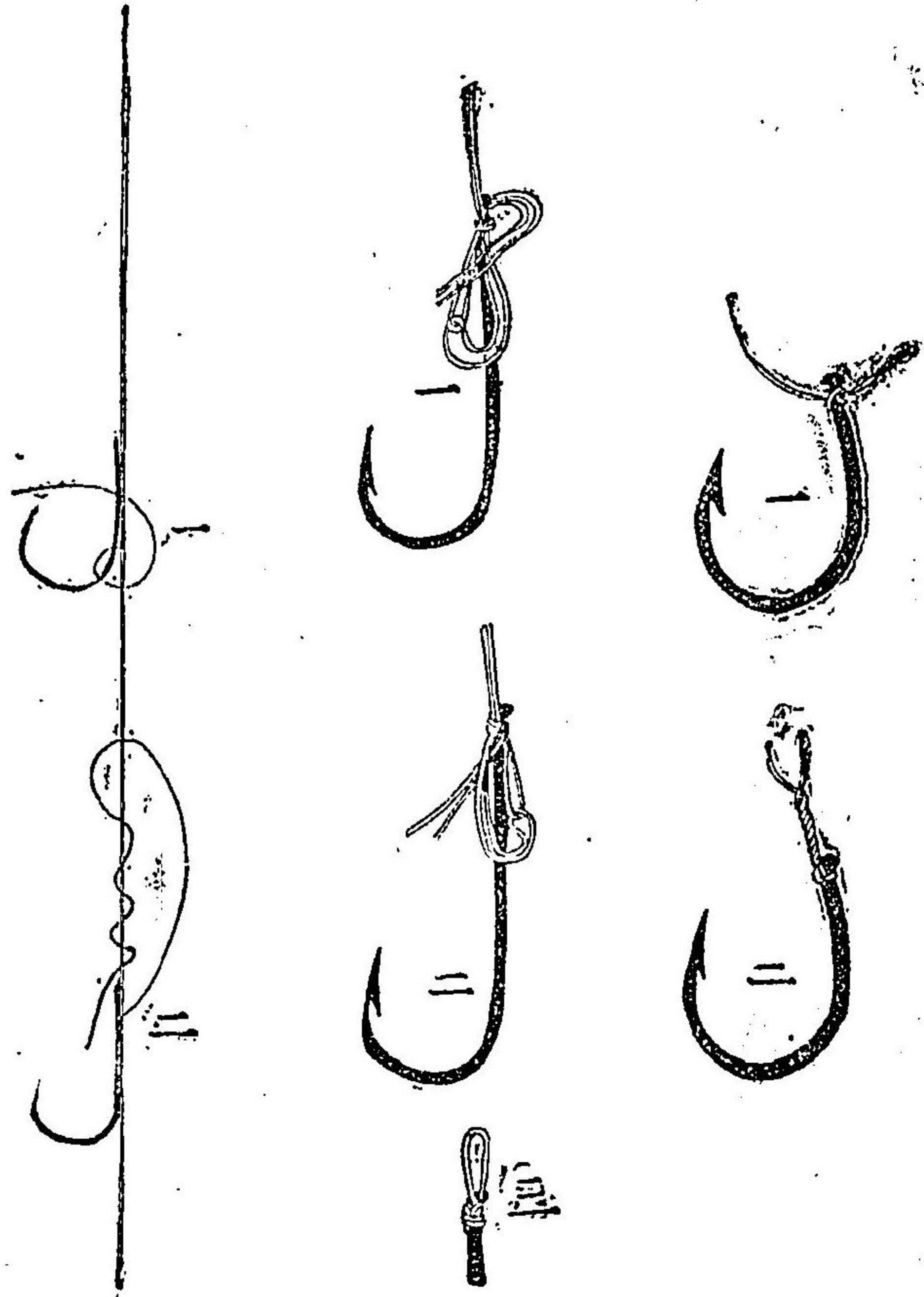
但し阿波國地方にて使用するもの

一の方結元釣 圖四十二



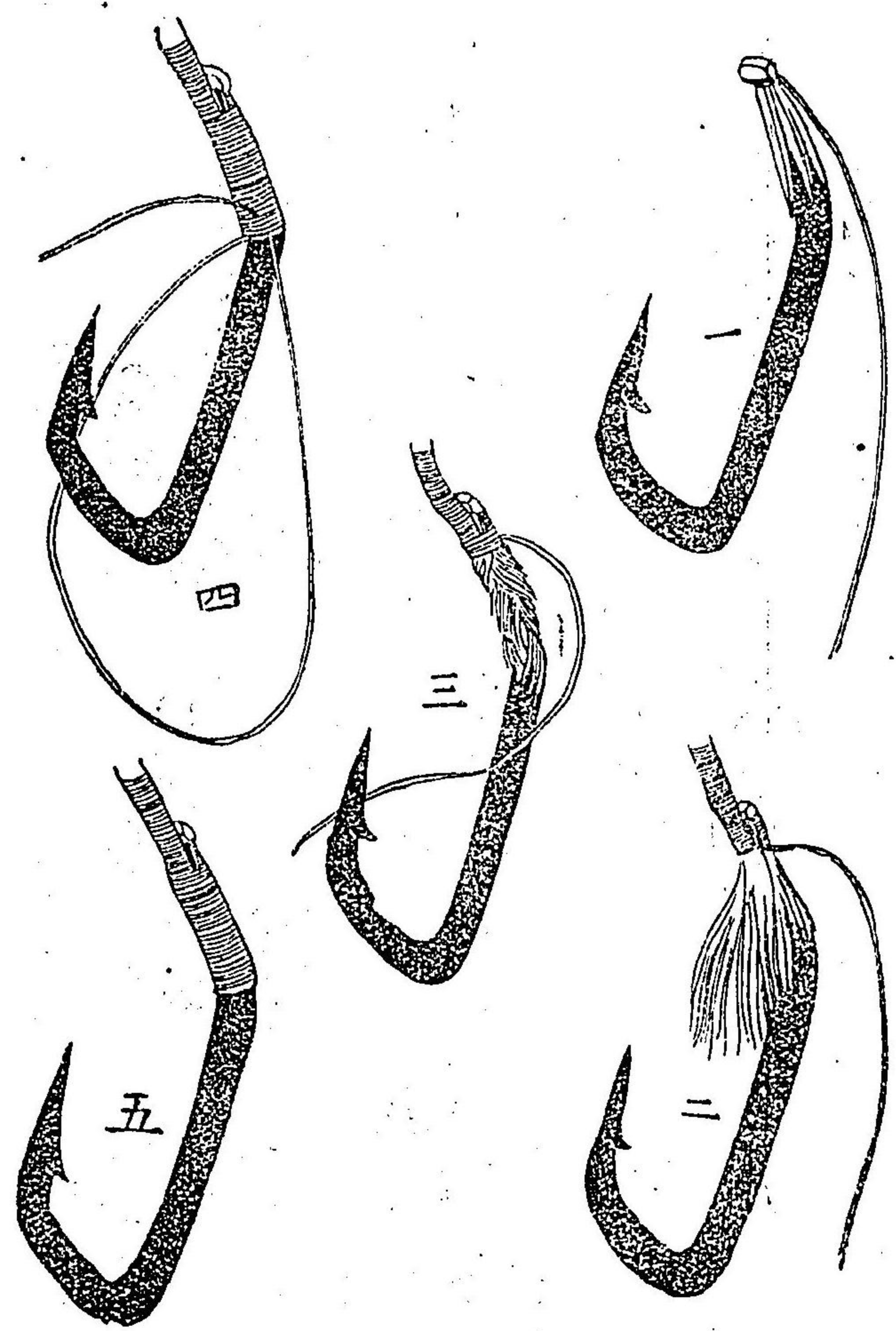
天蠶絲を釣鈎の鈎元へ結び付くる方
法を示せるもの
一、二の数字は結び方の順序を示せ
るもの

二の方結元釣 圖五十二



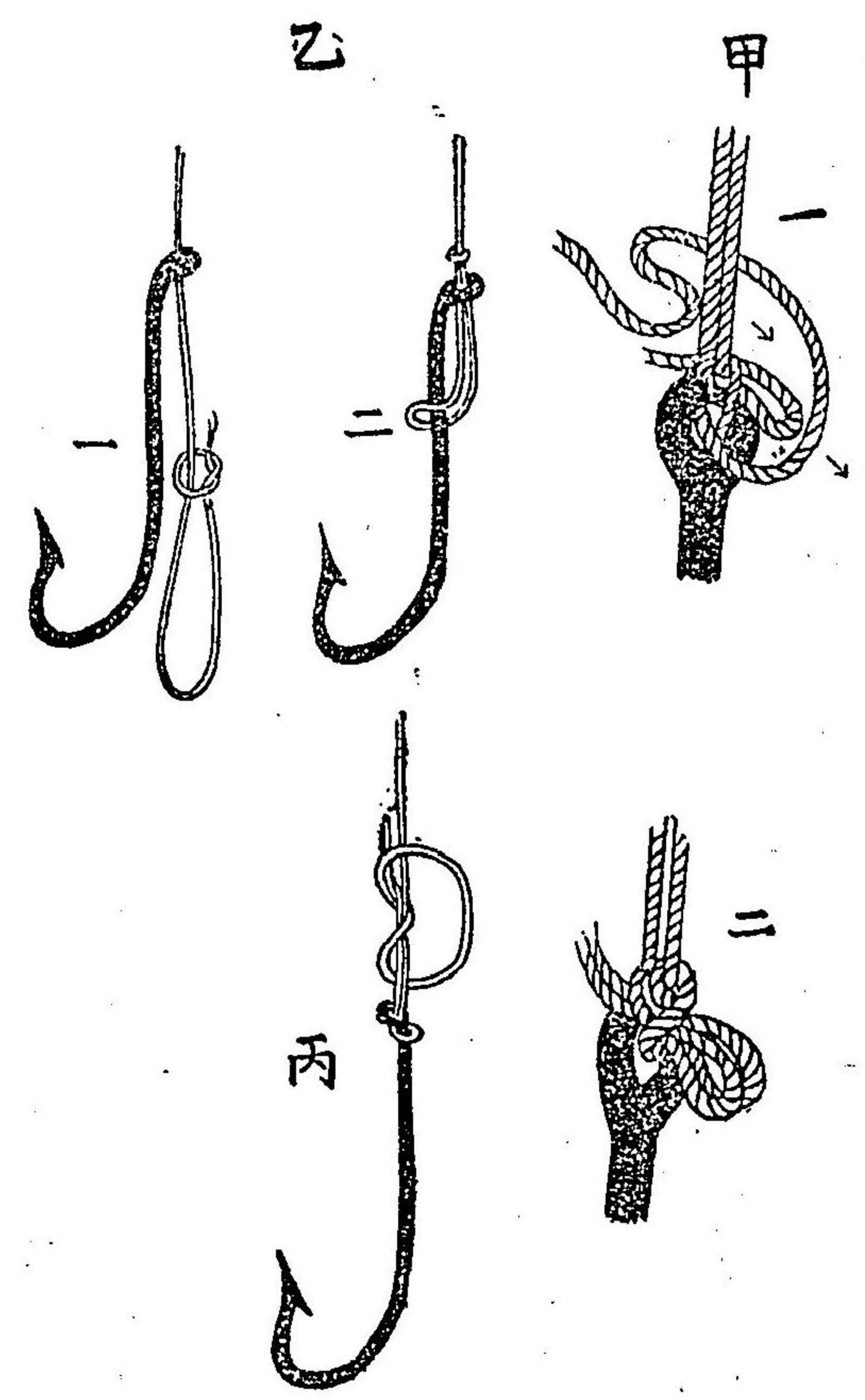
右方は天蠶絲を以て
鈎元の結付方を示し
左方は鮎懸鈎の鈎元
の結び方を示す

三の方結元鉤 四六十二第



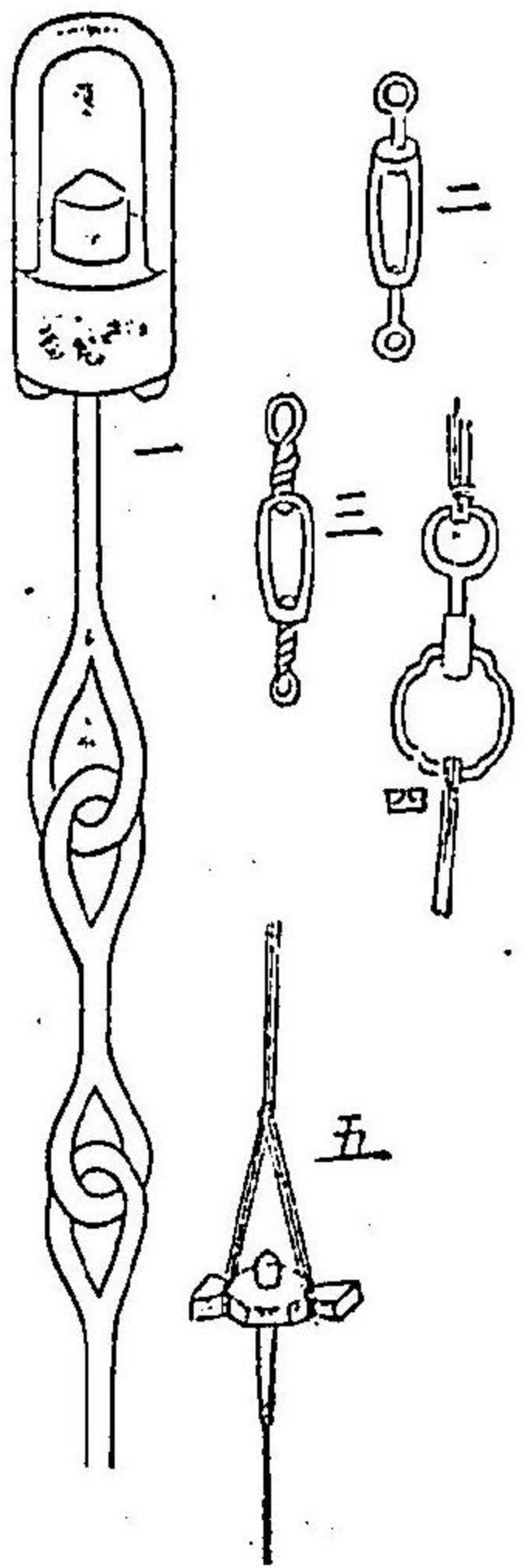
大ふる釣
鉤の鉤元
付方を示
せるもの
一、二、
三、四、
五は其
順序を
示す

四の方結元鉤 四十二第



甲 但馬國鮫釣
鉤糸付方
一、二は其順
序
乙 歐米の糸
付方
丙 同前

第二十八圖 辰 燃



自在に廻旋せしむるの装置を爲すを宜しとす
第二十八圖は之れを示すものなり

第三節 餌料

釣魚に於て最も緊要なるは餌料とす東京の方言之を「エサ」と云ひ地方に依り「エバ」
羽前伊「エデ」長崎「エド」國「エボ」日向「エボ」筑後等と云ふ蓋し擬餌鉤を用ひ全く餌料を要せ
ずして釣り得べき魚類は實に僅少なるが故に若し其餌料の缺乏に際しては多くの魚群を目撃するも出漁すること能はず看す看す之を散逸せしめ漁利を失ふことあり宜しく貯藏に心を用ふべきなり而して其餌料は活き魚若くは生蟲を以てすべきものあり捕りて貯へ置ける魚介を用ひて足れるものあり全體を以てすべきあり肉片を以てして可なるものあり生物にあらざるも釣り得べきものあり皆

其捕らんと欲する魚類の性質に由る又之を捕りて貯ふるに油漬に爲すものあれとも種類多からず又鹽漬に爲すものは種類少からず歐米にては多く氷藏して貯ふれども本邦未だ氷藏法を爲すもの未だ少なし
今重要魚類に就き用ふべき餌料の概略を左に表出す表中特に地方を限り用ゆるものは地名を註記す其註せざるものは全國若くは數ヶ國に通じて行はるゝ所と知る可し

魚名

餌

料

柔魚 魚
鰻 魚
嘉魚 魚
飯魚 魚
鰻 魚
鰻 魚
鰻 魚

イカ、鰻、サワラ、雜魚
イカ、鰻、メカラ（陸中）
蚯蚓、蝗、蛆、柳の蟲、竹葉に生ずる蜘蛛
章魚の足、陸蟹、水仙の根
イカ、章魚、泥鰌、生鰻、鹽鰻、玉筋魚、鱧子、飯蛸、鱈、仔鰻、小蝦
蝦、川蟲、荏粕（信濃）、アヤ（加賀）
イカ、鰻、章魚、蝦、小鱈、アブラメ

一種の蠕蟲にして淺き海底の泥中に栖むものなり此の物は鯛の極めて嗜好するが爲め専ら其釣餌となす故に「タヒノエ」の名あるに至る三河國碧海郡大濱村の漁夫は往古より蝨を以て鯛の餌料に供し來りしが收穫甚だ多く極めて良餌なるが故に之を用ゆるもの漸次増加し近年に至りては該地方は論なく志摩紀伊等の諸國にまでも輸送するに至れり其産地は碧海郡幡豆郡の界矢作川下流の淡鹹三水混交の中にあり生産後凡三ヶ年を経れば長さ四寸周圍二寸許に成長す漁者が主として餌料に用ゆるは此の時に在り蝨の沙中に在るや其巢居する處には必ず直徑二分許なる二個の小孔ありて其下相通す二孔の間相距ること一尺乃至二尺にして稀には四五寸のものあり凡て距離の近きは其孔深く距離遠ければ孔淺し退潮の時を待て其孔を認め之を掘るときは獲ることなし器具は通常耕作に用ゆる鍬にて足れり其孔の淺きものは徒手にても捕へ得可し捕獲季節は立春より春の彼岸の頃までとす彼岸後は黒鯛近海の淺處に群集し満潮の際蝨の孔を發き之を食ふを以て蝨自から其孔を填め害を避く故に此の時期に在ては之を捕らんとするも其の巢居を認むる能はず冬月に至り黒鯛の水溫を究めて近海を去るに

及べば蝨之を知りて復た孔口を開くなり就中彼岸前は其巢居甚だ親易し故に多く捕獲するは此の時にあり捕獲の後之を蓆囊に納れ海中に投し置けば久しきに耐ふ其法上等の蓆を三分し其一片を兩端より折りて腹縫にし又一方の口も綿密に之を縫ひ蝨百個を納る之を一束と稱す而して蓆繩を以て其口を括り端繩を「方言ルナ」と稱する杉の丸材に結び附け海中に垂下するなり其貯ふる間は一日に一回づゝ表裏の汚穢物を掃除し勉めて清潔ならしむるを要す又蓆囊の底を海底に着かしむるときは蝨は元來泥汁を好むものなれば藪の罅隙より脱出するの恐れあれば能く注意す可し此の物下總國の内海千葉郡寒川村近傍諸村にも多産し房總外海漁村に供給し武藏國久良岐郡富岡村邊に産するものは相模地方の需用に應ず其他産地尙多し

尾張國知多郡野間村海岸に洲蚯蚓と稱するものあり蝨に似て差や異なり長さ三寸より五寸に至干潮の時小鍬を以て洲を掘り之を捕ふ年々四月より七月まで専ら鯛釣の餌料に用ゆ且同郡豊濱村及び伊勢國神島地方へ輸送販賣す

「インギンチャク」は漢名兔葵蒂と云ふ黒鯛の尤好む所のものなれども亦鯛釣の餌

となすを得べし鯛の嗜好すること蝨に及ばずと雖蝨の缺乏せる時代用するに可なり下總國の内海千葉郡寒川村邊にては方言「シンコエモン」東葛飾郡馬加村邊にては「ゴタツボ」武藏國橋本郡大師河原村邊にては「イノツチ」其他「ウミノシリゴ」「ネコザネ」「シリコマデ」「スマラ」「シリコマタ」等種々の方稱ありて種類多し泥沙中に埋伏するものあり巖石の罅間に在るあり隨て形狀色相等に小異あり之を鯛の釣餌に用ひ初めしは近年の事なるが今は房總外海及び相模地方にても多く之を用ゆるに依り内海産地より輸送販賣するに至れり

「岩イソヨ」は海岸岩石の穴の中に栖む者なり長さ八九寸色は黒赤二種あり形蜈蚣の如し之を捕獲するには「ツルノハシ」を以て岩石を碎き引出すなり磯魚を釣るの良餌之に過ぐるものなし關西にては濱蝨と云ふ

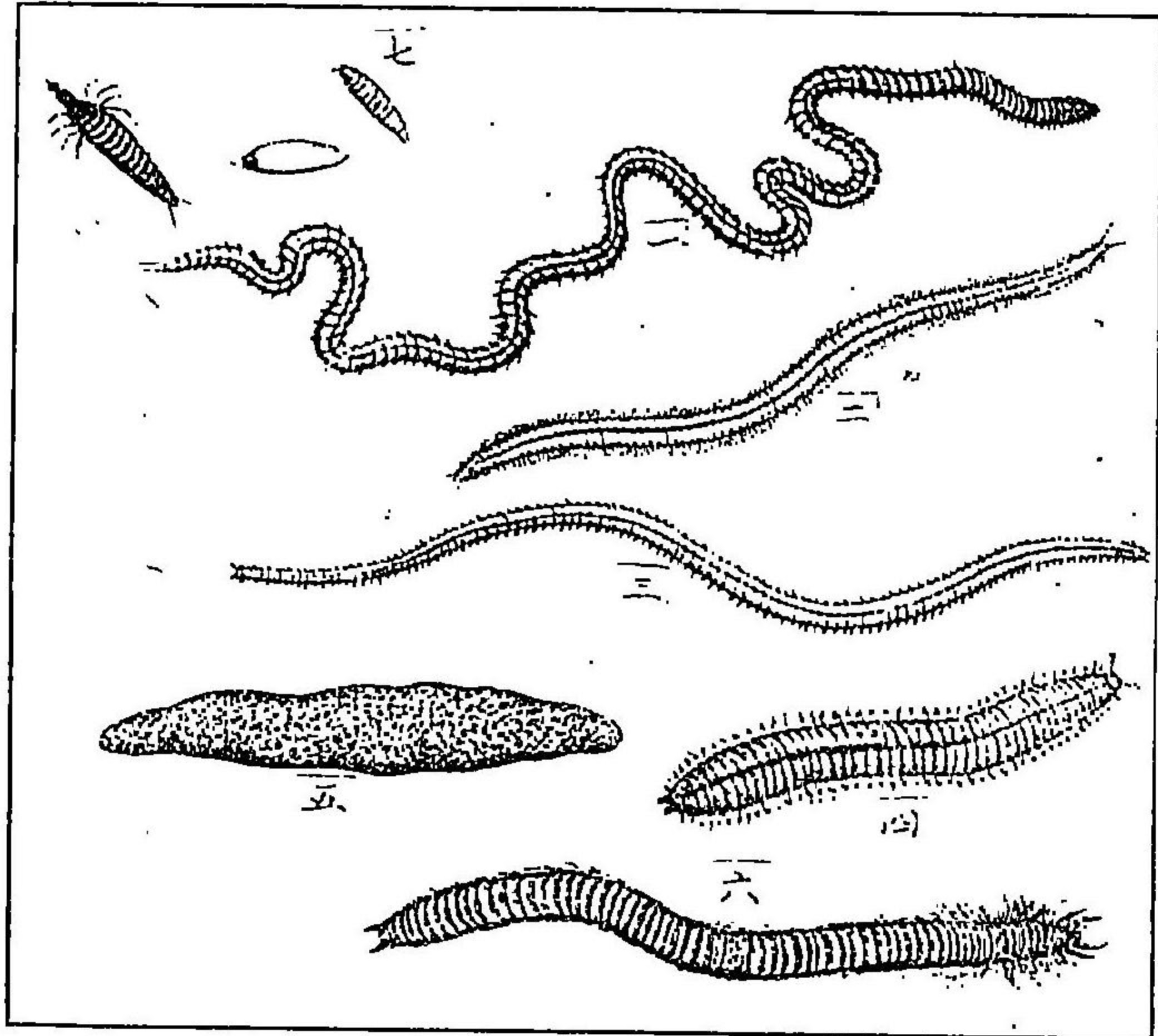
「スナイツメ」は内海の泥沙中に産す明治十三年武藏國荏原郡羽田獵師町の漁夫内田清八と云ふ者同所の干潟にて長さ七八寸にして蚯蚓に似たる蟲あるを發見し試みに之を釣餌に用ひしに他の餌よりも多漁なりしを以て常に竊に之を用ひ居たりしが後に至り人漸く傳聞し皆之を用ゆるに及べるより今は之を掘り捕るこ

とは稚や難きものにて初め「マンクハ」を刺入れ土を起し再び刺入れて之を獲るなり色は赤黒の二種あり赤きものを良しとす黒きものは硬くして餌となすも魚取て之を食はず此の物甚しき臭氣を帶ぶるを以て之を取れば臭氣久しく手に残りて容易に消散せざるものなり然れども鱧を釣るの餌料には之に優るもの未だ會て之あるを見ず

「ゴカイ」は河溝の土泥中に栖む者なり嬉遊笑覽に漢名禾蟲なりとあり又沙蠶ゴカイに當てたるもあり禾蟲は事物紺珠コノハシ蟲食品類に禾蟲ゴカイ秋成時隨海潮ウミウシ田上ウミウシ如蠶味甘ウミウシとあり廣東新語にも其醜爲醜作醜醬則食者之食也などあれば支那にては食ふものと聞ゆれども本邦の「ゴカイ」は實物を見れば食ひ得べきものにあらず然れば嬉遊笑覽に禾蟲に當てたるは或は誤れるか東京にては海岸の潮干満する處にても捕れども駿河田子の邊にては田の中に此の蟲殊に多く生す土人「シホムシ」と云ふ禾を害する故を以て農業者年々勉めて之を除き出ると云ふ之を貯ふるには淺き桶に河水を盛りて放ち置き夏は一日三回冬は一日に二回水を換れば夏は三日間冬は三四十日間位其生を保つべし

「イトメ」は「ゴカイ」に似て細小なり色赤けれども尾の方白し土泥中に栖息するものにして秋の土用に至れば其皮脱して水面に浮ぶ其脱皮せしを「バチ」と云ふ十一月下旬に至れば盡く死して復た現はるゝことなし此の物秋土用前後地中に卵を産み然る後其皮を脱し水面に浮び出て死するものゝ如し故に「バチ」を釣餌に用ゆるは纒に三四十日間止まる之を捕獲せんには夜中水田又は小溝等に至り小網^{ナデ}を以て抄ひ捕る又松明を振りて水面を照し其火光に聚まるを待て之を捕ることあり然れども一度に多く抄ひ捕るときは傷つきて死するもの多し故に徑三四寸の網網にて二三個づゝ抄ふを良しとす多く之を獲るは満月の前後に在り之を貯ふるには底潤く口峯まりたる桶に淡水を盛り其中に放ち空氣に觸れざらしむるの装置を要す水深きに過ぐるは悪し一吋位を以て程度とす此の蟲は外皮極めて軟弱なるに因り纒に物に觸るれば忽ち破れて白黄色の液汁を漏出し外皮縮少して用ふ可からず故に桶の内部は成るべく滑かならしむ可し若し桶を清潔にせんとて砂を以て磨き其木理を粗にし又は底板の合せ目に凹凸あるが如きは蟲の外皮擦り剥くことありて悪し一反て水垢の着きたるを良しとす又畜養中空氣に

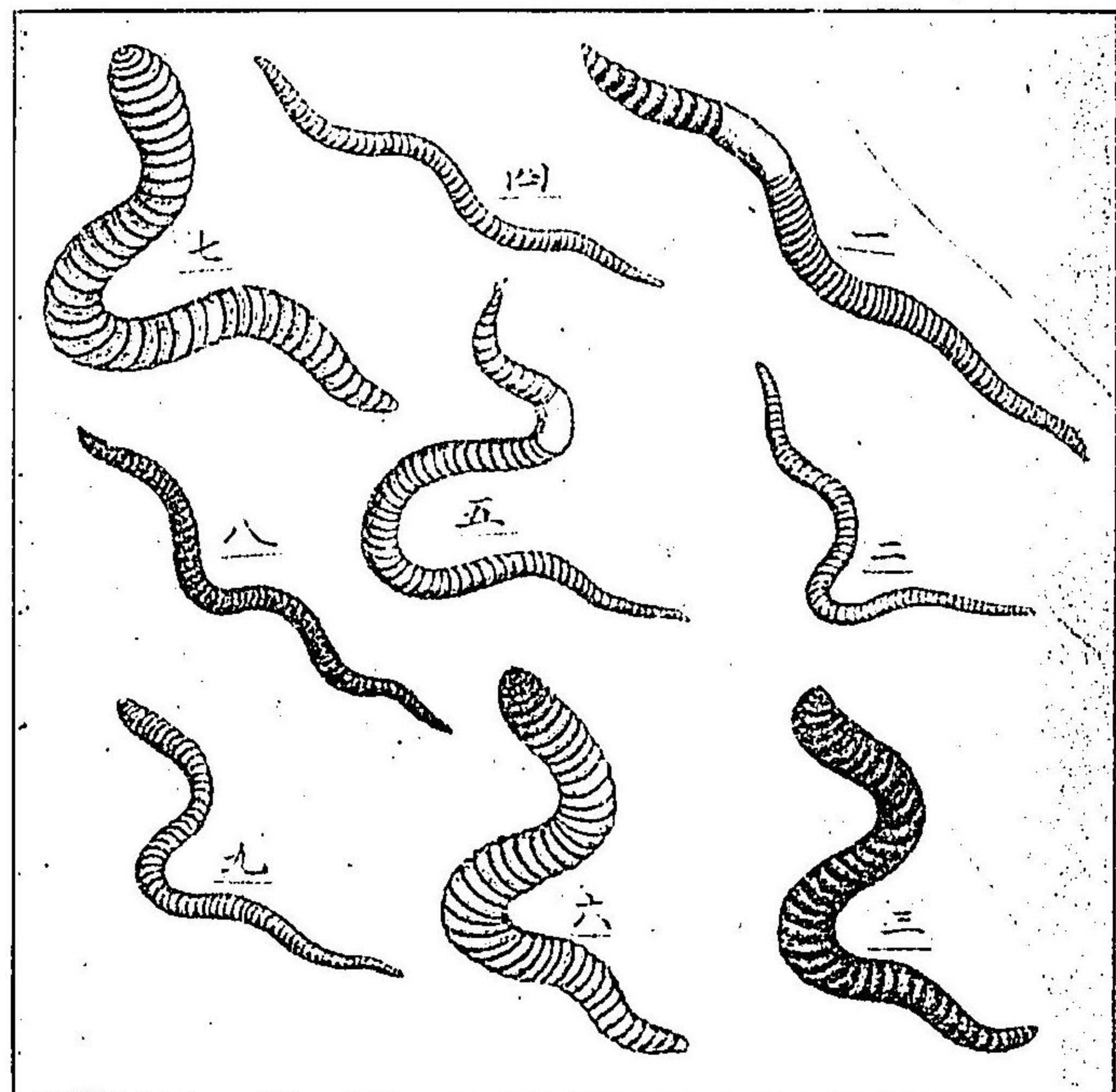
第四圖版



餌 料

- 一 スナイトメ
- 二 ゴカイ
- 三 イトメ
- 四 バチ
- 五 フクロエテ
- 六 外皮ヲ脱シタルモノ
- 七 川蟲

第五圖版



料 餌

- 一 大マエサ
- 二 小マエサ
- 三 バカエサ
- 四 キジエサ
- 五 アヅキエサ
- 六 ムクリエサ
- 七 ドバエサ
- 八 ムラサキエサ
- 九 ハマエサ

觸れしむれば初め淡紅となり黄色に變し遂に綠色となりて死に至らざるも餌と爲し難し故に桶には必ず蓋を覆ひ以て空氣の侵入を防ぐ可し一日に一二回づゝ淡水を注ぎ換へ斯の如くにして怠らざれば五六日間其生を保つ可し

「フクロエサ」は形狀「岩イソメ」に似て外皮を被れり武藏國荏原郡羽田村大森村邊の海面水深一尋許にして芥ある場所に産す夏の初めと秋と兩度之を捕獲す大なるものは七八寸に至る専ら黒鯛釣の餌料に供す之を貯ふるには薄き鹹水に入れ置き時々水を交換すること他の餌蟲類と異なることなし

蚯蚓に釣餌とすへき種類のもの多し「大マエサ」「小マエサ」「バカエサ」「ムグリエサ」「キジエサ」「アヅキエサ」「ドバエサ」「ムラサキエサ」「ハマエサ」等の稱あり是皆東京の方言なり「大マエサ」「バカエサ」「ムグリエサ」は鰻釣に用ひ船にば「小マエサ」「キジエサ」「ムラサキエサ」を用ひ鯉には「ドバエサ」を用ひ蝦には「小マエサ」「アヅキエサ」「ムラサキエサ」を用ひ餘には「ムグエサ」を用ひ蝦虎には「小マエサ」を用ひ「イナ」には「キジエサ」を用ふ

蚯蚓を索むるには濕地にある小竇の邊に丸藥大なる蚯蚓の糞ある處を認め此を穿ては多く栖むものなり之を貯ふるには糠と塵芥とに食鹽少量を混し土器に入

れ其中に畜へは永く生を保つへし又茶の煎し滓の中に養ふも善し蚯蚓を鉤に附くるには頭より刺す可し

川蟲は一名瀬蟲と云ふ流川中の石下に棲息し殊に水垢着きたる石にのみ附着す亦外皮を被へるものなり此の蟲小鮎の上ると共に出つ之を貯ふるには竹箬を以て拾ひ取り箬又は春フに納れ流勢ある小溝に浸し置くべし若し流水に浸すの便なければ時々淡水を注ぎ風の流通せざる處に置き菜葉を以て覆ひ置けば五六日の生を保つべし

此の他蛆ウジ柳の蟲米の蟲栗實中に栖む蟲松皮の間に生する蟲蠶の蛹羽蟲船蟲の如きものも魚類の性に應し亦皆餌料に供するを得可し

蛆は東京にて「サン」京都にては「サス」と云ふ川魚を釣る良餌なるを以て京都にては故さらに之を作りて賣物となす其作り方は魚肉を地に置き物にて上を覆ひ一日程経れば蛆に化するなり

餌料に供する蟲類に就ては前來略ほ説き畢りたるが其魚貝に於ても亦貯藏法其他に關する要件あり因て茲に略説す

鰻は諸魚の釣餌に用ゆるものにして殊に鹹水釣漁の第一たる鯉釣の餌には其活きたるものにあらざれば用を爲さず然るに鰻は性甚だ弱く久しく生を保ち難きものなれば頻りに潮水を更換せざる可からず然るも尙ほ夏は十二時間冬は二十四時間位を保つに過ぎず若し少しく怠れば數時間を出てすして皆死す故に之を籠コウ籠イタスに納れ海中に下し置く可し然かすれば數日を保つことを得可し

餌料に鰻を要すること多きか故に又其鰻を捕るべき餌料を要す即ち糠蝦コウセ是れなり曾て安房國安房郡船形町の實業者の説を聞くに同村の海面糠蝦を産せざるにあらざれども土地の産のみにては足らざるが故に下總國千葉郡寒川村又は武藏國荏原郡羽田村邊より買入るゝもの一ケ年の價凡三千圓に至ると云ふ是れ鰻の餌のみならず鯖、鱒等を釣るとき及び棒受網を使用するときは何魚を捕るに拘はらず糠蝦を以て餌とするに由ると雖抑費す所も亦大なりと謂ふ可し糠蝦は生にて用ゆるを宜しとすれども鹽藏せしものも亦用ゆるなり

秋刀魚は安房國に於ては劍魚カヅ釣の餌となす其貯法は一樽に雪花菜キアラメ五升に食鹽二升五合の割にて漬くるなり之を漬くるには樽中に先づ魚を一重並へにし雪花菜

に鹽を混和したるを糝りかけ上に笹の葉を敷き並へ又其上に魚を並ふ斯の如く
 するもの層々にして畢れば鹽蓆にて上を覆ひ小石四升を以て壓しとなし貯ふれ
 は一年を経るも鮮魚の如しと云ふ

大鯖は同地方に於て目劔魚を釣るの餌とす之を貯ふるには鰓より腸を去りて一
 樽に食鹽三升を以て漬け置きて使用する

烏賊の油漬は北國に於て専ら鯛の釣餌となすものにして製法至て難し其法烏賊
 を日光に曝し乾燥尙ほ六七分指頭を以て之を壓すに指頭の痕跡を遺す位を度も
 し之を鱧若くは鱧の油に漬くること一週間餘にして截るものなりと云ふ然るに
 此の餌を用ふれば鯛を釣るに多獲なるも其魚は腐敗を催すこと他の餌にて釣り
 たるものよりも速にして且其油分を海中に遺すか爲め他の漁業に妨害ありと稱
 し或る地方に於ては之を使用することを禁ずるの規約を結びたるものあり是れ
 未だ其理を詳にせざる所なれば宜しく講究すべきの一問題なり

抑烏賊は釣漁の餌に供すること多く殊に鮪釣には最も適するが故に東京近海の
 如きは鮪の漁期に際し烏賊の缺乏するときは一尾の價七八錢乃至十錢甚しきは

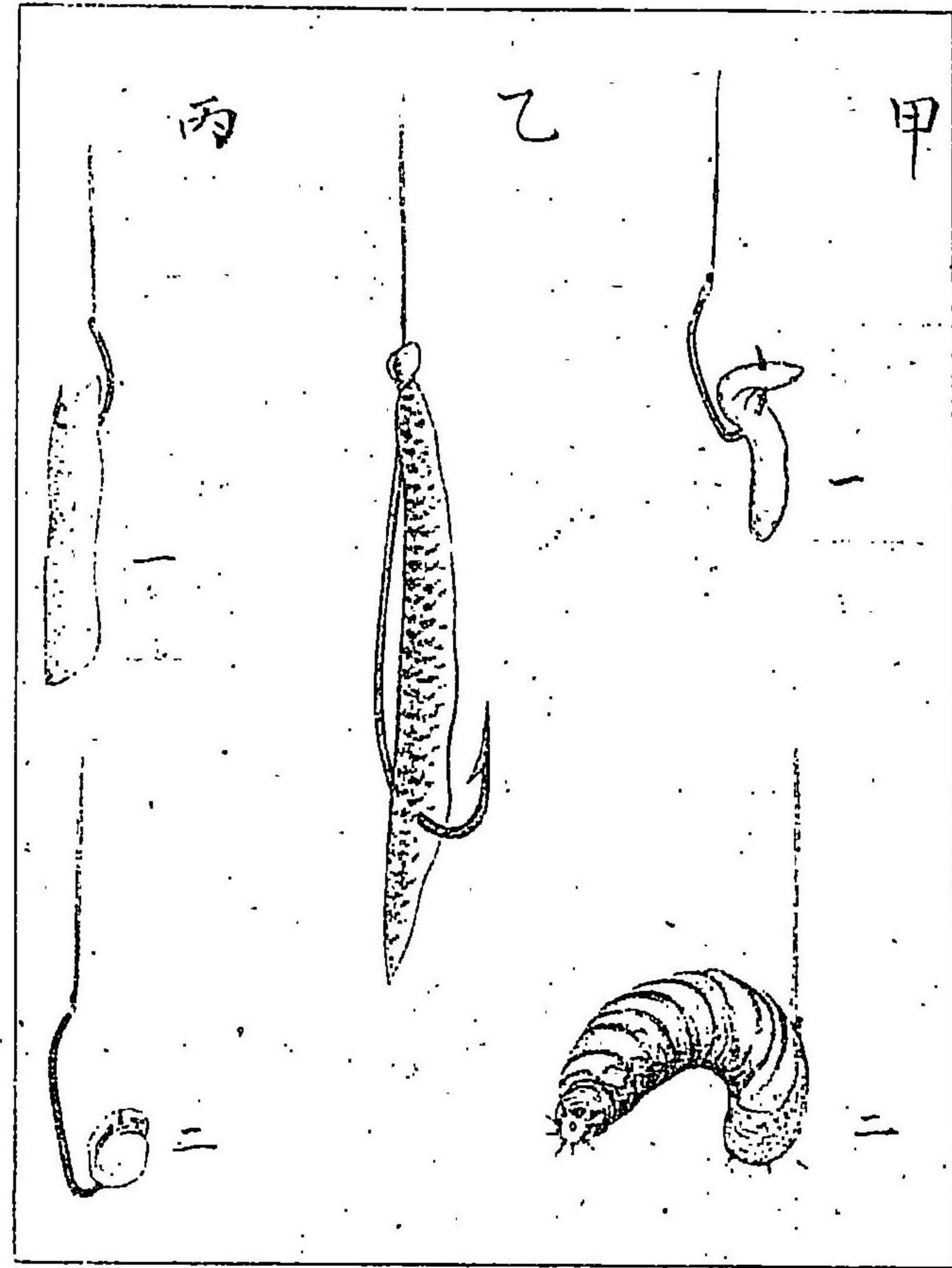
至つては二三十錢を以て地方より買入れ使用することあり有志者曾て之を憂
 烏賊を生蓄せんと欲し之を籠中に養ふことを試みたるも烏賊は籠中に在りて其
 に相闘ひ噬み合ふを以て各々傷を被ふむり久しからずして皆斃れたりと云ふ嘗
 業者は宜しく別に工夫を下し生蓄の方法を案出するあらんことを希望に堪へ
 るなり

又烏賊を幅二分長さ一寸許に切り胡麻の油を以て之を煮又白胡麻を熬り搗鉢に
 こ搗りて粉末となし油煮の烏賊を此の胡麻粉に和し用ゆれば鰈の類を釣るに最
 も妙なり之を用ゆるに當りては少しく噛みて軟かならしむるを良しとす是れ即
 ち油餌の一種と謂ふ可し

蟹の釣餌とすべきものは其種類極めて多しと雖凡て甲の軟かなるものを良しと
 す之を貯ふるには淺き桶に砂を入れ其中に放ち屢々河水を交換すれば八九日間
 其生を保つべし

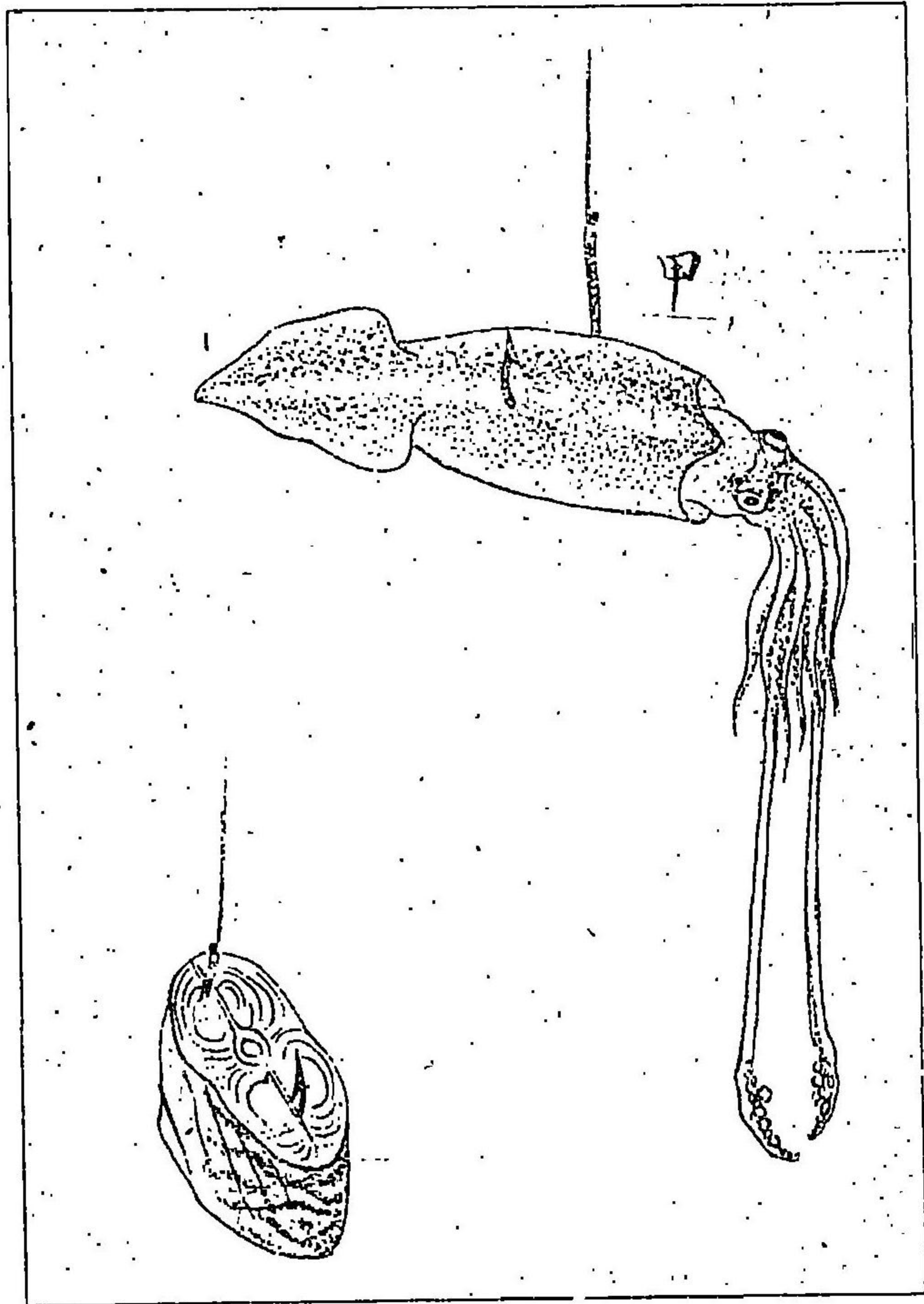
蝦は大低釣餌とすべからざるものなきが如し其貯へ方は淺き桶に淡水を汲み入
 れ少し、食鹽を加へ是に放ち置けば生を保つべし其淡水に栖める蝦には淡水の

一方刺の餌釣 四九十二第



甲 鯛延縄釣
 一、魚肉 二、鱈
 乙 狗母魚釣(魚肉)
 丙 鯖及鱈釣
 一、魚肉 二、魚卵

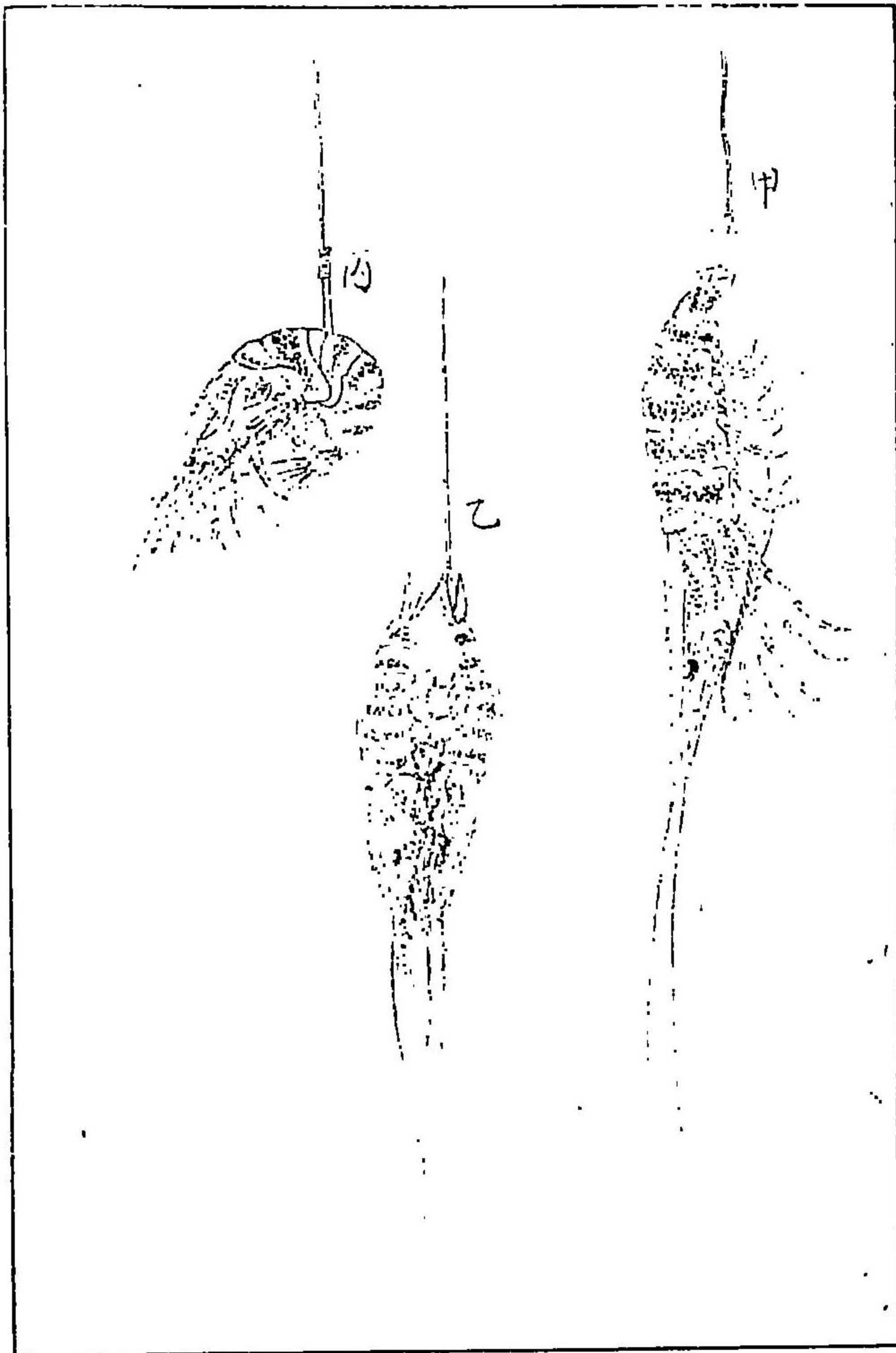
二方刺の餌釣 四一三第



甲 鯛延縄釣(柔魚)
 乙 同 (鯖切肉)

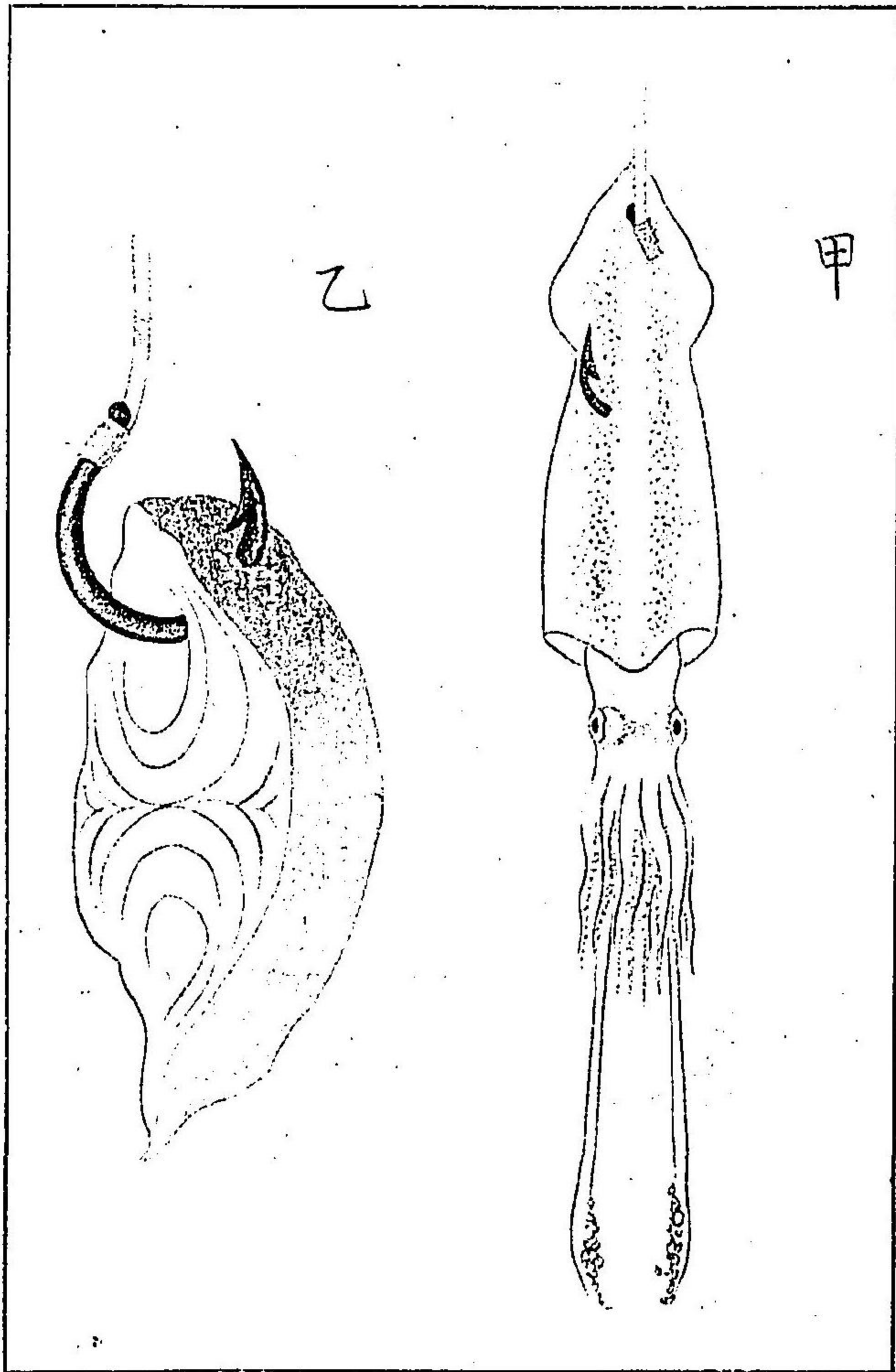
みを以て良しとす蝦は凡て其背をして水上に出さしむ可し
 餌を鉤に装するにも亦心を用ひざる可からず蓋し魚類の餌を食ふや上より俯く
 あり下より仰くあり飛躍して急に衝むあり姑く窺ふて後食ふあり或は鉤と共に
 一嚙して後鉤のみ復た吐かんとするものあり或は鉤ある部分を遣し其餘を啄む
 が如く幾回にも噛み去るものあり皆其性に由る故に餌の刺し方も之に應ずるを
 要す而して魚類は大抵餌を食ふてより直ちに其處を去らんとするものなるが故
 に初め餌を食ふときに於て鉤は深く罹らざるも其去らんとする機に深く口邊を
 刺すを多しとす此の際若し餌の装し方可ならざるものあるときは魚は餌を奪ふ
 て空しく逸し去ることあり是れ心を用ゆ可き所以なり今普通に爲す所の鉤餌の
 刺方二三を示せば第二十九圖乃至第三十圖及第六圖版乃至第八圖版の如し猶特
 別の刺し方あるものは各條下に於て記す可し又殊に狡猾にして巧みに餌を奪ふ
 種類の魚に向ては細絲を以て餌魚を鉤に縛して用ゆるものあり又活魚を餌とす
 るときは鉤を刺すに必ず其骨に障らざらしめ以て餌魚をして容易に死せざらし
 むる様心を用ひざる可からず

第六圖版

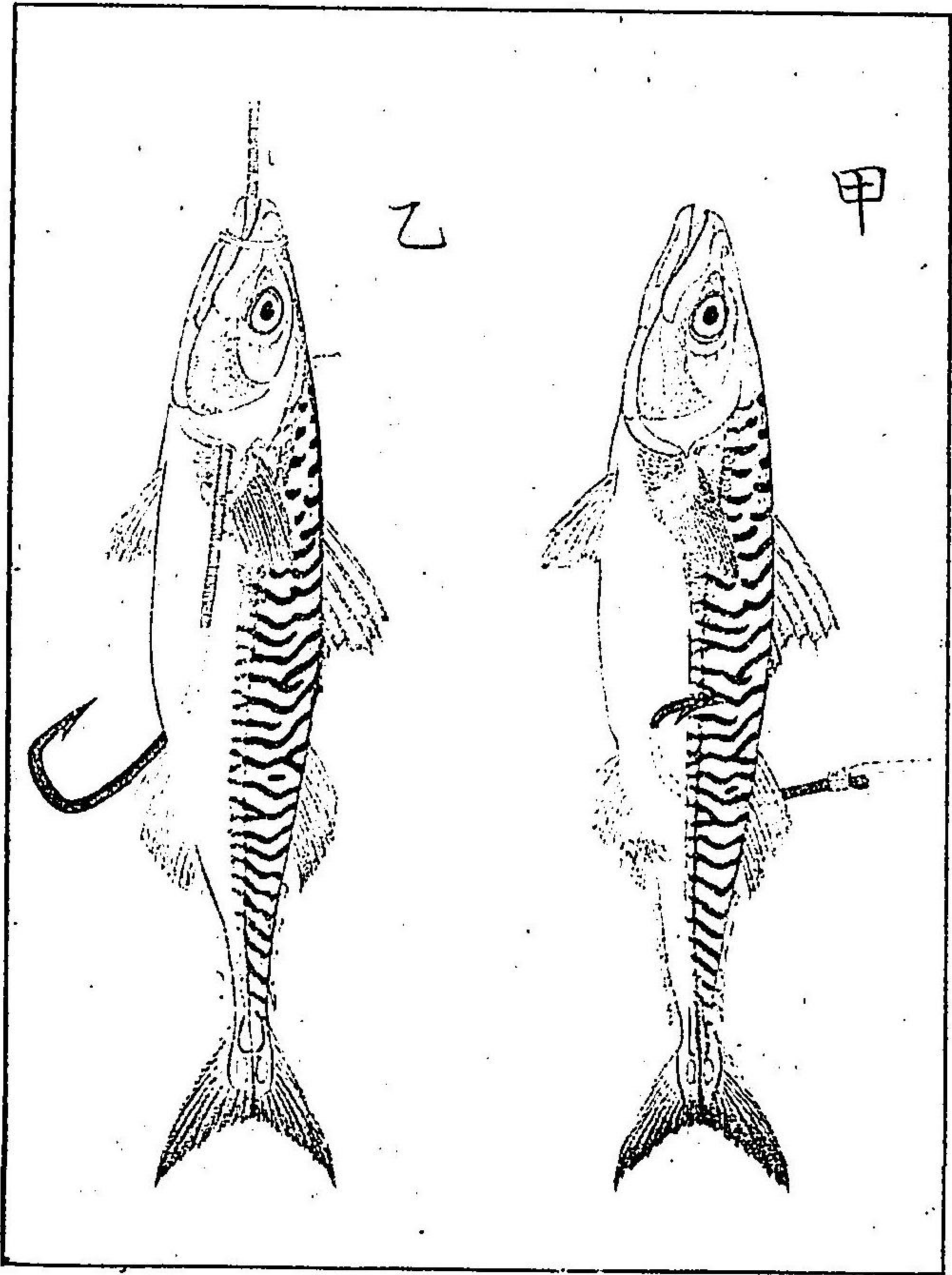


三方刺の餌釣

第七圖版



四方刺の餌釣



第八圖版

五方刺の餌釣

時餌は河海共に釣を垂れんとする場處に於て先づ魚の好む所の餌を投撒し魚を誘集して之を釣獲するものなり元來魚は皆鼻の感覺敏きものなれば香氣高きものを撰ひて之を用ふ鹹水に於ける活餌には鯉釣に鯉及び鯉ヒシを用ひ其他前に記せる糠蝦を以て鯉、鰻、鮒等を誘集するの外尙ほ淡水魚には蒸り糠干鰯、小麦とを土に混和し團子となし之を水中に投するものあり又油粕を用ゆるものあり其他蛹を蒸りて粉となし是れに煎たる「フスマ」を混和して用ゆるあり又鱈の脂と雪花菜とを混和して用ゆるあり酒糟、餵糟を用ゆるあり又鹹水にて魚腸、魚脂を用ゆることもあり

歐米諸邦にては最も鯉漁を勉むるを以て鯉釣餌料に就ては頗る研究を盡せり曾て米國「ニューファウンドランド」の沖合漁業に就き「ノバスコチヤ」及「ニューブリュンswick」州漁民に許可する漁權の事に關し米佛の間に爭論を生じたることあり而して此事件に就き國際問題の要點たるものは漁民に餌料購入を許すと否とにありき是れ餌料の供給は遠洋漁業に大關係あるを以てなり今歐米にて鯉及び「ハドック」(鯉の類)の餌料に供するものを擧ぐれば鯉、鯉類の小魚の生

鮮なるもの又は氷藏、鹽藏せしもの及び鱈の肉片若くは卵巢「ヤツメウナギ」の肉
 海鳥の肉各種の貝肉、蝦、蟹、磯、蟲、家畜の内臓等を用ひ又貝肉は「ムツセル」(淡菜)「ホ
 エルク」(シ)「カ」(シ)「リムベツト」(「ロメガサ」)等にして佛國西岸なる「ロチエル」(近傍)「エスナ
 ングス」及び「エイガIRON」に於ては其餌料に供給する目的を以て故さらに貝類
 を養殖するものあるに至れり蓋し鱈の如きは貪食のものなれば餌料に供すべ
 きもの數多之あるべしと雖遠洋漁業の發達を促すべき今日に在りては是等の
 餌料中如何なる種類が最も好餌なりや又本邦は歐米に比して魚類の種類多け
 れば其中には歐米に無き所にして前記の諸餌にも優れるものあらん故に之を
 驗して豫め其良否を知るは甚だ緊要の事なるべし是れ獨り鱈に於てのみなら
 ず各種の釣漁に於て皆然らざるはなきなり

第四節 竿

本邦に於ける釣竿は専ら竹を以て作り普通用ゆる所のものは短きは三尺より長
 きは五間に止まる而して其類を大別すれば三種あり延竿「ハネ竿」繼竿是なり延竿
 とは別段なる細工を加へざるものにして鹹水上に於ける諸漁及び淡水に於ても

職業として爲すものは多く之を用ふ遊漁と雖亦之を用ゆること多し其長短は漁
 する所の物に應し一ならず「ハネ竿」は長さ三尺より四尺位なるあり手元に絲卷を
 附け其縞絲は竿の内部を通して末に垂るゝあり又外部に金輪五個許を附け縞絲

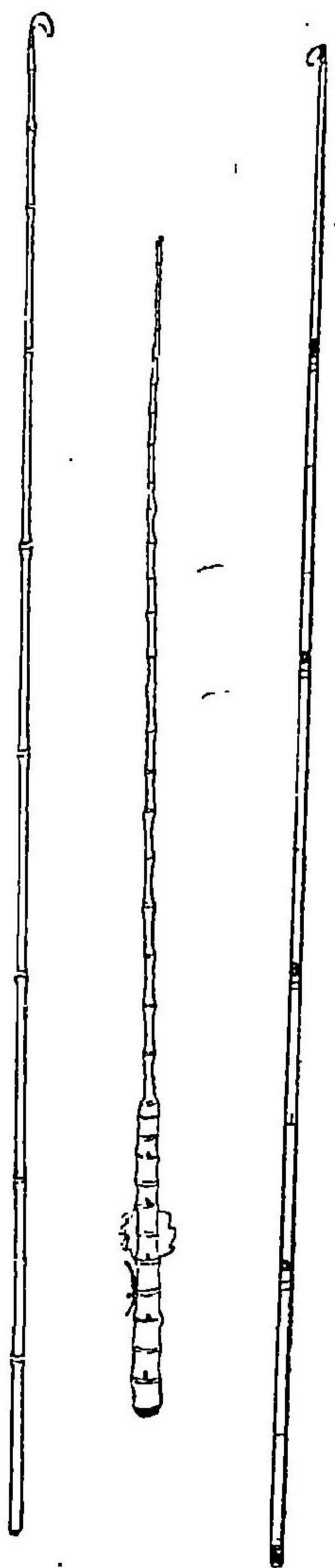
三十一

竿の種類

右、延竿

中央、ハネ竿

左、繼竿



を之に通し竿末に垂るゝあり共に縞絲の伸縮を自由ならしむる爲めに設くるも
 のなり此の竿は外海に於ては使用するものなく皆淡水若くは内灣の一隅に於て
 多く遊漁に用ふ或は職業に稍や長きものを用ふることあるも多からず又一種滑
 車を附けたるものあり是れ専ら淡水の遊漁に用ゆる所なり繼竿は二三本繼きよ

り多きは十餘本継ぎのものあり其一本毎の末端を麻にて捲き漆を以て其上を綴り固む是れ次の竿へ篋挿むべき所なり若し此の部分に節あるときは必ず其節より折るゝものなり又其末は鯨鬚若くは布袋竹等にて作るあり遊漁の具にして職業上に用ゆること極めて稀れなり

釣竿に用ゆる竹の種類は眞竹破竹寒竹胡麻竹布袋竹矢竹ウキス竹根堀女竹等とす然れども是れ皆俗稱なれば其漢名等を左に列記す

マダケ 漢名 苦竹 鹹水漁には多く之を用ふ

ハチク 漢名 淡竹

カンチク 漢名 紫竹

ゴマダケ 漢名 観音竹又は紫竹とも云ふ

ホテイチク 漢名 人面竹

ヤダケ 漢名 箭竹又は篋竹

メダケ 漢名 合衆竹

ウキス竹 是は一種の竹にはあらず淡竹にも箭竹にもウキスと云ふもの

あり最も輕き竹にして初生の年夏の土用過には伐るなり

根堀 是は箭竹の根なり鮎釣竿の手元に用ふ

凡そ釣竿の用に供すべき竹の質に二様あり一を野方と云ふ高原の産なり一を里と曰ふ平原の産とす總て竹は地質礫礫なる處に生したるは強し又篋を離れて獨立せしものは風に吹かれて其成育に艱苦を経たるか故に其末婉柔にして折るゝことなく枝横に張り枝落の跡淺くして節強し山谷に生せし者は風に當りしこと少しか故に釣竿には適せず

竹は生してより三年目位までのものを良しとす鹹水漁に用ゆるものは磯釣竿鯉竿立場竿鱸竿等の種類あり長短細太用途に依て一樣ならずと雖大抵磯釣竿は細くして勾孿屈撓し易きを善しとし鯉竿は太くして彈力强きものを好み立場竿は稍や細長にして末端に節なきを擇ひ鱸竿は大小を用ひ亦屈撓し易きを良しとす是れ魚の罹りたるるとき強く引くも竿の屈撓するに由り縉絲の斷るゝことなきを要すればなり

淡水魚の釣竿は凡て量の輕きものを貴ひ其手元は節間遠くして先きに至るに隨

て近きものを上等とす小鮎釣には初年の竹を用ひ鮎懸釣には二年目の竹を用ふ、伐り時は秋後を良しとす竹は内長のものなれば春夏の間は精氣外に張る故に鞏固ならず又蟲付き易し之を防ぐには伐りて後鹹水に浸すこと五六日間にして之を揚げ後數日間煙の通する處に掛け置けば蟲の付くことなし、鰻の頭骨を焼き是にて善く燻ぶるも亦蟲蝕を防ぐに良し、又竹の枝を除き去るに鋸を用ふ可からず鋸にて挽きたるは折るゝことあり斧を用ふ可し、伐り取りたる竹を晒すには之を泔水に漬すこと二三晝夜にして取出し粗に砂を交せて能く拭ひ晴天に曝すべし、矢竹は淡水漁の釣竿に最も適す、尾張國知多郡のものを名産とすれども、東京にて多く用ゆるものは武藏國南多摩郡八王子邊の産なり、又「ナエ竹」と云ふあり矢竹より太し是は下總國鬼怒川最寄の産なり、又近來相模國箱根山中より枝落の跡窪み淺くして良き品を出せり布袋竹は節の二重なるは節強く通常の品は時として節より折るゝことあり

遊漁に用ゆる繼竿は昔は「マクリ竿」として不束なるものなりしが、享和文化の頃江戸本所中の郷邊に武兵衛と云ふものありて善く竿を造れり、後又利右衛門と云ふ者

之に習ふて亦善く造り出し、是より竿の形を改良するに至れりと云ふ

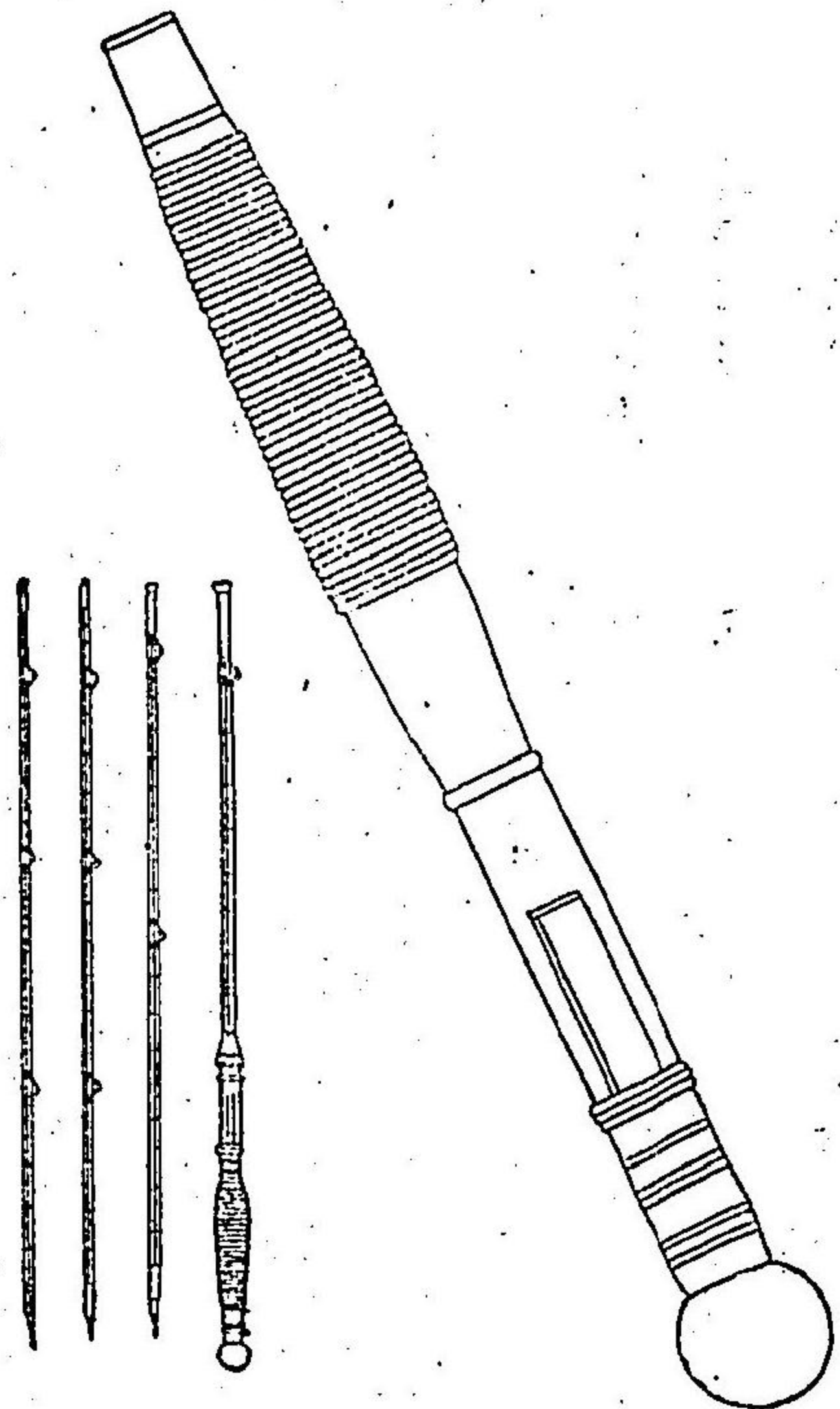
繼き竿の繼ぎ目固くして吻合せざる時は漉油マキツツを塗りて笹め込めば能く吻合すべし、又鮎釣竿の削穂は中途に節一つあるを法とす

繼竿の一種に脈竿イシノボと稱ふるあり、長さ僅に一尺内外あり、鱒釣マスに用ゆるものなれども要するに玩弄物たるのみ、凡て繼竿は携帶に便なれども其實延竿に如かず、未熟なる遊漁者は妄りに金銀等を裝飾し其竿甚だ美麗なるを用ゆるものあれども、斯の如き裝飾は實用上全く無益たるのみならず却て悪しきものなり、何となれば其處より折るゝことあればなり、又是が爲め重量の加はるを以て永く釣を垂るれば手力の疲るゝこと多し、此の類の贅物は釣魚を嚮く者の利を貪らんと欲し、妄りに製造する所なれば用ひざるを可とす、

按するに本邦の竹竿は婉柔にして濫りに折るゝことなく、量亦軽くして操持に便なるが故に歐米人之を好み、今や海外輸出品の一に居り、晩近の輸出品は東京にて製するものゝみにても十五六萬本に至る、然るに其近年の輸出品を見るに製造粗惡にして甚しきは竹の未だ十分乾枯せざるものを以て造れる

あり、竹の乾枯十分ならざるものは蟲生し易し、惟ふに是等の品は歐米諸國に到着する頃は概ね既に蟲の爲めに毀損するなる可し、是れ管に外商の損失のみにあらず、我が國産の名譽を害し、終には歐米の釣漁者は敢て本邦の竹竿を顧るもの無く、爲めに輸出の路を杜絶するに至らん、竹竿を製するもの、此に反省する所あらば亦我が國の幸なり

第三十二圖 鮭釣竿

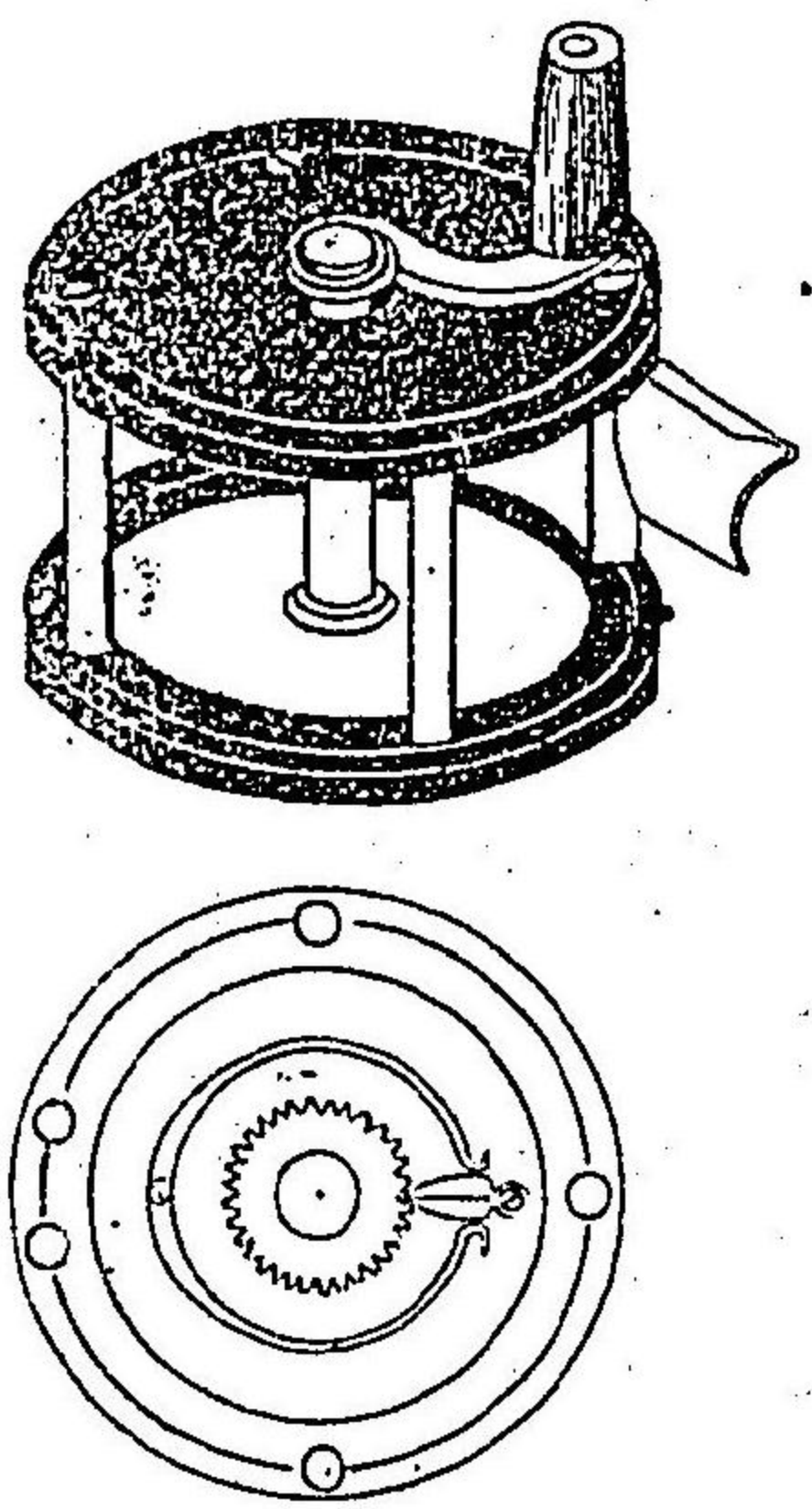


根部の形状を示せる圖

鮭竿の分解全體圖

歐米にては釣竿を泰皮水松、ヒツコリ、（近米利加産ノ樹名）等にて造るもの多し、然れども其最も上品にして最も高價なるは竹を劈り膠と以て矧ぎ合せ六角

第三十三圖 緋絲卷



上方は全體の形状を示し下方は内部の構造を示す

に五六個を配付し是に絡車に收めたる緋絲の一端を通し最上の金輪より下に垂れ以て伸縮を自在ならしむ是

に作りたる竿なり、西洋には固より竹を産せざるが故に其竹材は本邦若くは支那印度より輸入せるものを用ふ、皆三四本の繼竿にして長さ十五呎より十二呎許とす、其手元に手柄あり、其端に金屬製の絡車を附し、是に緋絲を巻き收め、竿の上端に金輪の小なるもの一個を付け、尙ほ是より手柄の一尺許上までに五六個を配付し

鮭、鱒類を釣るに用ゆるものなり、即ち第三十二圖及第三十三圖に示すが如し、此の種の竿には一具の價本邦の貨幣にて金百圓に上るものあり、本邦人の初めて之を聞くものは真に喫驚するならん、然れども歐米人は自から説あり曰く、六上釣漁に竿を撰ぶは陸上獸獵に銃を撰ぶと其理相同し、而して獵銃に高

金を投ずることは人敢て怪します何ぞ夫れ釣竿に高金を投ずるを是れ怪しむ可けんやと蓋し其言理あるに似たり但た其釣竿の高價なるは裝飾の爲め然るにあらすして全く工の精なるに由る而して工の精なるを要する所以は鮭鱒等の大魚を釣るに用ゆるのみならず之を釣るに竿の扱ひ方頗る活潑なるを以て竿は成る可く細くして力弱きを要す然るに若し精工ならざるときは忽ち折るゝの恐れある故に價の高きを論せず精工なる竿を使用するなり

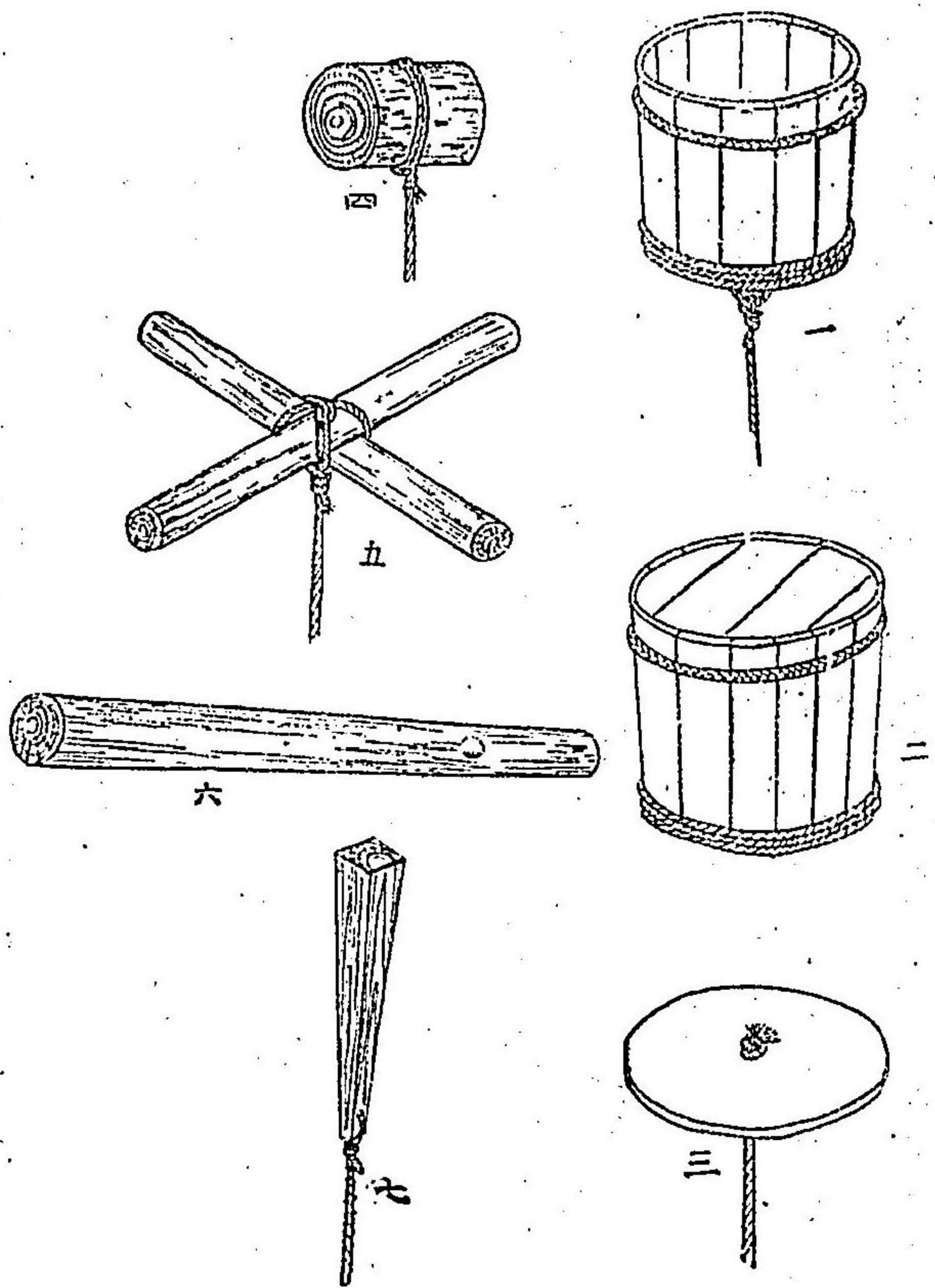
第五節 泛子

泛子は鶏肋編に釣絲之半繫以荻梗謂之浮子視其沒則知魚中鈎とあり和名抄には泛子蔞魴切韻云泛子注に漢語抄云字介とあり乃ち浮子泛子同物なり今此には泛子となし以て綱具に浮子とせるに分つ

此の具は鶏肋編に云へる如く釣を爲すに方り魚の餌を銜むを窺ひ知るの用をなし併せて縋絲に浮泛力を添ふるものにして淡水漁に用ゆる者は通常桐檜等の木材を以て作り是れに漆及蜜陀油にて彩色す其形數種あり隨て稱呼亦一ならず次に其大概を圖出す一種「シモリウキ」と稱ふるあり是れ細小なる泛子に螺鈿ワカを嵌め

たるものにして水中に入るれば光彩を放ち水上より見透し易きに依て之を用ふ

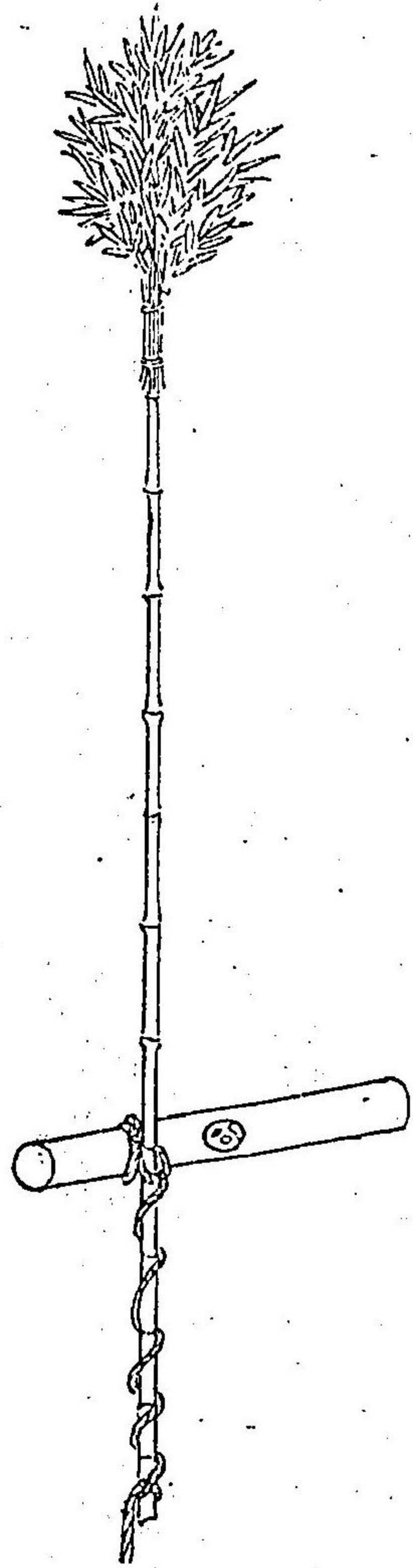
標 浮 四 四 十 三 四



- 一、二 延繩の浮標
大なるもの經一尺
五六寸深さ一尺四
五寸小なるもの經
八九寸深さ一尺位
- 三 同 河魚用
(筑前地方にて用
ゆるもの)經二尺位
- 四 同
桐材經四寸長七寸
(箱根芦湖にて使
用のもの)
- 五 延繩の浮標
長三尺(能登の國
にて使用のもの)
- 六 鮭延繩の浮標
方言ゴム
短きは二尺五寸長
きは六尺
- 七 延繩の浮標
長八寸琵琶湖にて
使用のもの

るなり是等は各種の小魚を釣るに通して用ふるものなれども鯉、鰮、鮎等の如き其

他特に其種の釣漁に用ゆる泛子あり此の類のものは各條下に於て別に記すべし
又路泛子ミウキも云泛子ミウキは小さき赤色塗のものにして上下に小孔を貫きたるに縹絲を
通し以て縹絲の沈むを止め併せて認め易からしめんが爲めに用ゆるものなり凡
第三十五圖 鮪延繩の浮標

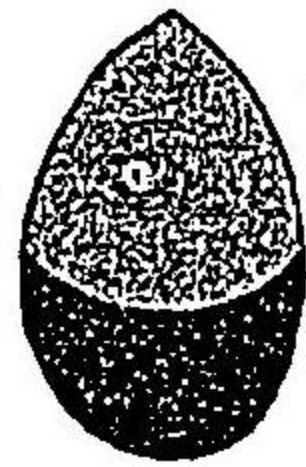


竿頭は青の竹笹葉、竿の長さは八九尺にして浮標の上部五尺下部三四尺とす、浮標は桐材にして右方二尺左方一尺
て淡水漁に用ゆる泛子は水面にて見へ易き彩色あるものを要す此の他鳥の羽莖ウヅ
蜀黍の幹唐桐等の如き輕き物質を用ひて作るものあり又泛子に挿入して縹絲を
繫くものを東京にては「アガキ又シリガ子」と云ふ前者泛子と共に次に圖出す

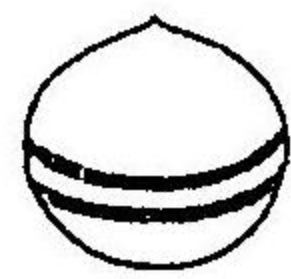
椎ノ實



同



寶珠



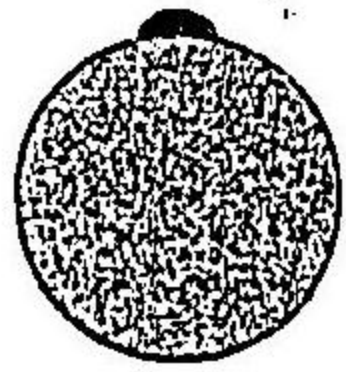
たうがらし



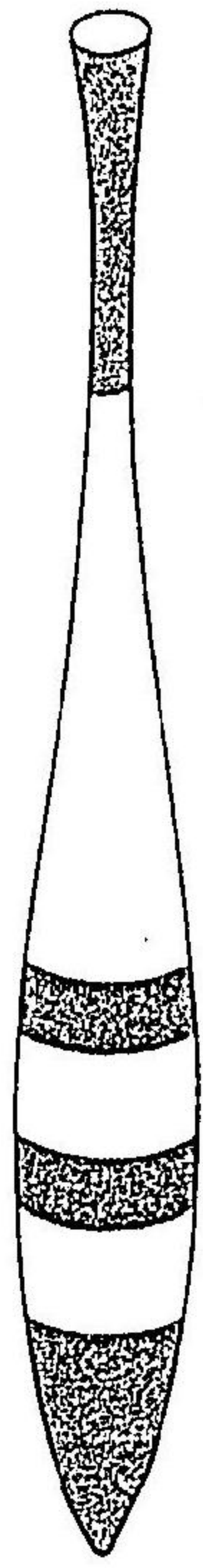
同



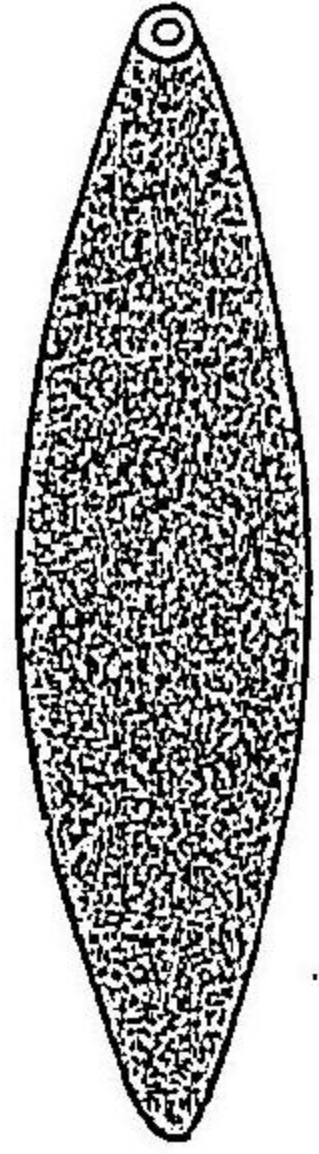
玉浮



鱈浮



引通シ

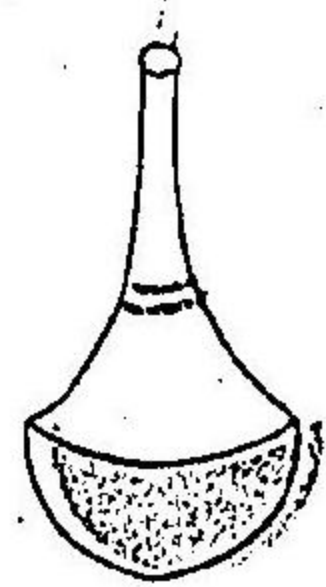


同

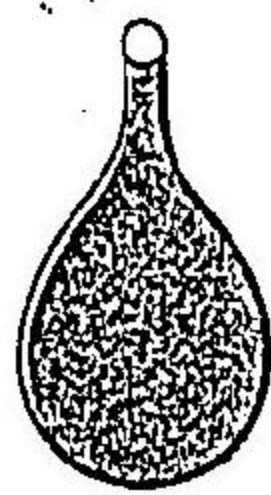


同

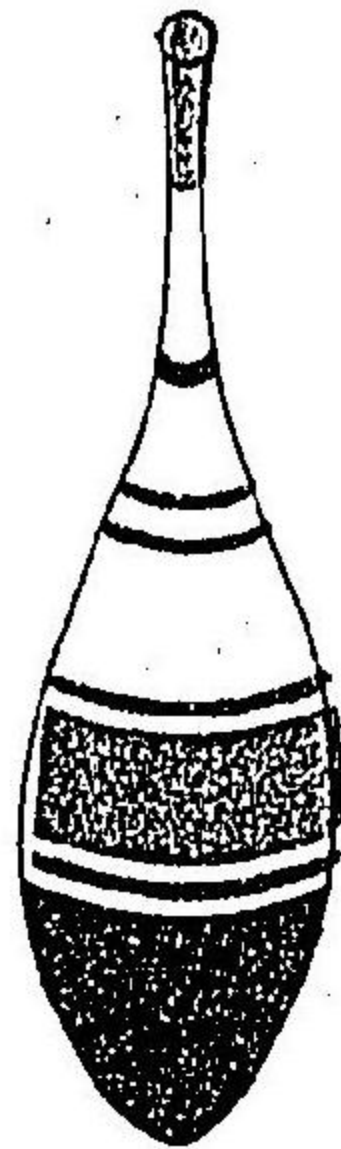




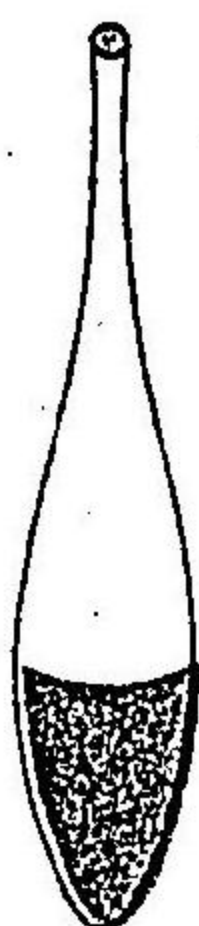
しゃくり



玉とくり



とくり



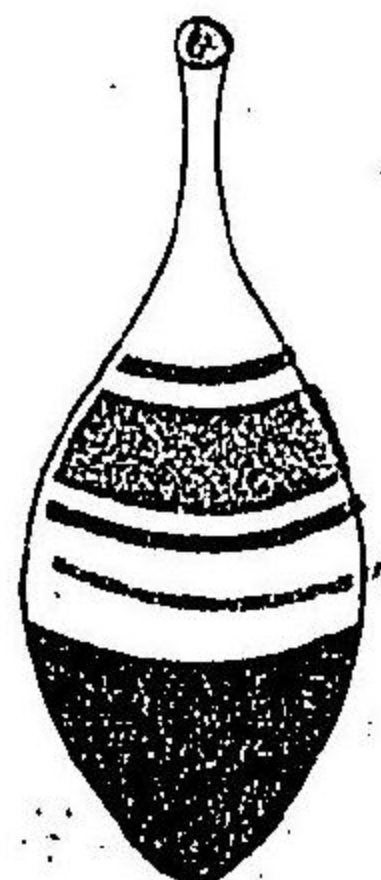
くぼ



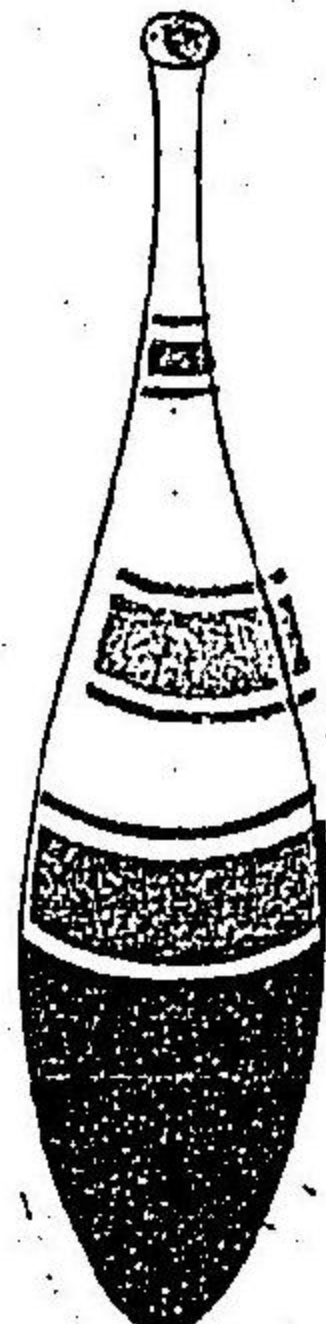
樽盤玉



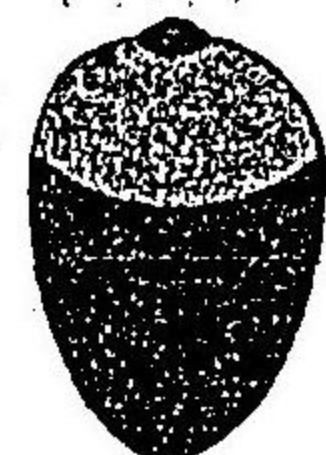
小とくり



同



同



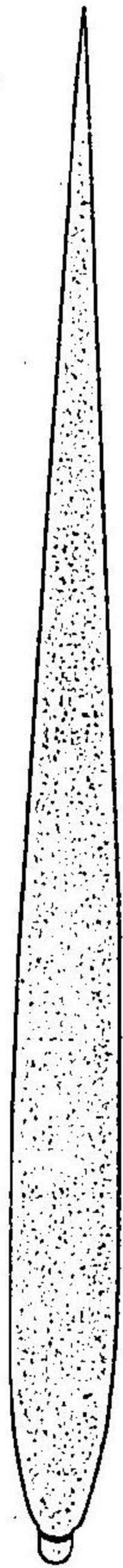
鏡形



しゃくり



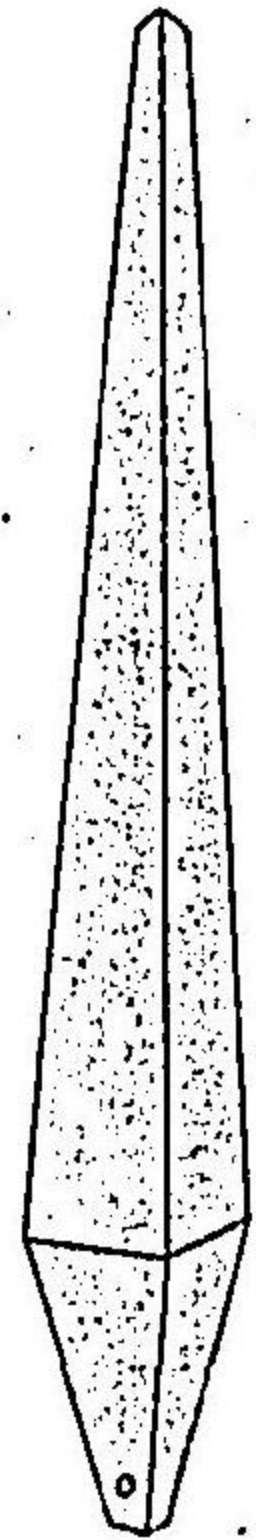
下總國ニテ淡水漁ニ用フル浮子



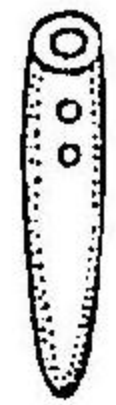
琵琶湖ニテ小魚ヲ釣ル浮子



しりおね



近江國勢多河ニテ小魚ヲ釣ル浮子



あびき



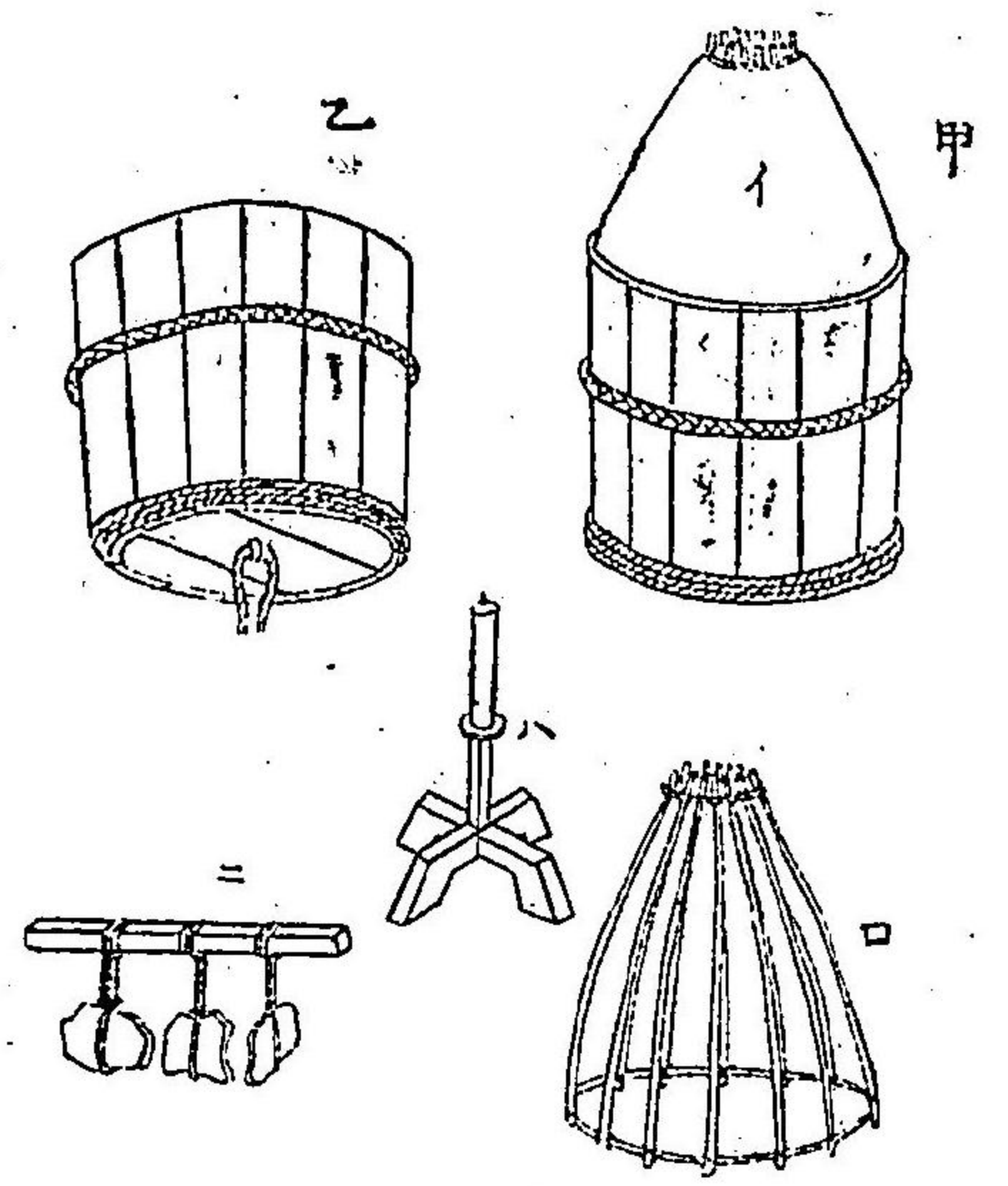
尾張國ニテ河魚ヲ釣ル浮子



しりおね

鹹水魚に於ては浮標を用ふれども淡水に用ゆる者と異なりて甚だ粗大なり大抵空樽又は桐の丸木を用ふ又一種桐板の中央に孔を穿ち其孔に葉の附きたる竹を

浮標 圖六十三



甲 延繩の浮標全形
 (筑前地方にて使用のもの)
 一、火標 高さ一尺一寸位
 二、同上部の覆 高さ一尺四寸下方の廣さ一尺三寸位
 三、火標の燈
 四、鳴子浮標の中に挿入するもの
 五、同上標
 六、上方の廣さ一尺四寸位 下方の廣さ一尺三寸位
 七、挾し立て之を延繩に繋ぎ以て浮標となし其竹の動くを窺ひて魚の羅りたるを知るなり又布片を竿頭に括りたるを挿すもあ

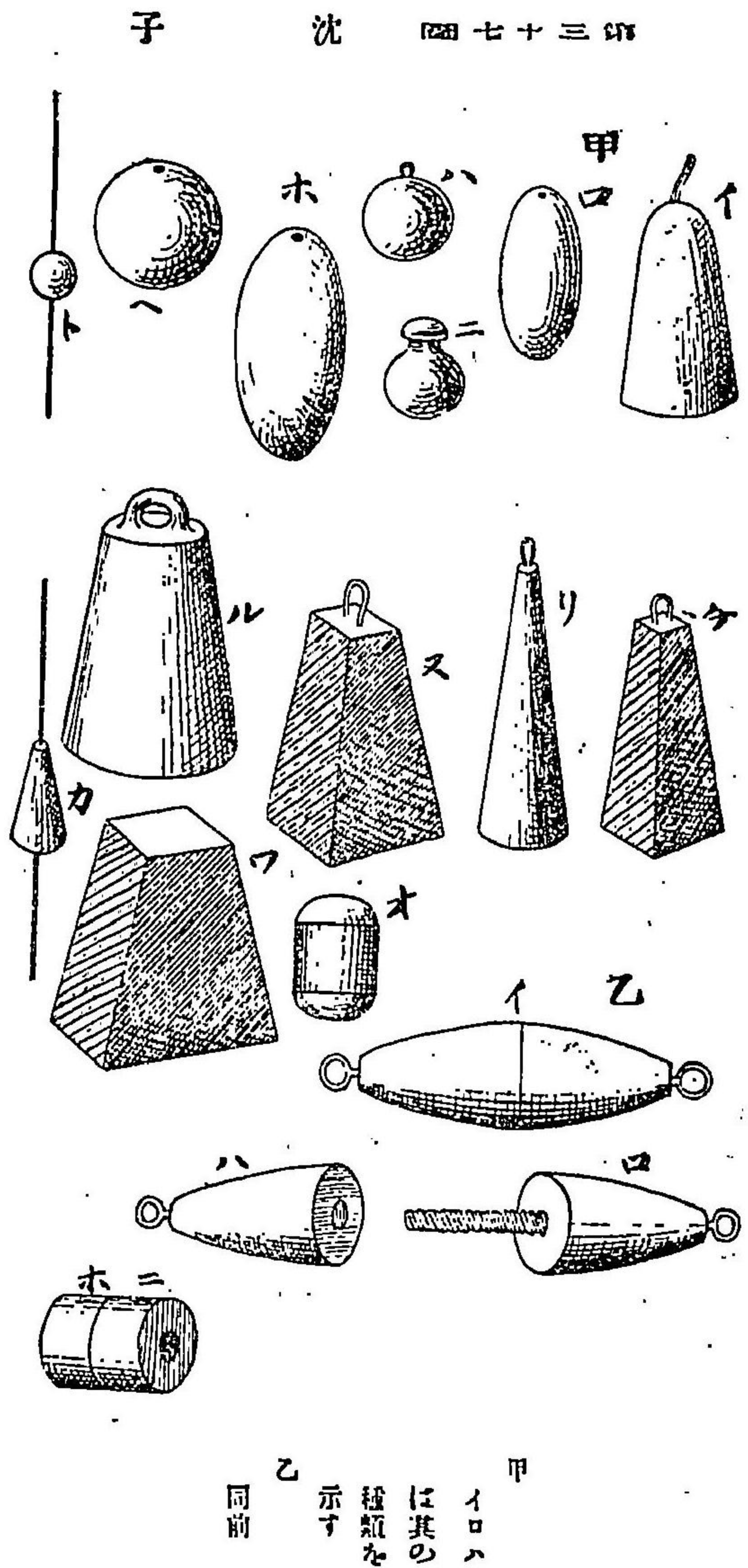
り是等は鮫鮪等を釣るに用ゆる者なり又筑前地方にては火標子とて燈籠を云ふ是れ小桶中に火を點し以て夜間の目標と爲すものなり第三十四圖乃至第三十六圖に示すが如し

第六節 沈子

沈子は即ち緋絲に附す所の錘にして釣鉤を深く水底に沈め水勢の爲めに流されざるの用を爲すものなり淡水漁に在りては併せて魚來り餌を食はんとするを察するの用を兼ね其材料は鉛鐵銅石等を用ふれども就中鉛を以てするもの多しとす是れ鉛は水に入るも其重量を減すること他の金屬の比例よりも少きを以てなり其形は角形丸形聚形鐘形圓錐形等一にして足らず多く淡水漁の竿釣に用ゆるものなれども鹹水の手釣にも亦往々之を用ふ但た鹹水に用ゆるものは形稍々大なりとす今其普通に用ゆるもの二三を第三十七圖に示す此他猶特に魚の種類に因て用ゆる所の異形のもの其條下に於て記述す可し

鉛を以て是等の沈子を製せんには先づ油を鐵鍋の中に塗り然る後鉛を入れ火に上ほす可し此の油を塗るは滓渣の生すること少からしめんが爲めなり若し沈子の色の美ならんことを欲せば錫百分の一を加へ火に上すべし然して其熔解するを待ち鐵の模型に流し込み眞鍮又は銅の針金にて緋絲を着くべき處を作るなり其針金を鉛に鑄込む處は之を扁平にす可し若し扁平ならざれば脱出するの慮あり

ればなり又僅に其一二個を作らんとせば厚紙を以て好む所の型を作り之を灰中



に入れ熔したる鉛を其中に注ぎ込み凝固するを待て灰中より取出し其形若し歪み等を生じたるときは鮫皮にて磨り以て其形を正し後火箸の如きものを以て之

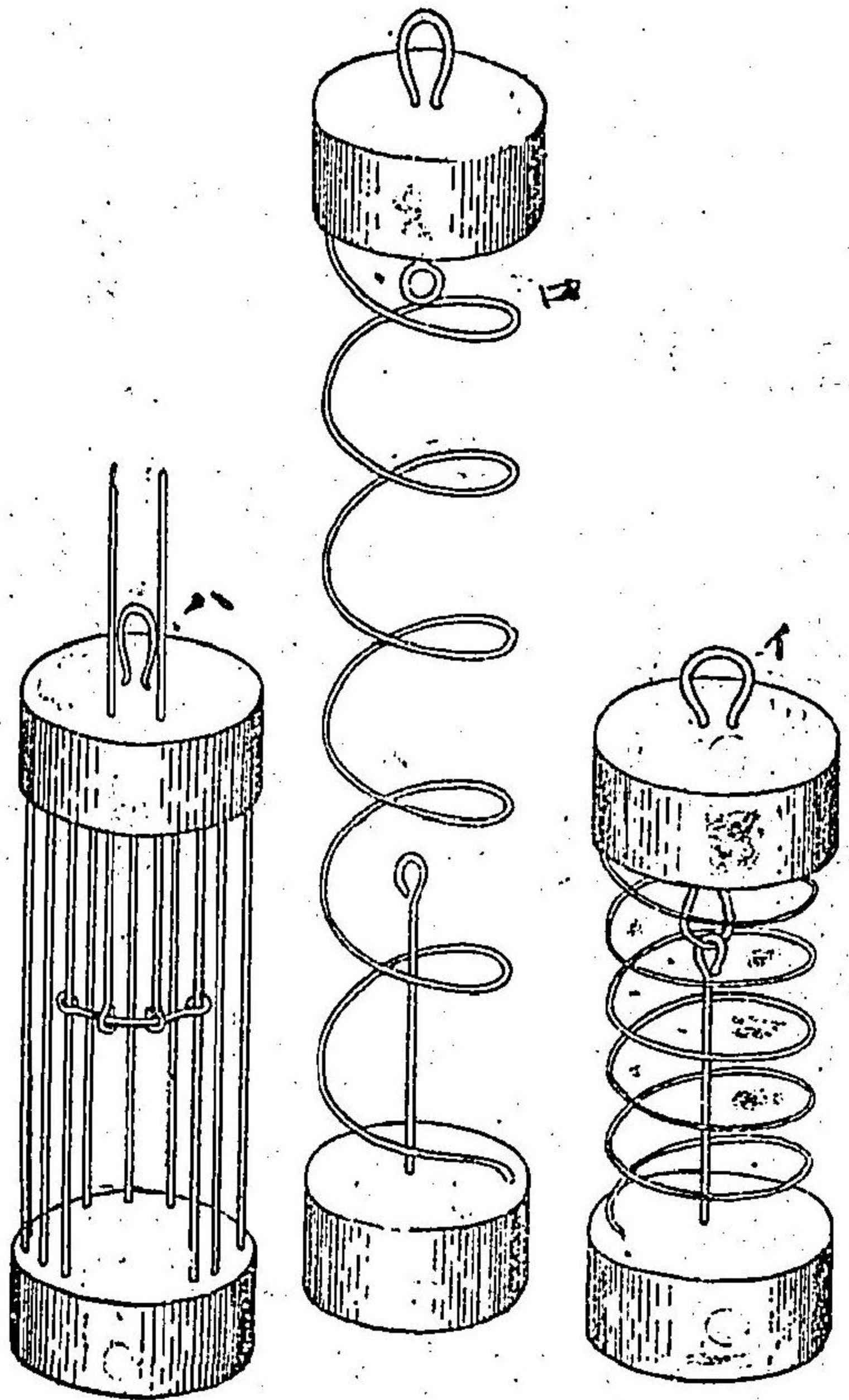
を琢けば滑らかなる可し

歐米にては近世一種輕便なる沈子を創製せり即ち第三十七圖乙に示す如くにして若し釣者イのものにて尙ほ重量を不足なりとするときは螺旋を戻してロハの如くし而してニホの中何れなりとも其要する程をハに振ぢ込み然る後ロを舊の如く螺旋にて嵌入するものとす此の沈子は皆鉛製にして唯ハの螺旋とロの孔のみ容易に腐蝕せざるが爲めに眞鍮を用ふ此の具は自由に其重量を増減することを得べきが故に釣者竿を荷ひ何々湖或は河に縋を垂れんとするに方り大小輕重を異にせる數個の沈子を携帶するの煩なく最も便利なりと云ふ

鹹水の曳繩釣に於ては一種形狀を異にせるものあり深海に栖める魚の手釣には鉛を以て菜萁の實狀に作りたるもの數多を縋絲に附くるものあり之を「ビシ」又「ブスマ」又「グミ」或は「シヅ」と云ふ此沈子は成る可く小形に作り數多く附くるを良しとす又天秤釣天秤釣の事は手釣の部に解説すの沈子に至ては更に其趣を異にす是等は概括して此に論じ難きを以て後章に於て述ぶべし但だ天秤釣の沈子の中最も巧みなるものあり

り即ち舂形ウツリの沈子二個を上下に置き其中間を針金の螺旋を用ひて伸縮すべくなし之を伸ばして餌を其中に入れ而して下方の鉛の中央に一本針金を立て其頭を

子沈の釣秤天 圖八十三



イ ロの結合したるを示す
ロ イの釣を外したる状態を示す
ハ 餌を入る、ロの装置を示せるもの

釣曲せしめ之を上方の鉛に附けたる釣ウツリに懸け螺旋を縮むれば中に入れたる餌は急に出ることなし水に下り後少しづつ徐ろに散出するに因て魚を誘致するに便

するの装置なり又一種此の類にして針金を以て鳥籠の戸口の如くなし是より餌

を入るゝも

のあり共に

沈子と餌囊

との用を兼

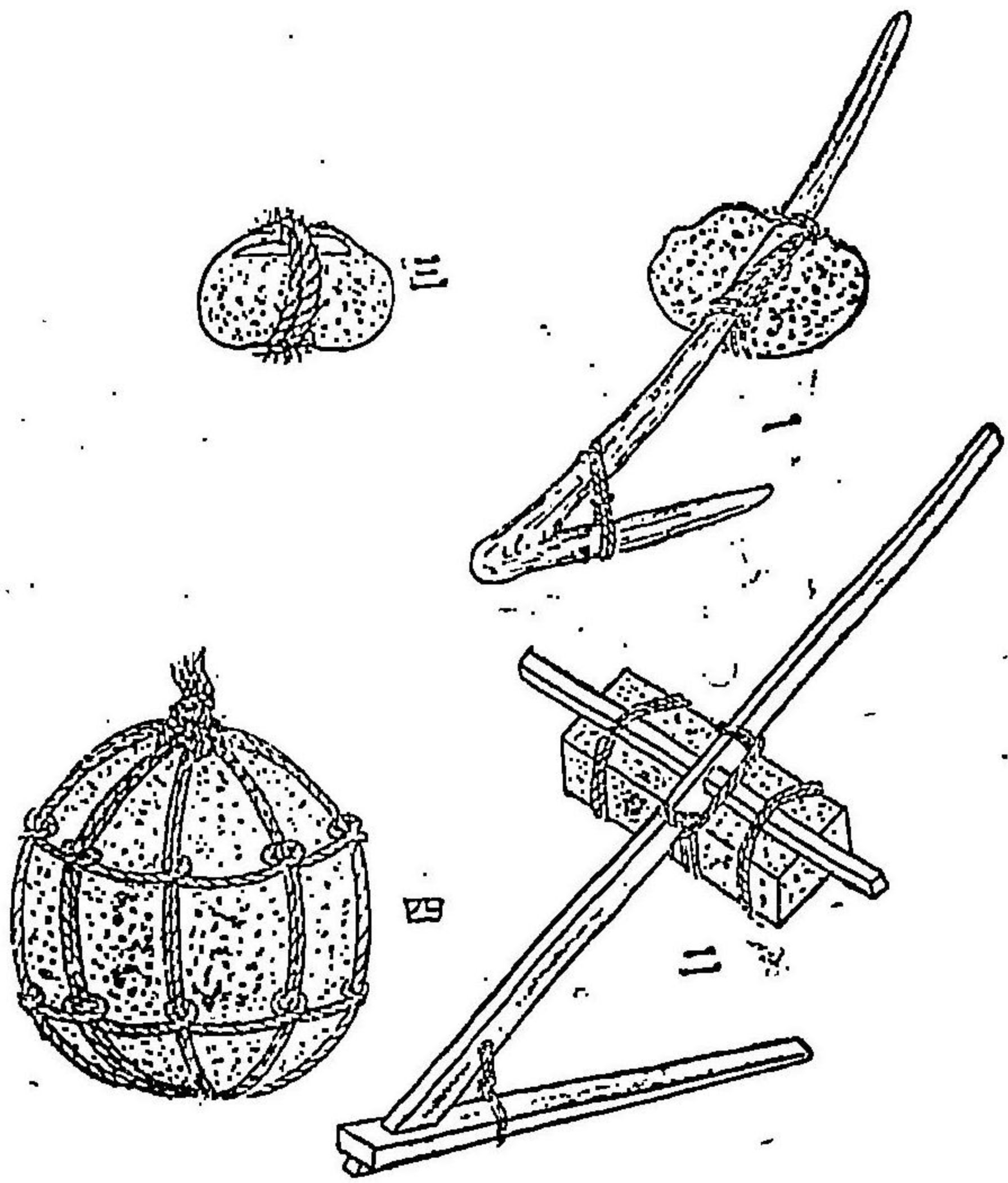
ぬるものな

り即ち第三

十八圖の如

し

子沈の繩延 圖九十三第



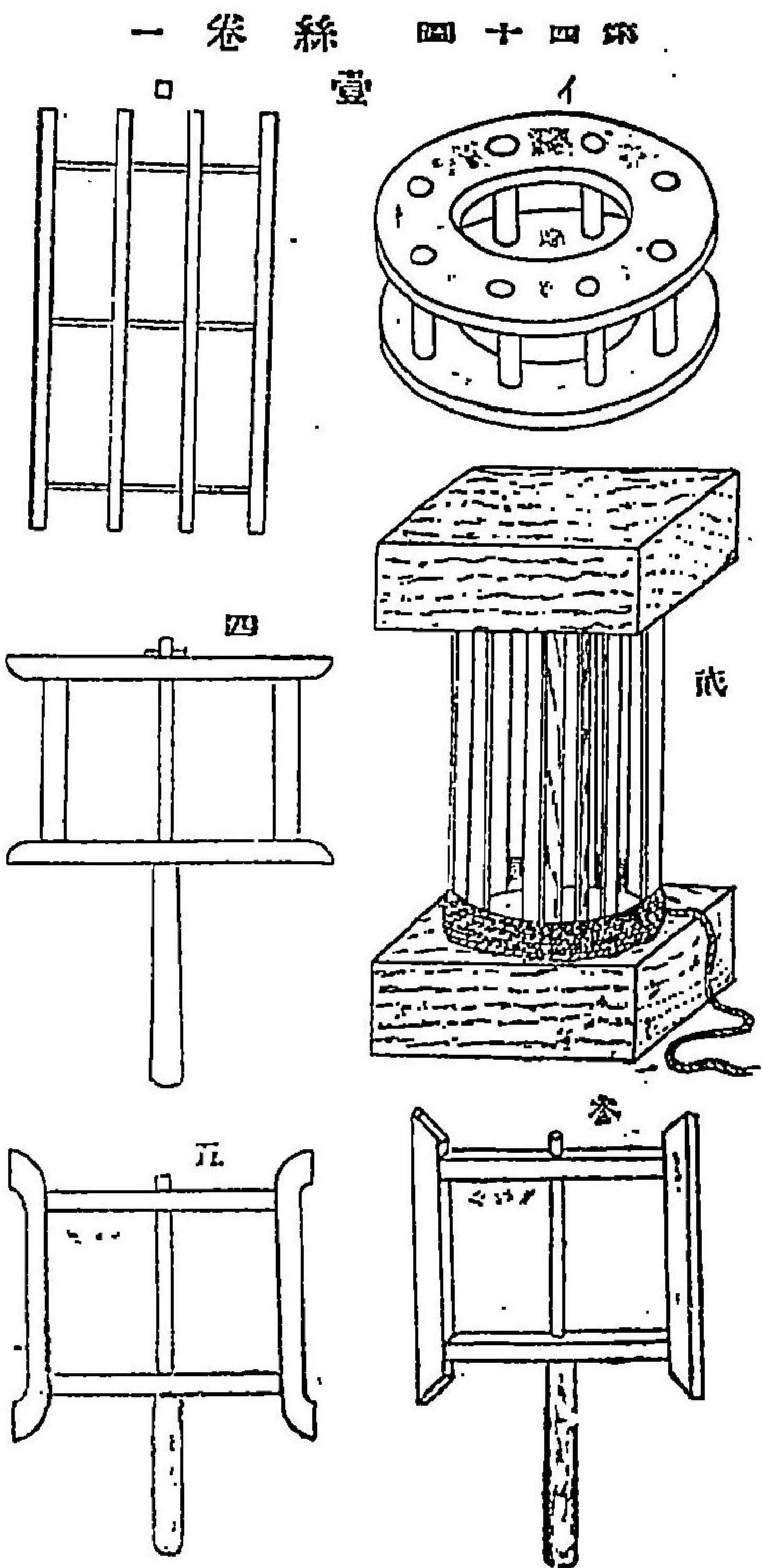
- 一 延繩錠
- 二 同前
- 三 延繩用手石
- 四 同前

して多くは石を繩にて括りたるもの若くは又木に石を縛したるものを用ふ今其

延繩を沈定
するに用ゆ
るものは極
めて粗大に

一二を示せば第三十九圖の如し

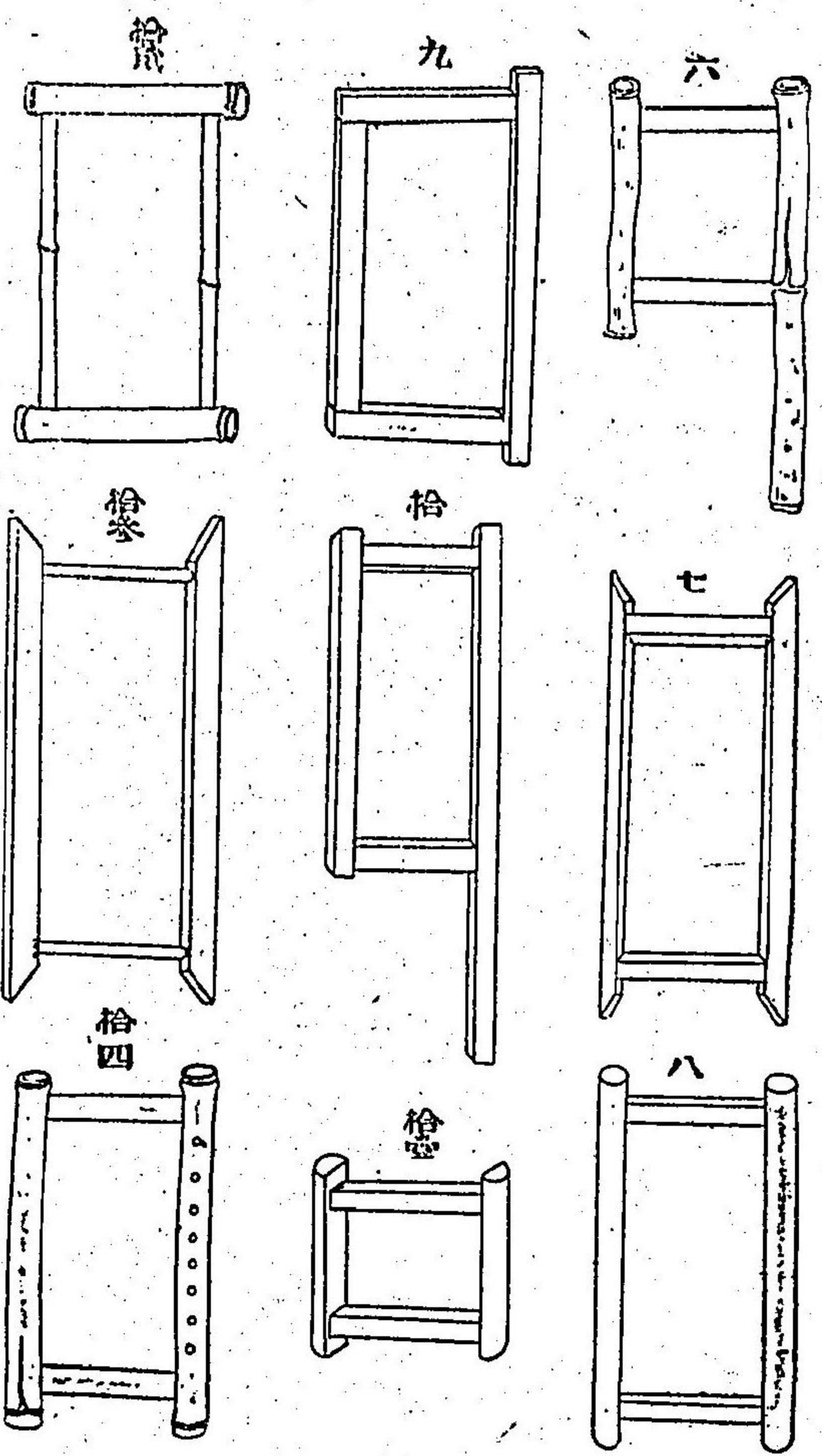
第七節 絲卷



- 壹 東京にて用ゆるもの
- イ 黒鯛釣川
- ロ 小魚釣川
- 貳 土佐國細釣川
- 參 筑前地方にて用ゆるもの (丈七寸)
- 四 紀伊國にて用ゆるもの (丈七寸)
- 五 駿河國にて用ゆるもの (丈七寸)

絲卷は釣綸を巻き收むるの器なり専ら手釣に用ふ蓋し延繩に於ては別に繩器あり又竿釣に在ては多くは縲糸の短きが故に竿の手元に輪を設け之に巻き收め最

も短きものに至りては竿に絡ふて以て收むれば足れりとすと雖手釣に於ては緋
第四十一圖 絲巻二



六 越前國にて使用のもの(丈一尺四寸)出雲國にて用ゆるもの(丈一尺四寸)八 佐渡國にて用ゆるもの(丈一尺一寸)九 紀伊國にて用ゆるもの(丈一尺一寸)拾 同前拾壹 相模國にて用ゆるもの(丈五寸五分)拾貳 土佐國にて用ゆるもの(丈九寸五分)拾參 安藝國にて用ゆるもの(丈一尺余)拾肆 伊豆國にて用ゆるもの(丈八寸六寸)

絲甚だ長きが故に別に之を收むるの器なかるべからず然らざれば之を蓄藏する

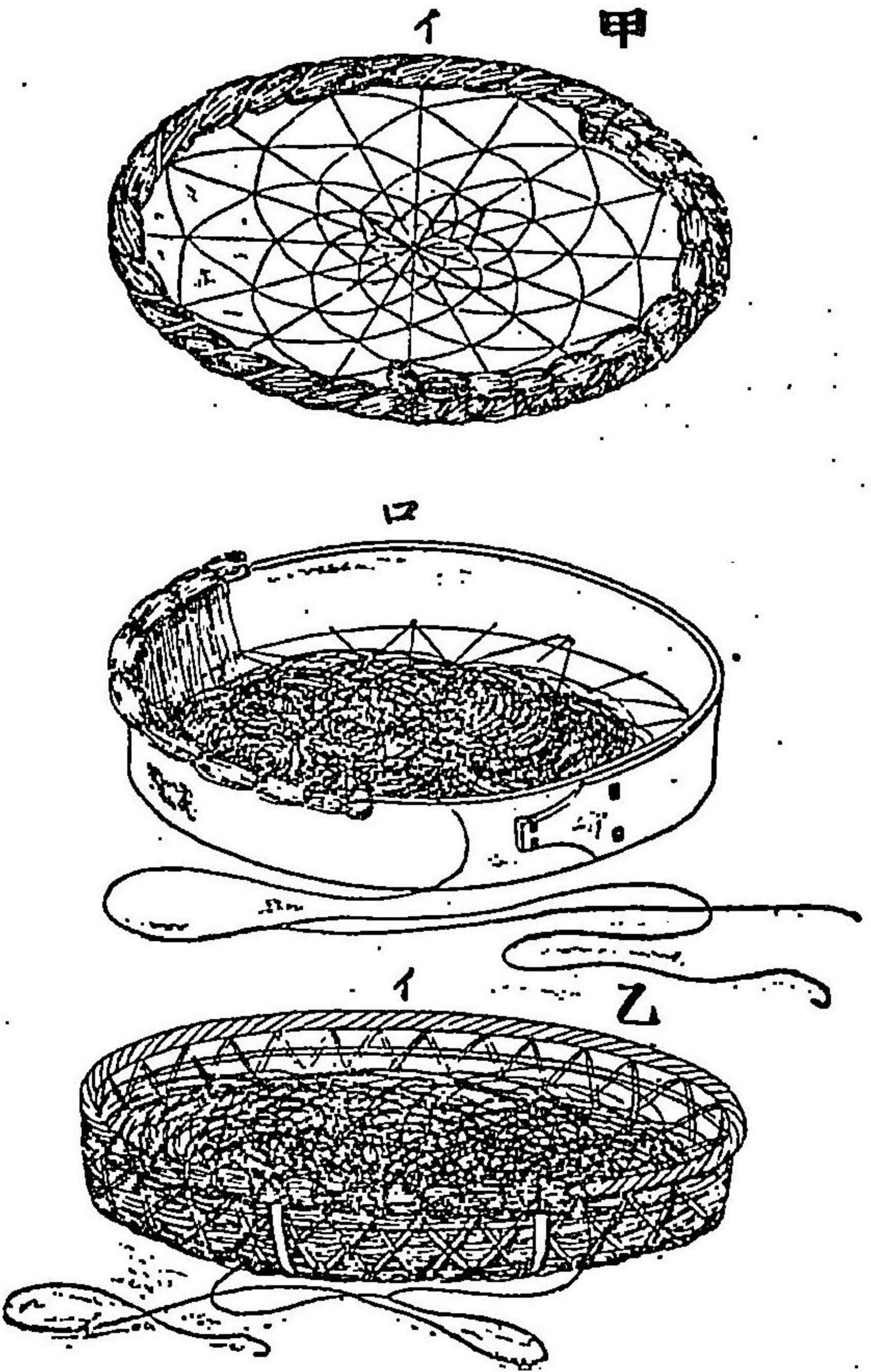
に輒く纏れて容易に整理し難きを以てなり故に稀には竿を用ゆる漁法のもの
と雖緋絲甚だ長きものに於ては之を用ゆることあり其構造は木或は竹を以て作
る形状は或は柵状に作りたるあり或は輪状に爲せるものあれども是等は或る一
小部分若くは遊漁に用ゆるに過ぎずして其鹹水に於ける實業上に用ゆるものは
大抵方形又は長方形の篋なり或は中央に柄を貫き殆んと中の字の形を爲せるあ
り又中の字の一片を缺きたるが如きあり其材も盡く木を用ゆるあり悉く竹を用
ゆるあり或は木若くは竹を交ゆるありて一定せず蓋し地方の習慣に由るなり今
其二三を示せば第四十圖及第四十一圖の如し

第八節 繩器

繩器は延繩を收むるの器なり此の器に繩を收めたる一具を關東にては一鉢と稱
へ尾張邊にては一側と云ひ西國にては一瓶と云ひ北海道奥羽邊等にては一枚と
曰ふ大抵一船にて數具を連繫して用ゆるを常とす其構造は多くは竹を以て周邊
を圓形に作り其縁の全部若くは一部に藁或は眞菰の類を束ねたるを絲にて綴り
付け是れに鉤を刺し底は竹にて極めて粗く編みたるあり又繩にて蛛網状の如く

疎に編みたるありて此に繩を承く然れども或は周邊を楡の曲げ物にて作り底は竹にて疎き格子状に作れるあり山陰道地方には多く之を用ふ阿波國にては周邊

一器繩 圖二十四第

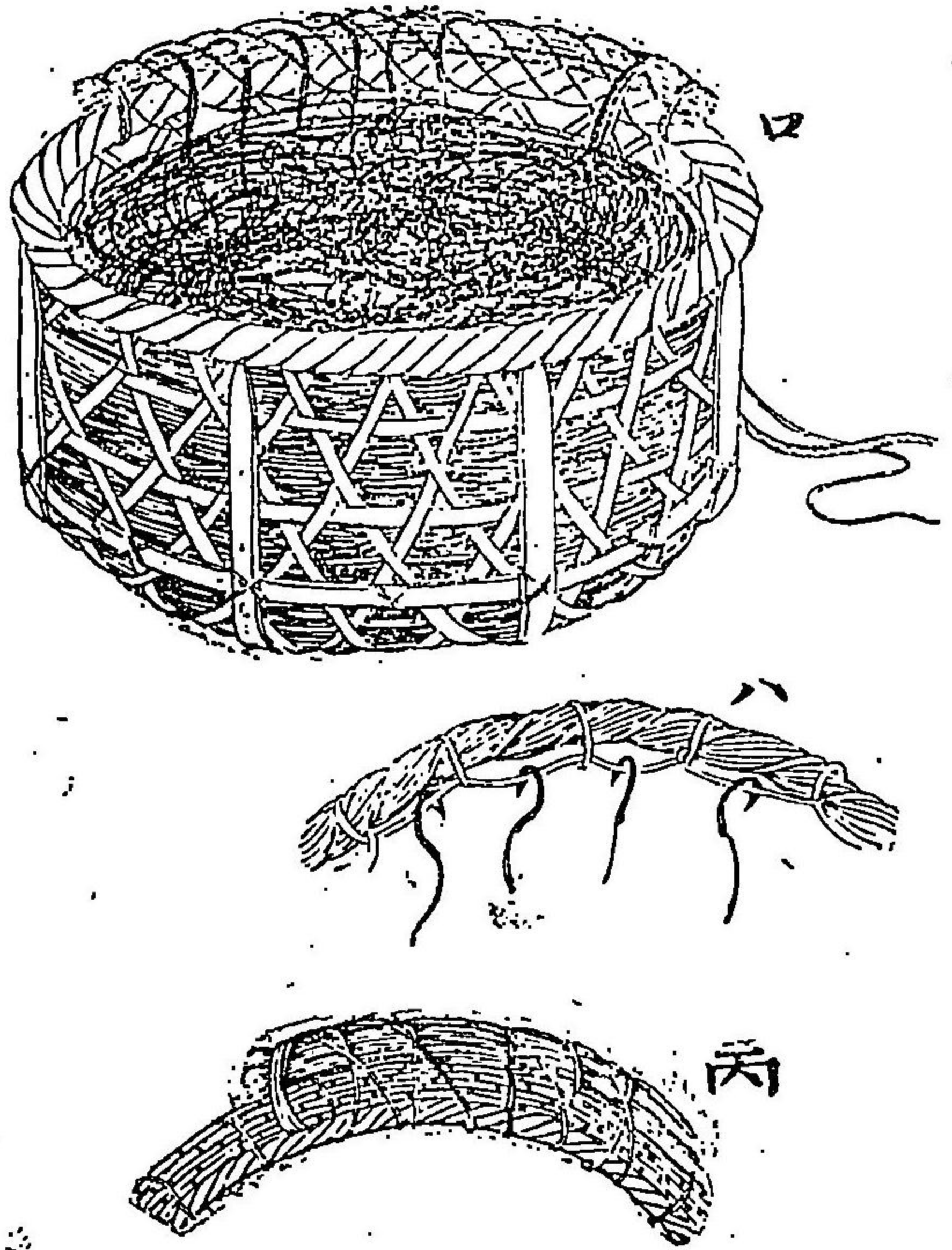


甲 東京地方にて使用のもの
イ 經一尺二寸五分
ロ 經一尺三寸
乙 房州地方にて使用のもの
一 經一尺三寸

を木を以て方形或は長方形に作り底も亦木を用ひ而して鈎を懸くる爲め其縁に

縁目を入れ或は別に繩を架して之に鈎を懸くるあり又筑前國にては楢圓形に作

二器繩 圖三十四第

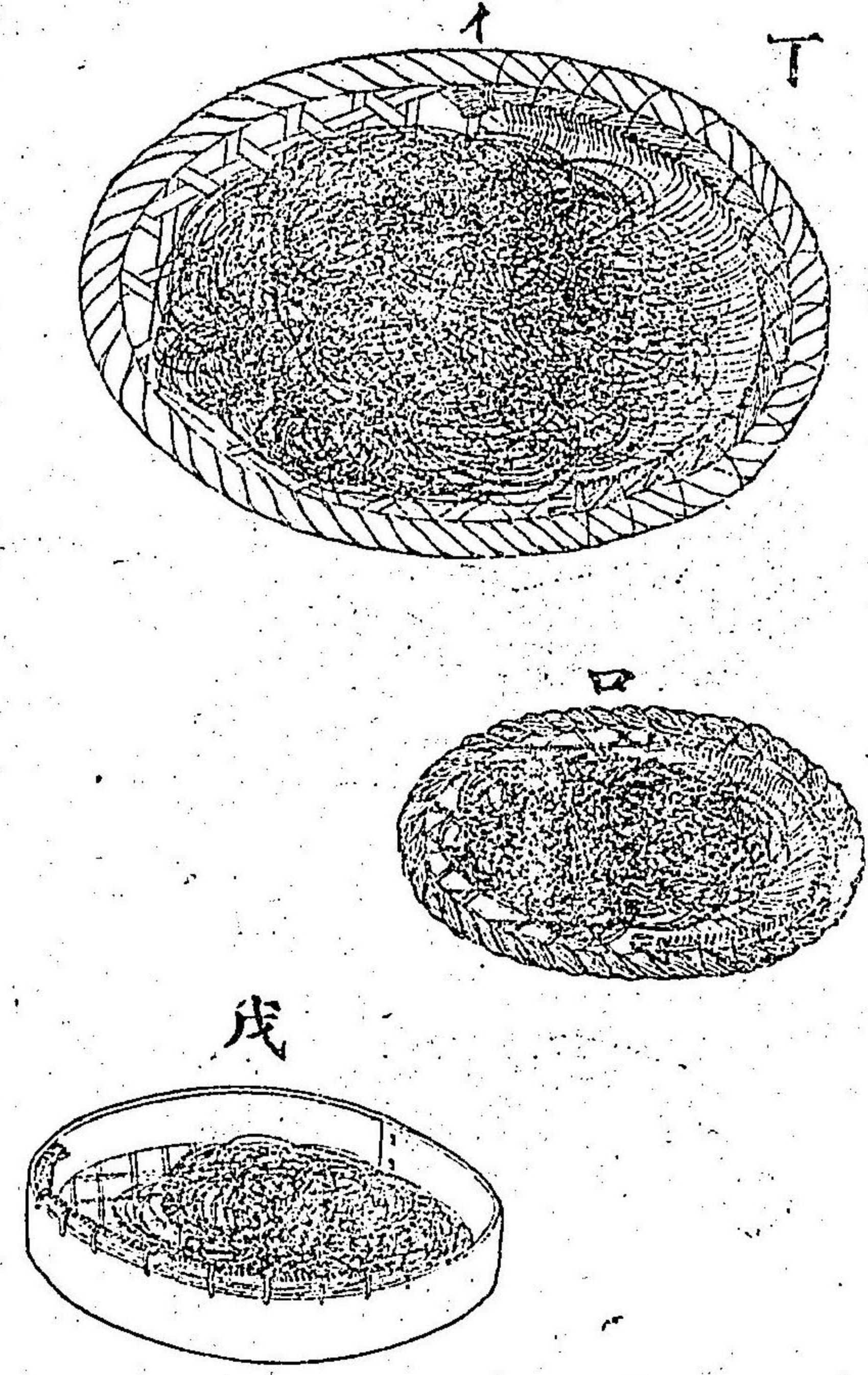


ロ 房州地方にて使用する箱延繩鉢(經二尺五寸)
ハ 同前 鈎懸部を示す
四 同前 相模國にて使用する延繩鉢の鈎懸部の構造を示す

れる籠あり斯く形状の異なるは亦地方の習慣にして使用上に於ては敢て著しき

便否あるを見ず但だ大なる魚を釣る延繩は其積量の多きが爲め繩器も亦深くして大なるを要し繩の積量少なきものは薄くして殆んど皿の如きあり今其大概を

三器繩 圖四十四第

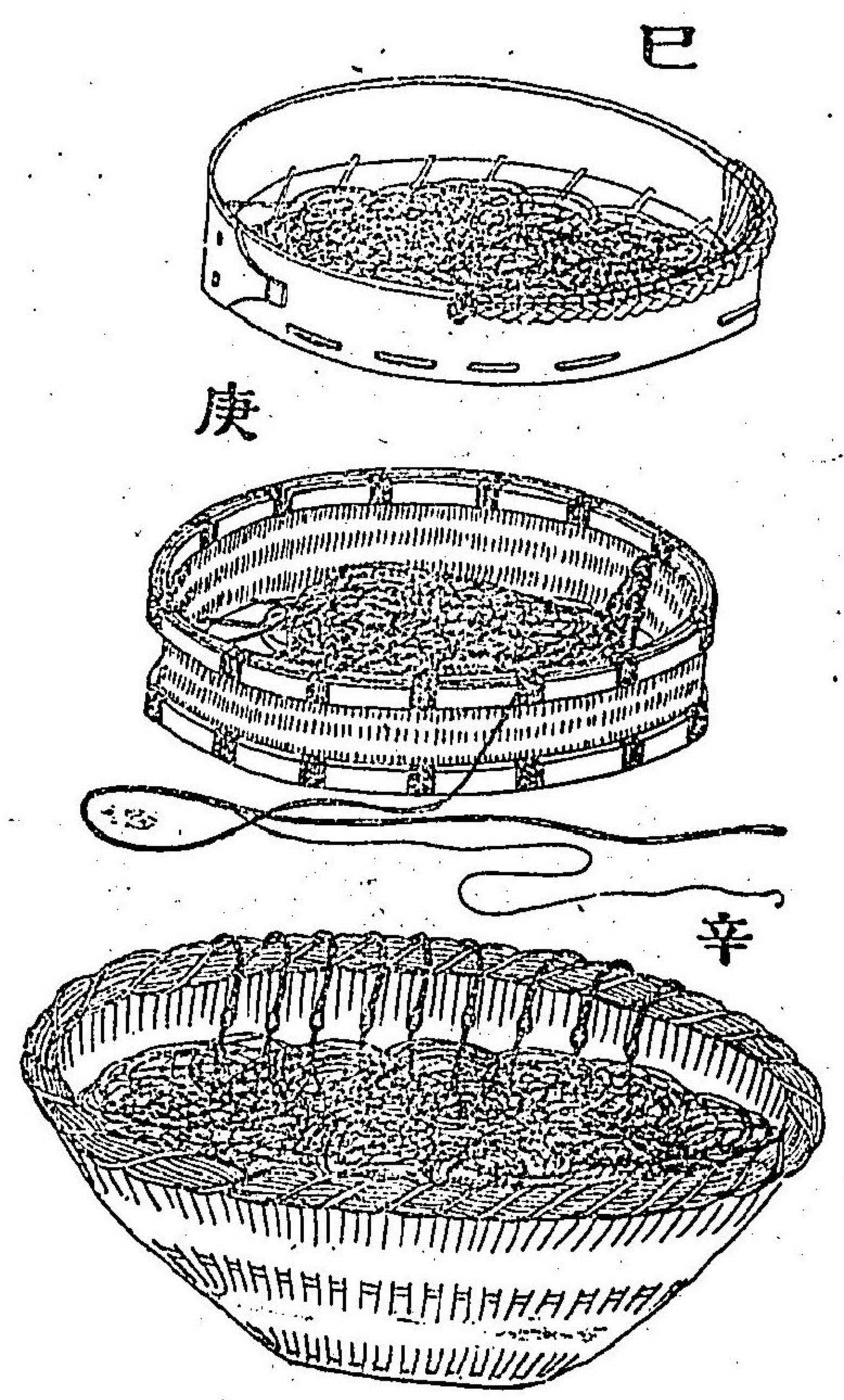


丁 越前地方にて使用する延繩鉢
イ 經 二尺五寸
口 經 一尺三寸
戊 出雲國にて使用する延繩鉢
經 一尺三寸

圖出せば第四十二圖乃至第四十六圖に示すが如し

釣具の總體に就ては前來既に綱領を叙し畢れりと雖も尙ほ其漁業を爲すに缺く

四器繩 圖五十四第

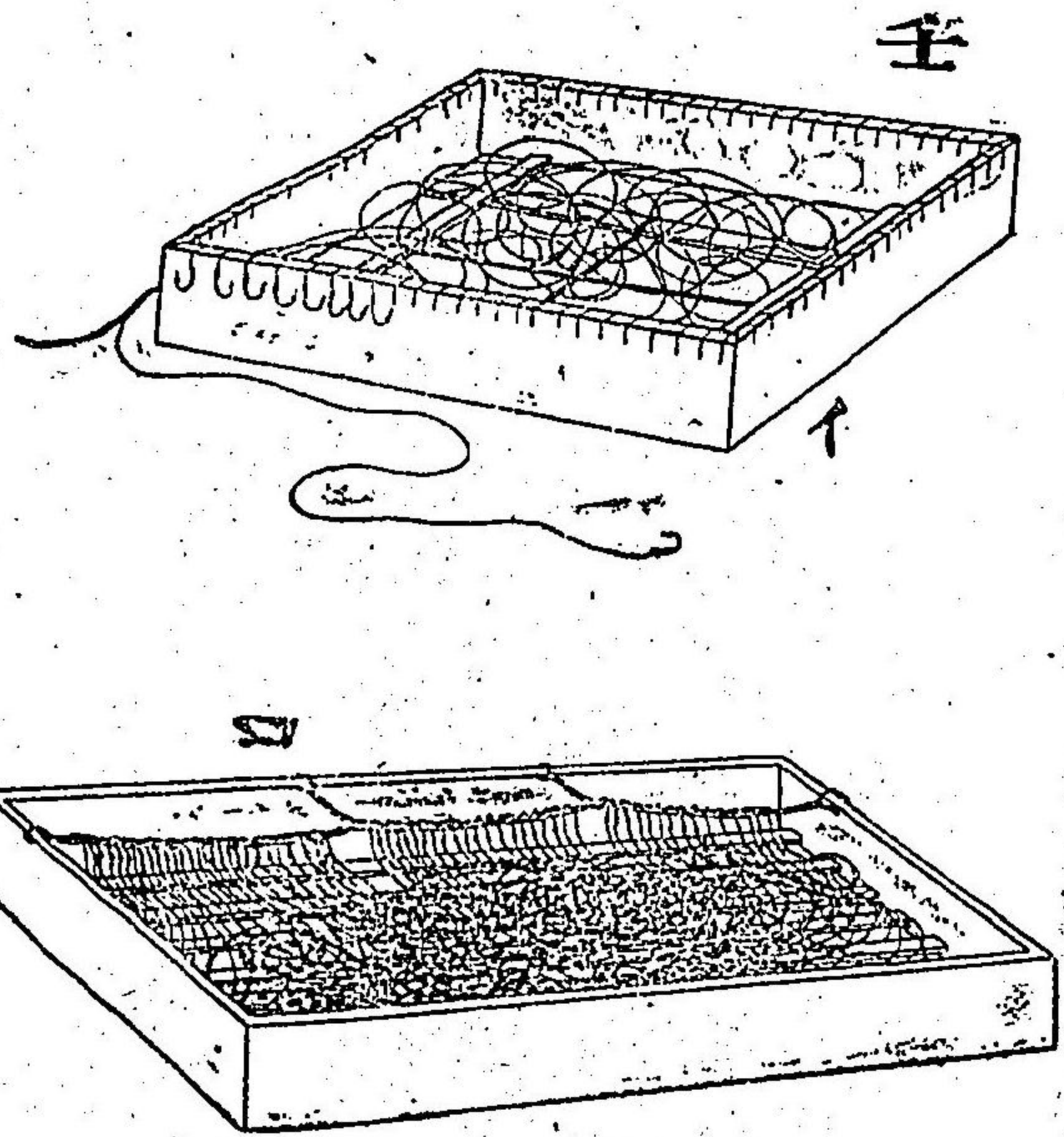


己 石見國にて使用する延繩鉢
經 一尺三寸
庚 長門國にて使用する延繩鉢
經 一尺三寸
辛 筑前國地方にて使用する鮫延繩
圓形にして長經二尺五寸短經一尺三寸

可らざるの屬具あり例へば釣餌を容るべき桶類の如き細魚を釣るとき之を收むべき筥笥の如き魚を釣揚ぐるるとき水際に於て之を抄ひ捕るに用ふる摺網の如き

又大魚に於ては之を捕獲するとき引懸くべき懸鈎の如き是なり又或る種類の釣

五器繩 圖六十四第



器服装等の部に於て記述す可し

壬 阿波國にて使
用する延繩鉢
イ 經一尺
ロ 長經一尺五
寸
ハ 短經一尺

漁に於ては特別なる漁衣漁籠等を要するものあり此の類猶多しと雖とも是等は用

明治四十四年十月四日印刷

明治四十四年十月七日發行

農商務省水産局

東京市芝區三田四國町二番地

印刷人 野田千太郎

東京市芝區三田四國町二番地

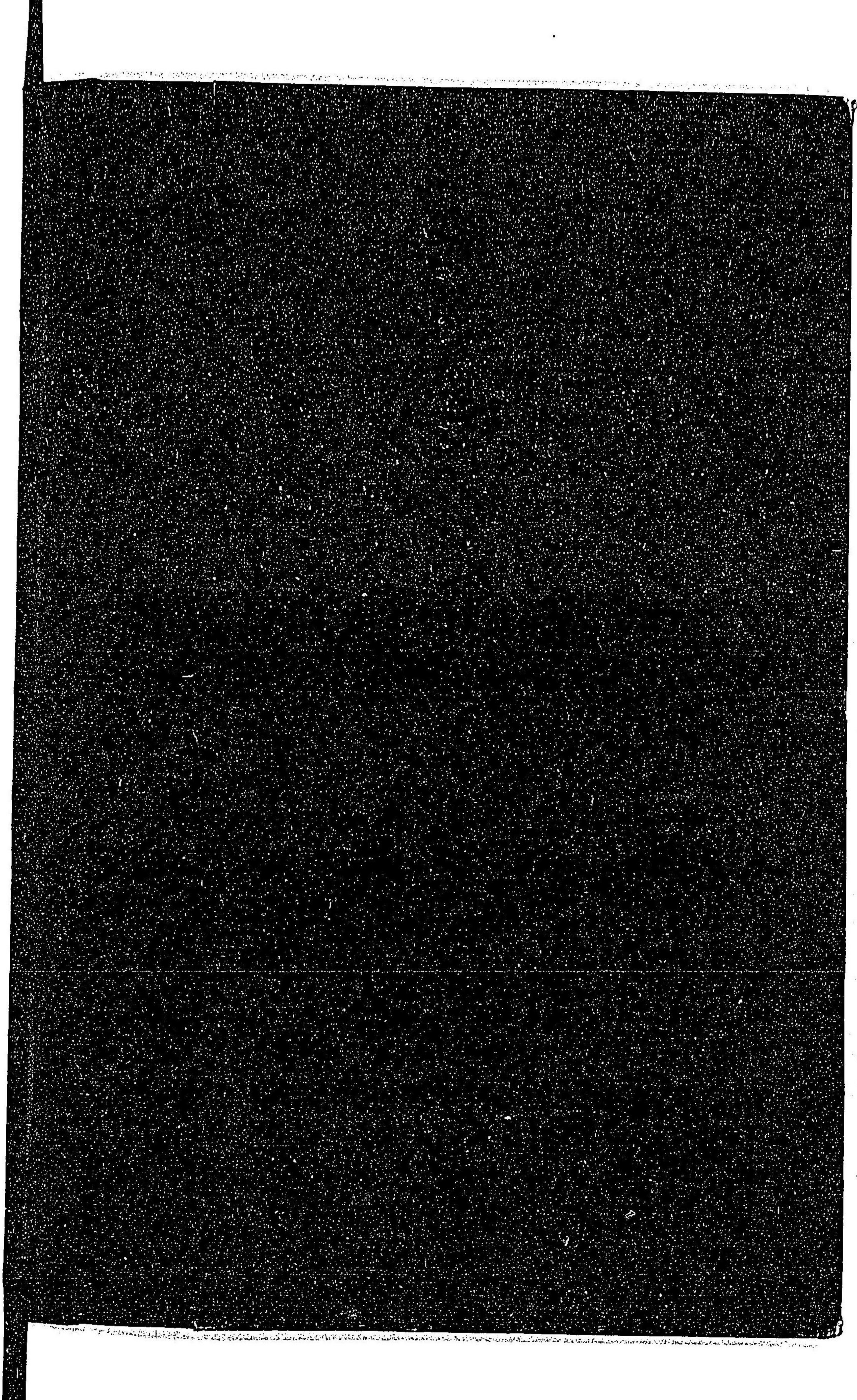
印刷所 合資三田印刷所

33783
3

5

327

216



327
216

27. 2. 12